



Title	ウイグル文献に導入された漢語に関する研究
Author(s)	庄垣内, 正弘
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1987, 17, p. 17-156
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ウイグル文献に導入された漢語に 関する研究」

庄垣内 正 弘

1. 序
2. 漢語音の形式
3. 通時的考察
4. 結語
5. ウイグル文献中の漢語リスト

1. 序

ウイグル文献に使用された言語、ウイグル語は、東方に隣接した大言語である漢語の影響を強く受け、かなりの量の漢語語彙を導入した。

ウイグル語中の漢語に関しては、今世紀の早い時期の記述、P.Pelliot(1912)と H. Maspero(1920)とがあるが、一般には B. Csongor の研究が知られている。Csongor(1952, 1954) はウイグル文字で書かれた文献中の漢語を収集し、その中から唐代に導入されたと推定できる形式を抽出し、その性格について記述しようとした。この記述は当時としては優れた内容のものであり、多くの研究者によって引用されてきたが、現在では不十分な点が多く全面的な書きかえを必要としている。Csongor の時代に比べて更に多くの文献の利用が可能になったし、その性格もよくわかってきた。Csongor が唐代形式として一定時間内に収めようとした漢語形式は多くの変種をもっていた。それらは *dialect* の違いということで片付けられた。しかし、各文献の作成年代の検討によって、現在では通時的観点からの形式上の差異であることが理解できる。又、採用された形式には漢語として認定し難いものも含まれていた。たとえば、UiguricaII の *lisib* は痢疾、III の *bägjān* は默然の音写とし、彼の議論において重要な役割

を果しているが、lisib はトカラ語、bägjān はサンスクリットから導入された形式と考えるべきである (cf. 註23, 62). 又Csongor はウイグル語中の漢語をチベット語文献にみられる漢語形式とも比較しているが、何故か羅常培(1933)を使用しなかった。むしろ比較の対象として漢音に重点を置き、ウイグル語中の漢語形式を “kan-on-type dialects” と認定した。この漠然とした結論は受け入れ難いし、上に触れたように多くの欠点も含んでいるが、Csongor の記述がウイグル語中の漢語研究の基礎となりうることは確かである。

ウイグル語に導入された漢語の研究に最も役立つ文献として『大慈恩寺三藏法師伝』を挙げる⁽¹⁾ことができる。この文献は五代末から宗初の間にウイグル語訳された⁽²⁾と推定できるもので、その時代の漢語音形式を大量に含んでいる。完全なかたちでは残されていないが、ウイグル文献としては保存の良い方である。十巻中、四、五、七、十の各巻は全部ではないがテキストが提出されているので漢語形式の収集は容易である。⁽³⁾他の部分も漢語原典との対照によって写本から比較的簡単に漢語形式は探し出せる。⁽⁴⁾ウイグル語への訳者 Šinǰo Sāli は他に

(1) 「慈恩伝」の断片は1930年頃南新疆より出土した。正確な出土地点はわかっていない。現在は、北京図書館 (248葉)、フランス・ギメ博物館 (123葉)、ソ連科学院東方研究所・レニングラード分所に保管されている。他に異本の極小断片2葉が東ドイツのトゥルフアン蒐集集中に見付かっている (cf. Kudara-Zieme 1984)。

(2) 漢語口語形式ではなく漢字音形式であったと考えられる。漢字音がウイグル人自身のものであったか否かはわからない。cf. PP.121~123. 以下、「漢語音」の中には便宜的に漢字音も含まれる。

(3) 第4巻: Toalster (1977) 第5巻: Gabain (1935) Tuguševa (1980) 第7巻: Gabain (1938) Arlotto (1966) 歌 (1979, 1980) 第10巻: Tuguševa (1974) Tezcan (1975)。

(4) Toalster (1977) の XXX-Xli, Tabelle I には「慈恩伝」中の漢語形式のリストが掲げられている。又、Xlii-XIV, Tabelle II には中古音から「慈恩伝」への変化について13項目の記述がある。漢語リストは有用ではあるが、そのままでは使えない。まず、ウイグルに導入された形式に対応する中古漢語には Karlgren (1923) をあてているが、実際にはどの漢字音に該当するのかわからない場合が多い。たとえば、Kap. IX (55) には1172, t's'iang čo と記されている。しかし Karlgren 1172, t's'iang には章彰樟漳漳鑿の6漢字が並んでいる。Toalster の記述ではこの内のどれを指しているのかわからない。これが章を指すことを知るためには、Kap. IX のファクシミリ中に čo を見つけ出し、文脈を頼りに漢文原典から上掲6漢字の1つに同定しなければならない。又、ウイグルへの反映形やもとの漢字の指定には誤りも少なくない。たとえば、Kap. IX (63) には 284, j'eng yu が書かれている。j'eng は英を指すが yu は i と読まれるべきだ。同じ IX の (68) 514, lāng lang は郎を指すが lang は lo と読まれねばならない。Kap. VII (27) にあてられた 49 b'uo' は Karlgren の哺か捕を指すが、実は蒲が正しく、中古音には Karlgren の 'p'uo を与えねばならない。又、Kap. VI (Paris) として掲げられた (154) から (172) までは Kap. VII (Paris) に入れねばならない。このように Toalster の掲載した漢語リストは再調査なしには使えない。Tabelle II の13項目も、全く大雑把なもので、しかも正しくはない。たと

『金光明最勝王經』『千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經』など漢訳からのウイグル語訳も行っており、漢文には習熟していたとふつう考えられているが、『慈恩伝』に関するかぎり、かなり多くの誤訳がみられる。誤訳中には漢語音を写した部分も含まれている。以下に若干の例を漢語原典との対照によって示してみたい。

1. (時帝在洛陽宮。表至，知法師漸近，) 敕西京留守左僕射梁國公房玄奘使有司迎待。法師承上欲問罪遼濱，(恐稽緩不及，乃倍途而進，奄至漕上。)
(第五卷大正 P. 252 上)

kidinki *kyčyww* baliq bāg-i soltinqi puγy-a il limi fou baγlir
kücin bāg-kā samtso açari kälmiş: ötrü bāg-lār iding-lar tip il limi
bāg bu y(a)rliγ-ir tāginip vintsoi leupin atlir iki bāg-lārin idγalir
ardı.....(レニングラード 156~13 Tuguševa 1980 P. 30)

このウイグル語は次のような日本語に訳せる。「背後の(留守の) *kyčyww* 城の役人左僕射(梁)国公，房という姓の力ある役人に，三蔵法師が来た，従って役人らを遣わせと。(梁)国公はこの命令を受けて，問罪，遼濱という二人の役人を遣わした。……」

漢文の意味するところと，ウイグル語訳の間にはかなり大きな異なりがみられる。法師承上欲問罪遼濱は「法師は上(天子)が遼の濱に罪を問うこと(派兵)を欲しているのを承り」という内容を表わしている。これに対してウイグル語は問罪と遼濱を共に人名にとった。Tuguševa も同様に人名と考えた。更に、

↘ えば 2-h には鼻音声母の変化に関して

$$\begin{matrix} m > b \\ ng > g \\ n > d \end{matrix} \left. \begin{matrix} \\ \\ \\ \end{matrix} \right\} \text{ nicht in allen Fällen}$$

のごとく記しているが、m には輕唇音化のものが書かれていないし、n > d の変化例は「慈恩伝」には存在しない。この極めて簡単に書かれた13項目はほとんど意味をなさない。一方、Toalster より先に、馮家昇(1953) pp. 29~30 には「慈恩伝」中の数十の漢語が抽出されており、Csongor によっても利用された。この漢語リストの中には、*kyyk* を *ging* 極、*tyk* を *tir* 德、*kwynk* を *kung* 宮のように誤読も含まれているが、漢語の所在を知る上では役に立つ。ここでは、北京図書館の影印本(1951北京)とギメ博物館所蔵の断片の複製写真とを用いて、既出のもの以外にもかなりの量の漢語形式を得ることができた。

- (5) *kyčyww* は西京を指すが、西 siei 京 kian の音写なら *syky* (*sike*) と表記されるはずである。一方、漢文第6巻初頭では西京に京城(*kian* *zi:ŋ*)を与えているが、京城なら *kyšy* (*kišy*) と表記されたにちがいない。Tuguševa は京兆とする。

上の pu₇y-a il limi fou に対して bo₇i-n-il lim-yū と転写して、これに「房玄齡」を当てている。しかし pu₇y-a は「僕射」の音写(cf. P.78), il はウイグル語「国」, limi の lim は「標」の音写(cf. P.64), -i は人称所有の接尾辞であり, il lim-i で「国の標」, おそらく「(梁)国公」を表わす。

2. 令法師移就翻譯, 仍綱維寺任。法師既奉令旨, 令充上座, 進啟讓曰。(第七卷 大正 P. 259 中)

samtso ačari₇ yana ol yan-ta kälürüp bitig aqtar₇alī kūsüş öritip basa yana qovisi-i sangram-m(tä)ki žim fabši-i (atl)₇ nomčī ačariqa (trkă)n tigin ayip..... (北京 2a 3~9 耿 1979 P. 256)⁽⁶⁾

ウイグル語が「綱維寺」を qovisi (sangram) のごとく寺院名とし、「任」を「法師」と結合させて žim fabši とするのは誤りで、これについては耿氏も指摘している(P. 256)。「綱維寺任」は「寺の任を綱維する」の意味を表わす。

3. 敕遣供奉上醫尚藥奉御蔣孝璋, 鍼醫上官琮專看, (所須藥皆令內送。)(第九卷 大正 P. 269 下)

qan äsid(ip) tärkin tavrati ičgärü tapi₇či baštinqi otači ot bilmäk-tä turulmäs bilgä tsö ba₇lī₇ hačö atl₇ otačī₇: yignä itmaqta uzanmaq-lī₇ üstünki bāg su₇ ba₇lī₇ čüen qan (a)tl₇ otači-ī₇: bu ikigü-ni idu (yar)līqadi: (北京 88a 2~11)

「汗は聞いて急いで供奉上醫尚藥奉御⁽⁷⁾の蔣という姓の孝璋という名の医者⁽⁷⁾を, 鍼を打つことにおいて巧みな上位の官, 琮という姓の專看という名の医者⁽⁷⁾を, この二人を遣したまうた。」

「上官琮專看」を「上官」で切り, これを「上位の官」とウイグル語訳し, 「琮專看」を人名として音写した。しかし, 「上官」は複姓で「琮」が名である。

「專看」は「専ら見る」の意味をもっている。

4. 至十二月七日, 通事舍人馮義宣敕垂許。(第十卷 大正 P. 276 中)

(6) 耿氏は kūsüş を kösüs, qovisi-i を qawisi-i, sangram-m を sangran-m, žimをzim とする。

(7) 「供奉……奉御」までは直訳すると「内部奉仕人の頭の, 医薬を研究するのに止むことのない学者」のごとくである。

č(a)xšap(a)t ay yiti yangi-qa sav ötkür-däci ordu-daqi kiši fun
baγliγ gitsüen atl(i)γ bāg aγizinta(北京 H5b5~9 Tezcan 1975 425~429)

「十二月七日に通事舍人、馮という姓の義宣という名の官の口に……」

「馮義宣敕」は最初の二字「馮義」が姓と名で、「宣敕」は「敕を宣べる」の
意味を表わす。Tezcan はこれを誤訳とせず、gitsüen を名と認めている(P. 152)⁽⁸⁾。

5. 若無常後，汝等遣我宜從儉省，可以籛蔭裏送，仍擇山澗僻處安置，（勿
近宮寺。）（第十卷 大正 P. 276 中）

m(ä)n ölmis-tä kin mäning qramin qamiš baγ-qa žin čaγ šan
atl(i)γ taγda.....rtip (北京 64a 7~10 Tezcan 1975 454~457)

「私が死んだ後は、私の死体を蔭に(包んで……)仍擇山という山に……」

Tezcanは「žin čaγ šan という山がどの山に相当するものかわからない」と
述べているが(P. 96 註 456)、もちろんこれは山名ではなく、「仍擇山澗僻處」
は「すなわち山澗の僻處を擇んで」という意味を表わしている。

このような固有名詞に関する誤訳と、その漢語の音写とは、Šinǰo Säli が翻
訳に際して定着していた名称を用いたのではなく、原典の漢語を当時の発音形
式に従って写し入れたことの証拠となる。すなわち、『慈恩伝』中の漢語形式
は、基本的には訳出当時の漢語（漢字）の発音形式であったことを示している。
この一併時態上の漢語形式に関する正確な記述は、他のウイグル文献中の漢語
形式の性格を知る上でも重要な役割を果すことになる。

以下では、第2章でウイグル文献中の漢語音がどのような形式をもっていた
かを『慈恩伝』の形式を中心に据えて検討してみたい。次に第3章でウイグル
文献中の漢語音形式を通時的観点から観察してみたい。第4章の結語につづ
いて、第5章にはウイグル文献中の漢語リストを掲げる。

2. 漢語音の形式

2.0 扱った文献のほとんどはウイグル文字で書かれている。ウイグル文字は

(8) 馮に対して Tezcan は Yung の転写を与えているが初頭は文字ッである。

漢語音を表記するのにあまり機能的ではなく、その文字転写の表わす形式はもとの漢語音とは大きく異っているのがふつうである。したがってウイグル文字表記からもとの発音形式に近い形式を再構する作業が必要である。ここではウイグル文字で表記された形式を「切韻系韻書」に基づいて再構された中古漢語形式、チベット文字・チベット文献の漢語形式、プラーフミー文字・コータン文献の漢語形式、又必要に応じて漢音や朝鮮漢字音と比較することによって、再構してみたい。⁽⁹⁾ 再構形式はもとの漢語の形式を反映しているが、もとの形式そのものではなく、むしろウイグル語使用者によるウイグル文字表記の読書音形式に近いものであって、ウイグル語の音韻構造の制限をそう大きくは越えていない。

因みに、ウイグル語の母音と子音の体系は次のごとくである。

	非 円				円	
	前		後		前	
	i	e	i	狭	ü	u
	ä	a	広	ö	o	
閉鎖音	無声	p	t	k	q	
	有声	b	d	g		
破擦音	無声		ç			
	無声		s	š	x	
摩擦音	無声					
	有声	v	z	y	ɣ	
鼻 音		m	n	ŋ		
			l			
流 音			r			

(9) チベット文字・チベット文献(T)は羅常培(1933), プラーフミー文字・コータン文献(B)は水谷真成(1958), 「朝鮮漢字音」は河野六郎(1968)を用いた。Tのうち下線を引いたものは「千字文」に現われる。

「切韻系韻書」に基づいて再構された中古漢語音形式を以下では「中古漢語音」又は「中古音」と呼ぶ。

2.1 声母

中古漢語声母音として、『韻鏡』などに付せられた「三十六字母」に正歯音二等と喉音の喻母三等を加えた体系を採用したい。

唇音

重唇音 幫 p 滂 p' 並 b' 明 m

輕唇音 非 f 敷 f' 奉 v' 微 m̥

舌音

舌頭音 端 t 透 t' 定 d' 泥 n 来 l

舌上音 知 t̚ 徹 t̚' 澄 d̚' 娘 n̚

齒音

齒頭音 精 ts 清 ts' 從 dz' 心 s 邪 z

齒上音 莊 tʂ 初 tʂ' 牀 dʒ' 山 ʂ

正齒音 照 tʂ 穿 tʂ' 神 dʒ' 審 ʃ 禪 ʒ 日 nʒ

牙音

見 k 溪 k' 群 g' 疑 ŋ

喉音

影 · 曉 χ 匣 γ 喻 h(3) y(4)

2.1.1 唇音

2.1.1.1 重唇音

a) 中古音	Tibet	Brāhmī
幫 p	<u>p</u> ~ <u>b</u> (上去)	p (/p/)
滂 p'	<u>p'</u> ~ p	ph (/p'/)
並 b'	<u>b</u> ~ 'b	ph (/p'/)

<慈恩伝>

1° Uighur *b*

(幫) 百 pak	pyq	(並) 婆 b'uâ	p'
本 puæn	pyn	蒲 b'o	pw
碑 piuë	py	毗 b'iei	py
(滂) 破 p'uâ	p'		

ブラーフミー文字文献にはみられないが、チベット文字文献では幫滂並に p p' b の三種が区別されている。ウイグル文字にはこの三種を区別できる文字はない。重唇音は文字 *p* のみで表わされている。ウイグル語閉鎖音には有声と無声の対立があるが、これを区別できる文字は *t* と *d* だけである。後に述べるように舌頭音有声の *d'* は無声音の範疇に入れられているので並母 *b'* も既に幫滂に合流していたか、その強い傾向をもっていただけと考えたい。

一方、無気と有気の対立はウイグル語にはなかったが、現在のチュルク語では漢語の無気音は有声音に、有気音は無声音に反映されるのがふつうである。⁽¹⁰⁾

(10) たとえば新ウイグル語とサリグ・ヨグル語(西部裕固語)では次のごとくである。

	新・ウ.	サ・ヨ.
本事 pengsi	biŋsi	bəŋsi~bənsi
砲 p'ao	po	po
店 tien	dɛŋ	dien
通事 toŋgi	tuŋtʃi	tuŋsa
挂面 kuamien	gamɛn	guamen
炕 k'aŋ	kaŋ	kaŋ

(cf. 陳宗振「西部裕固語中的早期漢語借詞」『語言研究』1985年第一期 pp.206-214).

後期ウイグル文献の中にはウイグル語人名を漢字音写した小さな断片が残されている。この漢字音写の人名と対応するウイグル語とのリストは A.v. Gabain (1976) によって提出されたが、ウイグル語閉鎖音は次のような漢字によって表記されている。

a) 不 piəu→pu (中原音韻): bu-	b)
白 b'ak→pai: bǎg	
古 ko→ku: -gu-	
斤 kiæn→kiæn: -gin	曲 k'io̯k→k'iu: kō-
底 tiei→ti: -di-	脱 t'uat→t'uo: to-
都 to →tu: { -du	怙 t'iep→t'ie: te-
	唐 d'āŋ→t'aŋ: taŋ-
荅 tâp→ta: (-)ta-*	
的 tiek→ti: te-*	
大 d'ai→ta: ta-*	

上掲 a)は漢語音(中原音韻)が無気声母をもつもの、b)は有気声母をもつものである。*をつけた対応は、ウイグル語の無声音を漢語の無気音で表記したものである。しかし全体としては漢語無気音はウイグル語の有声音を、有気音は無声音を表記しているといつてよい。ただし、この文献は「慈恩伝」よりはずっと後の時代に作成された。(cf. 註69).

したがって、有気音を表記した *p* を *p* で、無気音を表記した *p* を *b* で発音した可能性はある。だが舌頭音の端透定が文字上この区別をしていないので、ここでも *p b* 二種を設けることなくただ *p* の一種をもって重唇音の形式としておきたい。

<他の文献>

「慈恩伝」以外のウイグル文献でも幫滂並に対しては一様に *p* を立てることができる。ただ例外的に幫母に所属する声母として *f* 又は *v* で発音されたものが元朝時代に書かれた BTT-XIII(49. 11) と Abhi. (Or. 8212-75A 143a) に現われる。いずれも八 *puât* を *v'r* と表記しており、*far* 又は *var* の形式を与えることができる。BTT-XIII の八は八陽経 *varyoke* に現われるが、陽や経の表現は「慈恩伝」に反映されている漢語音体系に適合するもので、この経名が早い時代の形式を継承したことは明らかである。一方この経名を掲げた一仏典断片には八陽経は *paryoke* として現われ、八はなお *par* の形式をもつ。Abhi. のものは八転声 *var çüen ši* に現われ、声を写した *ši* はやはり「慈恩伝」の反映体系に適合する。これら *var(far)* がウイグル内で *par* から変化した可能性は大きい。

b)	T	B
明 <i>m</i>	' <u>b</u> ~ <u>m</u>	<i>b</i> ~ <i>m</i>

<慈恩伝>

1° Uig. *m*

門 <i>muən</i>	<i>my</i>	明 <i>miuan</i>	<i>my</i>
銘 <i>mien</i>	<i>my</i>		

2° Uig. *p*

馬 <i>ma</i>	<i>p'</i>	摩 <i>muâ</i>	<i>p'</i>
戊 <i>məu</i>	<i>pw</i>		

1°は韻尾に鼻音をもっており、2°は非鼻音をもつ。非鼻音韻尾と結合する明

母が脱鼻音化するこのような現象はチベット文字文献で見られる：明 *meñ* 銘 *mi* 摩 *'ba* 茂 (*məu*)*'bu*. 但し *'b* は [mb] の音価をもっていたと考えられている (羅 pp. 29~30). プラーフミー文字文献も明母は *b* と *m* で現わされるが、その分布に条件はない。 *b* と *m* には共に音素 /b/ を立て [mb] の音価が与えられている：摩 *ma* 滅 (*miet*) *byeri* ~ *mye* (水谷 pp. 6, 8).

上掲 1° の *m* には *m* 2° *p* には *b* を与えたい。

<他の文献>

m と *b* とは次のような現われ方をする。

m-

- 1) 門 *muən* *min* (U-II₃ TT-VI KIP)
 mun (TT-VII Iduq)

麵 *miən* *min* (Hk-I U-I₇ USp₇₆)

滿 *muân* *man* (TT-VII)

- 2) 麻 *ma* *ma* (Hk-I)

蜜 *miët* *mir* (Hk-II TT-VII Maitri)

密 *miët* *mui* (Iduq)

母 *məu* *mu* (BTT-XIII)

b-

昧 *muai* *bai* (TT-VB Ts'P)

弥 *mië* *bi* (Ts'P U-I Suv BTT-III, XIII)

戊 *məu* *buu* (TT-VII, VIII)

母 *məu* *buu* (BTT-XIII)

韻尾音の性質にかかわらず声母に *m* が現われるが、*b*- は鼻音韻母とは決して結合しない。*m*- の立つもののうち 2) のタイプは「慈恩伝」にはみられないが、ここに掲げた例は更に二種類にわけられる。一つは漢語 *m*->*b*- の変化以前に借用された形式。蜜は *Maitrisimit* のような古い文献にもみられるのでこれに該当する可能性は大きい。もう一つは後期文献に現われるもので、「慈恩伝」

とは別の漢語音体系を反映しているものである。少なくとも Iduq に現われる
 密 mui はそれに当る。⁽¹¹⁾

2.1.1.2 軽唇音

a)	T	B
非 f	p'~'p~h	} hv(/xv/)
敷 f'	p'~'p	
奉 v'	p~p'~'b	

<慈恩伝>

1° Uig. v

(非) 坊 <i>fiuân</i>	<i>vɔw</i>	(奉) 馮 <i>v'iuŋ</i>	<i>vɔwŋ</i>
府 <i>fiu</i>	<i>vɔw</i>	輔 <i>v'iu</i>	<i>vɔw</i>
封 <i>fion</i>	<i>vɔwŋ</i>	符 <i>v'iu</i>	<i>vɔw</i>

2° Uig. b

(奉) 仏 (*b'iuæt*→) *v'iuæt bwr(q'v)*

チベット文字文献「千字文」の p' はここでは軽唇音 [pʰ] 又は [f] を表わすという。非敷両母は若干の例外を除いて合流していた。奉母も「千字文」と「大乘中宗見解」では p' 音に変化する趨勢があった (羅 pp. 17~18)。ブラーフミ一文字文献は三声母共に hv で表わされる。hv は唇化した軟口蓋摩擦音を示すという (水谷 pp. 12~13)。「慈恩伝」においては敷母 f' の例はみつかつて

(11) 密に対して Geng らは mütü と転写した (Iduq V-10)。後期文献からなる BTT-XIII には母が mu と buu の 2 種で現われているが、共に父母恩重経を表記したものである。2 種のうちの 1 種は版本で, buu mu in čo と写され、もう 1 種の写本では vi buu in čo と写された。この転写は BTT-XIII の著者 P. Zieme による。Zieme はこのうちの前者を古形と考えた (BTT-XIII pp. 74~75 註 12. 032)。掲載されたファクシミリから版本の buu の初頭音の形が確認できないのは残念であるが、buu 父 (*b'iu*→*v'iu*) が正しいとすればこの形式は非常に古い時代に所属する。「慈恩伝」ではこの b' はすでに軽唇音 (*v'*)f- になっていた。このような古形は早期の借用形 bur(xan) 仏にみられる。当然 mu 母も脱鼻音化以前の古い形式と考えねばならない。しかし、重 *q'ion* は「慈恩伝」と同じく韻尾 *ŋ* を欠いた *čo* と転写されている。ウイグル文献より早い時代のソグド文献では重はなお鼻音韻尾を保存しているのに、b' の軽唇音化は既に存在し、m- の脱鼻音化もみられる (cf. 註 79)。ただファクシミリから判断して *čo* は初頭の *č* しか残っていないようである。韻尾に *ŋ* をもっていたとすると、buu mu in čung は古形といえる。しかし、buu の b が f-(v-) であれば、逆に後期の形式になる。

いない。チベット文字やブラーフミー文字と同様にウイグル文字にも *f* を表示する専用文字はない。1°でウイグル文字 *v* としたものはウイグル語の *v* を表わすが(cf. 註28), *v* 表示文字は一般にソグド語の *f* を写すこともできる: *vryšty* *frīsti* ← Sogd. *fryšty*. 奉母は並母と同じく無声化して、非母に合流していたものと考え、1°の *v* に *f* を立てたい。2°の *pwr(q'n)* の *p* は奉母が並母 *b'* から分化する以前の形式か、なお *bv'* のような形式の時代のもを反映しており、*b* を立てることができる。この単語形式は早い時代から定着していた。

<他の文献>

他でも非母奉母は文字 *v* によって表わされる。しかし仏には定着形式の *bur-*⁽¹²⁾ *xan* 「仏」 *bur-sang* 「仏僧」。例外的な形式 *fir* が BTT-XIII (p. 75 註 12. 032) に現われるが、仏にあてられたこの *fir* が「慈恩伝」の反映体系には適合する。

b)	T	B
微 <i>m</i>	' <u>b</u> ~b	<i>v</i>

<慈恩伝>

1° Uig. *v*

武 <i>mju v</i>	文 <i>mjuən vyn</i>
無 <i>mju v</i>	問 <i>mjuən vyn</i>

チベット文字文献の *'b* は [mb] の音価を表わすという (羅 pp. 29~30)。ウイグル文献ではブラーフミー文字文献と同じく微母の脱鼻音化は完了していたと考えられる。文字 *v* には *v* を与えたい。

<他の文献>

他でも一様に *v* で表わされる。TT-I に萬 *mjuen* の音写として現われる *ban* は例外として扱える。

(12) 他の1例父については註11を参照。耿 (1978) には飯 *v'iuən* が *xuan* と写されているが、軽唇音が *x* で反映する例は他にない (Gen. Mani II. 51, 53, 61)。一方、BTTXIII には非母と敷母に *w-* の現われるものがある。夫 *fiu wu* 副 *f'iuuk wu*。

2.1.2 舌音

2.1.2.1 舌頭音

a)	T	B
端 t	<u>t</u>	tt(/t/)
透 t'	<u>t'</u>	} th(/t'/)
定 d'	<u>d~t'</u>	

<慈恩伝>

1° Uig. t

(端) 東 tun	twng	(定) 寶 d'əu→təu	tyw
敦 tuən	twn	徒 d'o →t'u	tw
德 tək	tyk	殿 d'ien→tien	tyn
(透) 太 t'ai	t'y		
台 t'ai	t'y		
統 t'oŋ	twng		

2° Uig. d

(端) 帝 tiei	dy	(定) 達 d'āt→ta	d'r
------------	----	---------------	-----

ウイグル語には初頭に有声音 d の立つことはない。しかしサンスクリットからの借用語は常に文字 *d* をもって初頭の *d* や *dh* を表現する：*d'rny←skt. dhārṇi*。定母 *d'* が有声音として明確に識別できたなら、文字 *d* を用いてそれを表記するにちがいない。だが定母に所属する多数の例の中で2°の達だけが *d* で表記されている。おそらく定母の端母透母への合流は完了していたか、完了しかかっていたと推定してよい。1°の文字 *t* には *t*, 2°の文字 *d* には *d* を与えたい。⁽¹³⁾ 但し上掲1°の定母に所属する漢字の矢印の右辺の形式は「中原音韻」のものを示した。

又、2.1.1.1-a)で述べたように、漢語の有気音がウイグル文献では無気音に、無気音が有気音に反映されているとはいいい難い。無気音が文字 *d* で示される例

(13) 帝は梁武帝に現われるが、BTT-IやTs'Pでもこの帝名には *d* が現われる。

は2°のみである。

<他の文献>

他でもこれら三声母にはふつう *t* が対応する。若干のものは *d'* に文字 *d* が対応する：豆 *d'əu*→*təu dw* (TT-VII) 臺 *d'ai*→*t'ai d'y* (BTT-XIII) 葡 *d'au*→*t'au d'* (Hk-I, II)。TT-VII や BTT-XIII は後期の文献であって、定母は既に他の2声母に合流していたと考えるべきである。*d* の出現は後期文献によくみられる文字 *t* との混用によるものと考えられる。⁽¹⁴⁾

b)		T		B
	泥 n	<u>n</u> ~ <u>d</u> ~'n		d~n

<慈恩伝>

1° Uig. *n*

南 <i>nâm</i>	<i>n'm</i>		寧 <i>nieŋ</i>	<i>ny</i>
--------------	------------	--	---------------	-----------

チベット文字文献の泥母は明母の場合と同じく、韻尾に鼻音をもたないものは脱鼻音化して *'d[nd]* になる傾向がある (羅 pp. 29~30)。プラミー文字文献でも *n* にかわって *d* が現われるが、韻尾形式はその出現に関与しないとし、両表現に *[nd]* の音価をもった /*d*/ 一子音が与えられている (水谷 P. 8)。ウイグル文献の上掲二例はたまたま鼻音韻尾をもっているのも、チベット文字文献と同じ条件の脱鼻韻化があったか否かはこの範囲ではわからない。しかし他の文献の例では、韻尾に非鼻音をもつにもかかわらず声母は *n* で反映されている：那 *nâ na* (Ts'P) 内 *nuai noi* (Mü. Pf) 尼 *niêi ni* (TT-VB)。例が少ないので断定はできないが、「慈恩伝」の接した漢語音には脱鼻音化のなかった可能性もある。1°の *n* には *n* を与えてよい。

c)		T		B
	来 l	l		l~d(/l/)

<慈恩伝>

(14) Csongor は KIP p.33 の *tsun* に段 *d'uan* をあてているが、文脈から考えてもこの *tsun* は寸 *ts'uən* の音写ととるべきだ。

1° Uig. *l*

流 *liəu lyw* 驢 *lio lw* 蓮 *lien lyn*

他の文献同様に、「慈恩伝」では来母は常に文字 *l* で表記される。これに *l* を与えてよい。

2.1.2.2 舌上音

a)		T		B
	知 <i>t̥</i>	<u>c</u>		c
	徹 <i>t̥ʰ</i>	<u>cʰ</u>		
	澄 <i>d̥ʰ</i>	<u>j~c</u>		ch(/cʰ/)

<慈恩伝>

1° Uig. *č*

(知) 張 <i>t̥iāŋ čw</i>	(澄) 宅 <i>d̥ʰak čyq</i>
貞 <i>t̥ien čy</i>	鄭 <i>d̥ʰien čy</i>
中 <i>t̥iun čwnk</i>	陣 <i>d̥ʰien čyn</i>
(徹) 超 <i>t̥ʰieu čʰw</i>	
褚 <i>t̥ʰio čww</i>	

2° Uig. *ts*

(澄) 重 *d̥ʰion tsw*

中世漢語への過程で有声音澄母は並定と同じように知母と徹母に合流し、更に知は正齒音照母に、徹は穿母に合流する。チベット文字文献「千字文」や「阿彌陀經」では澄母の有声性をよく保存している。1°の文字 *č* はウイグル語の *č* [tʃ] を表わすが、この文字が *j* [dʒ] を表わしてもおかしくはない。しかし並母や定母の場合と同じく、澄母は既に無声化し、知徹に合流していたと考えたい。文字 *č* には *č* を立てる。2°は1°の例外形式として扱いたい。これには *ts* を立てる。但し T, B の *c cʰ* もここでは破擦音を表わす。

<他の文献>

この三声母には他でも一様に *t* が対応する。BTT-XIII には重がみられるが、⁽¹⁵⁾
čü のごとく *ts* に対して *t* が立つ。

b)		T		B
	娘 <i>n</i>	'j~'d		j

ウイグル文献には例がない。

2.1.3 歯音

2.1.3.1 歯頭音

a)		T		B
	精 <i>ts</i>	<u>ts</u>		tc(/ts/)
	清 <i>ts'</i>	<u>ts'</u>		ts(/ts'/)
	從 <i>dz'</i>	<u>dz'~ts'</u>		tc~ts(/ts'/)

<慈恩伝>

1° Uig. *ts*

(精) 宗 <i>tsoŋ</i>	<i>tswnk</i>	(清) 草 <i>ts'âu</i>	<i>ts'w</i>
蔣 <i>tsiãŋ</i>	<i>tsw</i>	錯 <i>ts'ák</i>	<i>ts'q</i>
子 <i>tsiəi</i>	<i>tsy</i>	(從) 契 <i>dz'ân</i>	<i>tsw</i>
晋 <i>tsiën</i>	<i>tsyn</i>	慈 <i>dz'iəi</i>	<i>tsy</i>
		秦 <i>dz'iën</i>	<i>tsyn</i>

2° Uig. *dz*

(精) 晋 <i>dzyn</i>	子 <i>dzy</i>
-------------------	--------------

3°

(精) 宗 <i>swnk</i>	子 <i>sy</i>
-------------------	-------------

中世漢語への過程で從母は精母と清母に合流する。チベット文字文献では精清從に区別がみられる。プラーフミー文字文献では從母には既に無声音化した形式が現われるが、*tc* は無氣、*ts* は有氣を表わし、なお本来の氣音性は残っていたとし、両形式に /ts'/ が与えられた(水谷 P.9)。一方、「慈恩伝」

(15) TT-VB には仲 *d'iun* (「仲尼」) を写したとして *tuän(-ni)* が掲げられている。

1°の文字 *ts* は *ts* を表わしたと 考えてよい。この形式が精清従を表示する一般的な形式であったといえる。従母はすでに無声化していた。2°と3°は共に1°の変種であるが、無気音性を表わそうとした可能性もある。*dz*には *dz*, *s* には *s* を与えてよい。

<他の文献>

他では *ts* のほか *s* の出現が目立つ。*s* は清や従にも現われる：倉 *ts'ân tsan* (U-I Suv) ~ *san* (U-II Suv) 寸 *ts'uən tsun* (U-II KIP) ~ *sun* (Hk-I)。とりわけ従母は精母に合流したのも清母に合流したのも *s* で現われることが多い：藏 *dz'ân → tsan* (中原音韻) *tso* (BTT-VII) ~ *so* (TT-VI UTb) 罪 *dz'uai → tsuei tsoi* (KIP Ts'P) ~ *soi* (KP TT-IIA) 層 *dz'ən → ts'ən sīn* (BTT-I, III) 存 *dz'uən → ts'uən sun* (TT-VII)。 *ts* と *s* の分布に一定条件を見つけ出すのはむづかしい。ただ「慈恩伝」において *ts* の使用が目立つことは確かである。子 *tsiəi* は *tsi* と *si* の他 *zi* の現われることがある：皇太子 *hun taizi* (BTT-XIII) 太子 *taizi* (Iduq) 童子 *tunzi* (BUY)。この *z* は *ts* の無声性を示したものと考えたいが、後期文献に現われると いてよい。現代(新)ウイグル語でも *ts* は一般に *z* で写される：⁽¹⁶⁾ 脏 *tsan → tsan* (現代北京語) *zan*。

b)		T		B
	心 <i>s</i>	<u>s</u>		<i>s</i>
	邪 <i>z</i>	<u>s</u>		

<慈恩伝>

1° Uig. *s*

(心) 三 <i>sâm</i>	<i>s'm</i>	(邪) 序 <i>zio</i>	<i>sww</i>
孫 <i>suən</i>	<i>swn</i>	遂 <i>ziuēi</i>	<i>swy</i>
蕭 <i>sieu</i>	<i>syw</i>	寺 <i>ziəi</i>	<i>sy</i>

2° Uig. *ts*

(心) 宣 <i>siuən</i>	<i>tswyn</i>	(邪) 寺 <i>tsy</i>
--------------------	--------------	------------------

(16) Ts'P や Maitri には 羯子に *qarz ~ qars* という形式がみられる。子は *z* で表わされているが、この単語形式は 仲介言語の影響を受けたか、ウイグル内での発展形式と考えられる。

中世漢語への過程で邪母は心母に合流する。「慈恩伝」のウイグル文字には s と z の表記上の区別がある。チベット文字文献と同じく邪は心に合流していたと考えてよい。2°は例外的な形式であるが、とくに寺は弘福寺 *ɣuəŋ fiuk ziəi qwŋkwɔtsy* のみに現われる(VII)。*tsy* は福 *fiuk* の韻尾 *k* の声門閉鎖音化と結びつけて考えることも可能である(cf. P. 78)。上掲1°の *s* には *s*, 2°の *ts* には *ts* を与えてよい。

<他の文献>

他でも心母、邪母は共に⁽¹⁷⁾*s*で表わされる。*ts* はみられない：宣 *siuən sùen* (BTT-XIII)。

2.1.3.2 正歯音（二等三等）

a)		T		B
	莊 <i>tʂ</i>	} <i>c~j</i> (上去)	}	<i>c</i>
	照 <i>tʂ</i>			
	初 <i>tʂ'</i>	} <i>c'~c</i>	}	<i>ch/(c'/)</i>
	穿 <i>tʂ'</i>			

<慈恩伝>

1° Uig. *č*

(莊) 齋 <i>tʂái</i>	<i>č'y</i>	(照) 章 <i>tʂiāŋ</i>	<i>čw</i>
(初) 讖 <i>tʂ'am</i>	<i>č'm</i>	志 <i>tʂiəi</i>	<i>čy</i>
(穿) 昌 <i>tʂ'iāŋ</i>	<i>čw</i>	周 <i>tʂiəu</i>	<i>čyw</i>

中世漢語への過程で、莊母と照母、初母と穿母はそれぞれ合流するが、「慈恩伝」においてもチベット文字文献やブラーフミー文字文献同様に、この合流は終っていた。1°の *č* には *č* を与えておきたい。他の文献においても一様に *č* が立つ。

(17) Hk-II には尋 *ziəm* を写したとして *zum* の形式が掲げられている。Ts'P(War.)には信 *siən* が *šin*, Maitri (Tekin) には削 *siák* が *šwk* と転写されているが *š* は *s* とすべきだ。

b)		T		B
	牀 dz	}	ç	}
	神 dz			
	山 š			
	審 ç			
	禪 z			
			ž (上去)	š

<慈恩伝>

1° Uig. š

(牀) 蹟 dz'ak	šyq	(審) 舜 çiuén	šwɣn
士 dz'iqi	šy	書 çio	šw
(神) 射 dz'ia	šya	声 çien	šy
実 dz'iēt	šyr	(禪) 禪 zien	šyn
乘 dz'iqɨ	šynk	常 ziaŋ	šwɔ
(山) 山 šan	š'n	侍 ziqi	šy
沙 ša	⁽¹⁸⁾ š'		
双 šɔŋ	šwnk		

š を表わす専用文字は s に 2 点を付した形式のものがあるが、他の文献と同じく「慈恩伝」では大概 s を表わす文字 s でこの音は表記される。上掲例においても文字は š と s の区別をせず一様に š として掲げた。しかし「慈恩伝」のウイグル文字には s を表わす専用文字があるので、禪が既に無声音になっていたことは明らかにできる。上掲の五声母はチベット文字文献やブラーフミール文字文献と同じく、合流して一音に統一されていたと推定できる。文字 š には š を立てたい。

<他の文献>

他にもこれら五声母には一般に š が立つが、牀禪には š にかわって s の立つ

(18) Hs-IX では大毘婆沙論が t'y py p'z' lwn と写されており、沙は z' となっているが、ここでは例外として扱いたい。

ものもある：讒 dz'am→tj'am (中原音韻) čam (USp 73) 成 zɪɛŋ→tj'ɪɛŋ če (TT-VII)⁽¹⁹⁾ 丞 zɪɛŋ→tj'ɪɛŋ čin (BTT-XIII Iduq). これらはいずれも「中原音韻」では tj' で現われている。牀母はウイグル文字の表記が摩擦音化以前の破擦音時代の古形を写した可能性もある。一方、⁽²⁰⁾ 禅母の摩擦音から破擦音への変化はウイグル文字に明確に反映している。少なくとも禅母のウイグル形式は新しい時代のものといえる。このと現われている文献はどれも元朝時代に書かれたと推定される。因みに「慈恩伝」(VII)に現われた(禅)の常は「中原音韻」では tj'an⁽²¹⁾ になったが、上掲1°のごとく šww の形式が立つ。

c)	T	B
日 nɛ	ž	š(/ž/)

<慈恩伝>

1° Uig. ž

如 zɪnio žw 仍 nɛɪɛŋ žynk

壬 nɛɪɛm žym

2° Uig. y

人 nɛɪen yym

日母の鼻音性はチベット文字文献でもプラーフミー文字文献でも表示されていない。1°のžはウイグル語 ž を表わす専用文字であって、ここでもこの音を表わしたと考えてよい。2°は道人 d'âu nɛɪen twyyyn のみに現われる。この単語は定着形式でウイグル文献全般に同形がみられる。仲介言語の形式を反映した可能性は大きい。yym には yin⁽²²⁾ を与えたい。

(19) チベット文字文献(「大乘」「阿弥陀」「金剛」)では成は čeŋのごとく ç(=š)が現われる。

(20) 「中原音韻」の tj' は tɕ' を立てる場合もある。cf. 讒 tɕ'am (宇継福1982. P.146)。なお、牀母が č(=c)で表わされる例はチベット文字文献(「千字文」)にも一例がある：床(dz'iaŋ→tj'uaŋ) c'o.

(21) 常はチベット文字文献(「大乘」)では çoŋ (=šoŋ) となっている。なお、Ts,P (War.)には氏 zɪě に ži が与えられているが、正しい転写なら例外的存在である。

(22) toyin は toŋin の形式で導入され、いわゆる「y方言」の音韻構造に同化して ŋ>y が起ったと考えることもできる。cf. aŋɪy (ŋ方言) : ayɪy (y方言)「悪い」。

<他の文献>

他ではまれに *s* で表記された例があるが、ふつうは *š* で表わされる：日 *nziēt šyr* (Maitri) 如 *šw~šw* (BTT-XIII 10-13 BUY) 壬 *šym* (BTT-XIII 9, 50). 文字 *s* も *š* も手書き草書体では *š* を表わすのに用いることができるので、たとえば BTT-XIII 10-13 や BUY に書かれた如が *š* 音をもっている可能性はある。しかし BTT-XIII 9, 50 は版本であって壬の *š* は *s* に発音されたと考えるべきである。このような *s* 音はウイグル語内で *š* から発達した形式とい⁽²³⁾てよい。

2.1.4 牙音

a)	T	B
見 <i>k</i>	<u><i>k</i></u> ~ <u><i>g</i></u>	<i>k</i> (/k/)
溪 <i>k'</i>	<u><i>k'</i></u>	kh(/k'/)
群 <i>g'</i>	<u><i>g'</i></u> ~ <i>k</i> ~ <i>k'</i>	kh(/k'/)

<慈恩伝>

1° Uig. *k*

(見) 堅 <i>kien</i>	<i>kyn</i>	(溪) 卿 <i>k'ian</i>	<i>ky</i>
金 <i>kiəm</i>	<i>kym</i>	窺 <i>k'iuē</i>	<i>kwy</i>
璟 <i>kiuaŋ</i>	<i>kyy</i>	慶 <i>k'ian</i>	<i>ky</i>
季 <i>kiuēi</i>	<i>kwy</i>	(群) 極 <i>g'iaŋ</i>	<i>kyyk</i>
恭 <i>kioŋ</i>	<i>kynk</i>	乾 <i>g'ien</i>	<i>kyn</i>

(23) U-III 88-17 と 89-2, 更に Maitri (Tekin) Nos. 109r-14 116 v-10 には *bakčan* あるいは *p'kč'n* と転写された形式があり、それらに漢語の黙然 *mək nqien* が与えられている。Csongor も U-III の *bakčan* を *bäg jän* と転写し直して、やはり黙然の音写形とした (pp. 84, 89, 90, 91, 100, 101, 102)。しかし、U-III や Maitri において、*p'kč'n* は文脈から「夏坐」あるいは「夏安居」を指す。BTT-III (11.59, 389, 400, 406, 426, 600, 601) にはやはり「夏坐」にあたる *birkčan* がみられるが、著者 Tezcan はこれを U-III の *bakčan* と共に、skt. *bhakta-chinnaka* からの仲介言語を通じた形式と推定した (BTT-III 註57)。Tezcan は他にベルリン蒐集中 U3366 に *bikčan* の形式の存在を明らかにしているが、*bikčan* は Sho-Agama (H.22.2-9) にも現われ、対照漢文から「夏坐」を指すことが明らかにされている。*bikčan* や *birkčan* を黙然の音写形とするのは形式の上から無理である。*p'kč'n* を含むこれら形式は同じ來源をもつと考えられるので、当然、*p'kč'n* も黙然から借りたといえない。

宮 kiun kwynk 忌 g'iaï ky

2° Uig. q

(見) 綱 kân	qw	庚 kaŋ	qy
広 kuân	qw	国 kuək	qwq
江 koŋ	qwnk	穀 kuk	qwq

チベット文字文献では見溪群三声母の区別が明確にある。プラーフミー文字文献では群母は無声化し、溪母と同じ扱いになった。ウイグル文字 *k* と *q* には声や気音の区別はない。定母と同じく有声音の群母は見溪に合流していたと考えられる。1°の *k* に *k*, 2°の *q* に *q* を当てたい。1°の *k* は介音 *i* に先行し、2°の *q* はそれ以外に先行して現われ、互いに補い合う関係にある。ウイグル語では文字 *k* による *k* は硬口蓋後部あるいは軟口蓋前部の子音を表わし、文字 *q* による *q* は軟口蓋後部か口蓋垂の子音を表わす。*i* 介音に先行して *k* の現われるのは Karlgren のいう「yod 化」にあたる。Karlgrén は vocalic medial *i* をもつ、いわゆる「仮四等韻」には「yod 化」を認めていないが、「慈」では堅 (ken→kien) のようにこの韻母に先行する声母にも *k* が立つ。「仮四等韻」は唐末には「四等韻」に合流していたと考えられているが、ウイグルも合流後の声母音を反映しているといつてよい。

<他の文献>

「慈恩伝」にみられる見溪群の表記形式の分布の条件は他でも、後期時代に書かれたものを除いて一致する。後期文献では介音 *i* をもたない韻母に結合した声母にも *k* が立つ：庚 kaŋ kiŋ (BTT-XIII) 高 kâu kau (Iduq) 甲 kap kä (Iduq) 広 kuân koŋ (Iduq).

b)	T	B
疑 ŋ	'g	g~h(/g/)

<慈恩伝>

1° Uig. k

堯 nieu	kyw	業 niep	kyb
--------	-----	--------	-----

元 *ŋiuen kwyn*

チベット文字文献の 'g は [ŋg] の音価をもつという。だが明泥の場合と異ってŋとの交替はない(羅 pp. 26, 29)。「慈恩伝」の1°の *k* は有声軟口蓋口音 *g* を表わしたと推定してよい。ブラーフミー文字文献でも鼻音性は現われていない。

<他の文献>

一般にはやはり *g* が立つ。だが後期の文献では疑母ŋが・や y になった例がみられる：元 *ŋiuen* → *·iuen* (中原音韻) *·ön* (Iduq) cf. *gön* (TT-VII)
五 *ŋo* → *·u* *·u* (BTT-XIII) 衙 *ŋa* → *·ia ya* (Iduq)。

2.1.5 喉音

a)

T

B

曉 *x*

匣 *ɣ*

} h ~ 'h'

} h(/x/) ~ hv(/xv/)
(開) (合)

<慈恩伝>

1° Uig. *k*

(曉) 顕 *ɣien*

kyn

(匣) 玄 *ɣiuen*

kwyn

許 *ɣio*

kyw

慧 *ɣiuei*

kwyi

訓 *ɣiuən*

kwyn

2° Uig. *q*

(曉) 漢 *ɣân*

q'n

(匣) 夏 *ɣa*

q'

孝 *ɣau*

q'

恒 *ɣəŋ*

qynk

華 *ɣua*

qw'

鴻 *ɣuŋ*

qwnk

衡 *ɣaŋ*

qy

皇 *ɣuân*

q'w ~ qw

槐 *ɣuǎi*

qw y

中世漢語音への過程で匣母は曉母に合流する。チベット文字文献, ブラーフ

ミ-文字文献には既に両母の区別はない。「慈恩伝」においてもこの合流は完了していたと考えられるが見溪の場合と同じく、介母*i*をもつ韻母の前で*k*が、それ以外の韻母の前で*q*が現われる。ここでは*k*に*x*を、*q*に*h*を与えたい。

<他の文献>

他でも *k* (*x*), *q* (*h*) が現われて「慈恩伝」と同じ条件の分布を示す。後期文献においてもこの条件の保たれているのは牙音の場合と異なる：皇 $\gamma u \grave{a} \eta$ *hun* (BTT-XIII) 后 $\gamma \ddot{a} u$ *hiu* (BTT-XIII) 湖 γo *huo* (Iduq)。ただ、中古音では*i* 介母をもたないが、「中原音韻」ではその現われるものには、後期文献では *x* として現われる：学 $\gamma \ddot{o} k \rightarrow \chi i \ddot{a} u$ *xäi* (*k'y* ETŞ)。含 $\gamma \grave{a} m$ ($\rightarrow \chi \grave{a} m$) は含藏を表わすときは *xömsö* (TT-VI) ~ *xömtso* (UTb) のごとく*x*で定着している。この形式は仲介言語形式を反映したものか、ウイグル語内での発達形式と考えられる。cf. 增𣵵含 $ts \grave{a} \eta \cdot i \ddot{e} t \cdot \gamma \grave{a} m$ *sīŋ 'ir ham* (Ga. Drucke *sing ir xam*)⁽²⁴⁾。

b)	T	B
影	˙	˙

<慈恩伝>

1° Uig. # (ゼロ)

因 <i>'iēn</i>	# <i>'yn</i>	乙 <i>'iēt</i>	# <i>'yr</i>
英 <i>'ian</i>	# <i>'y</i>	安 <i>'ân</i>	# <i>'n</i>
尉 <i>'iuət</i>	# <i>'wyr</i>	恩 <i>'ən</i>	# <i>'yn</i>
雍 <i>'ion</i>	# <i>'wynk</i>		

2° Uig. *y*

益 <i>'ek</i>	<i>yyk</i>
--------------	------------

2°の*y*すなわち*y*は1°の例外として扱える。⁽²⁵⁾ ウイグル語には声門閉鎖子音を表わす文字はないので#の位置にその子音があったものと推定できる。#に

(24) Maitri (Tekin) では *kwaw kwyk* の形式を號 $\gamma \ddot{a} u$ の音写という。但し、上古音 **g'og* を写した形式と考えられている。

(25) チベット文字文献(「金剛」)にも例外的に要が *ye'u* のごとく*y*-をもって現われる。

・を与えておきたい。他の文献においても「慈恩伝」と同じく影母には#（ゼ口）が立つ：音 'iəm 'im (U-II₃ KIP Ts'P)⁽²⁶⁾ 乙 'ir (TT-VII) 恩 'in (BTT-XIII) 案 'àn 'an (Suv).

c)	T	B
喻 (三等) fi	'w	y~u~h
喻 (四等) y	<u>y</u>	y

{ /y/ }

<慈恩伝>

1° Uig. y

(開口) 裕 yiu	yww	瀛 yieŋ	yy(n)
姚 yieu	yw	祐 fiəu	yww
楊 yiāŋ	yww	融 fiuŋ	ywnk
揚 yiāŋ	yw		

2° Uig. w

(合口) 銳 fiuɛi	wy	永 fiuaŋ	wy
王 fiuāŋ	w'nk	域 fiuəŋ	wy(k)
院 fiuɛn	wyn	兗 yiuɛn	wyn
遠 fiuɛn	wyn ⁽²⁷⁾		

3° Uig. v

(合口・止摂四等)

唯 yiuěi	vy	維 yiuěi	vy
---------	----	---------	----

4° Uig. #

(開口) 于 fiu	#'ww	瀛 yieŋ	#'y
------------	------	--------	-----

ウィグル文字で y w v の表記上の区別はむづかしい。とくに語中ではふつう文字 y と v の区別はない。だが「慈恩伝」では語頭において文字 w は明ら

(26) Hs-X (1121) において Tezcan は音韻の音写形として yamtsan を立てた。しかしこの単語は Kara (1983 P. 45) で指摘されたように梵讚 v'iuem tsân の音写とせねばならない。y-はv-ととるべきで、v'mts'n には famtsan を与えてよい。

(27) 北京本 H8a-9 (第9巻) に現われる遠の音写形に対して、馮 (1953 P. 29) は ün, Csongor はそれを改めて öŋ を与えているが、初頭字はwであって'wではない。

かに区別されているし、文字 *w* も文字 *y* とはわずかに異った形態を呈している。⁽²⁸⁾ *w* には *w*, *v* には *v*, *y* には *y* を与えたい。上掲中、原則的に *y* は開口音に現われ、*w* は止摂四等を除く合口音に現われている。止摂四等には *v* が現われる。一方、チベット文字文献では、喩母四等には *y* が、喩母三等には *'w* が代表音として掲げられている（羅 P. 25）。だが実際には三等の開口音には右 *fiəu yu*（千字文）炎 *fiem yyam* 有 *fiəu yī'u*（大乘中宗見解）のごとく *y* が現われるし、四等合口音に尹 *yiüēn 'win* 營 *yiüēŋ 'we* 悦 *yiüet 'war*（千字文）のごとく *'w* が現われる。4°を除いて3°の *v* を2°の *w* と同じ範疇に入れると、「慈恩伝」の喩母の現われ方はチベット文字文献のものと同様一致する。4°の *#'ww*, *#'y* には影母と同じ形式、すなわち *#* には *·* を与えることができる。チベット文字文献にもやはり友 *'iu*（千字文）有 *'i'u* 由 *'i'u*（大乘）のごとく喩母に *·* の現われる形式がみられる。一方、ブラフミー文字文献では喩母四等には全て *y* が、又三等には開口に *y*, 合口に *y* と *u~g~h* が現われる。これらは全て *y* によって代表させられているが（水谷 P. 13）、*u~g~h* を上掲2°, 3°の円唇音の範疇に入れるとやはり「慈恩伝」と類似の分布を示すことになる。

中世漢語への過程で喩母は影母と合流する。「慈恩伝」ではなお喩母は独立していたといえるが、4°にみられるように合流への傾向はあった。

<他の文献>

他でも基本的には「慈恩伝」と一致するといってよい。

（開口）右 *fiəu yiu* (BTT-XIII) 祐 *fiəu yiu* (TT-VII) 陽 *yiāŋ you~yan* (TTVI)

（合口）王 *fiuāŋ waŋ* (TT-VB U-II7)

（合口四止）唯 *yiüēi vi* (TT-VB).

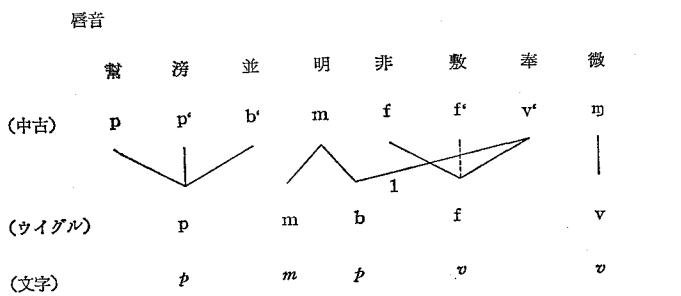
ただ後期文献になると合口音は影母と合流して影母と同一形式が現われる：

(28) 文字 *w-* はウイグル語の初頭の *o* や *u* を表わす文字 *'w-* の *'* をとった形態をしている。又、*v-* は文字 *y-* の左の下へ下る線の端を少し左上に折り曲げた形態をしている。

王 *fiuāŋ* → *'uan* (中原音韻) *'wnk* (*'oŋ* Iduq) 院 *fiuən* → *'iuen* *'wyn* (*'uen* Iduq).

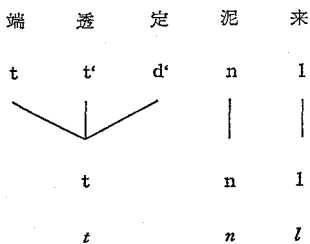
2.1.6 「慈恩伝」漢語声母音の特徴

2.1.6.1 以下には中古漢語声母とその「慈恩伝」への反映形式、及びその表記文字（ウイグル文字）との関係について図示する。但し、(定着)は定着借用語を示す。又、「慈恩伝」には存在しなかった声母を他の文献の形式で補った場合には破線でそれを示す。

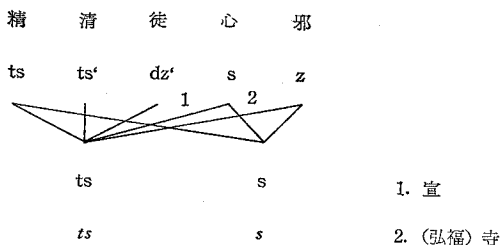


1. 仏 *bur* (-*xan*) (定着)

舌頭音



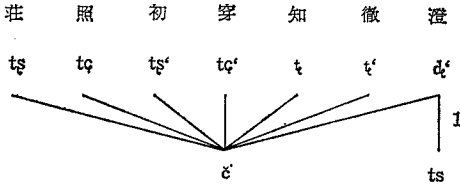
齒頭音



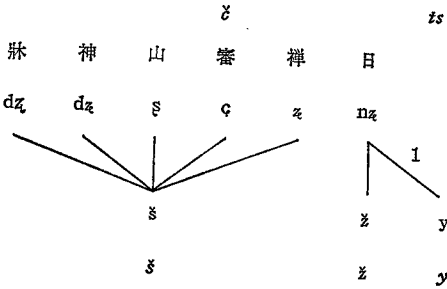
1. 宣

2. (弘福) 寺

正齒音・舌上音

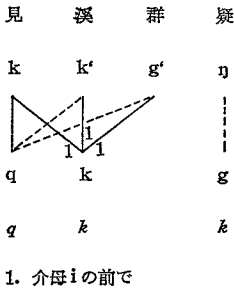


1. 重

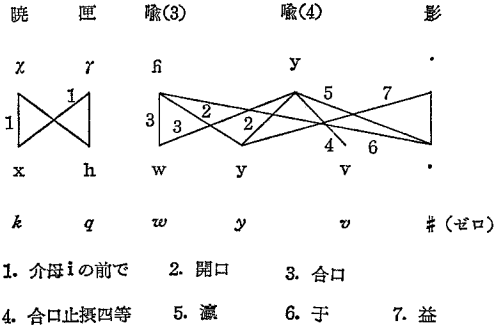


1. (道)人(定)齋

牙音



喉音



2.1.6.2 ウイグル文字は、その性格上、漢語音の精確な形式を写し出すことはできない。声母形式の再構においては ts のように表記上明確に漢語音と判断できるものを除いては基本的にウイグル語子音目録中の音形式を用いて再構音を立てた。それにもかかわらず、その形式の全体はもとの漢語音の性格をよく反映しているといってよい。中古漢語音子音体系と「慈恩伝」のものとは比べてみると次のごとくである。(但し、「慈恩伝」は一般的な反映形のみを掲げる。)

<中古音>

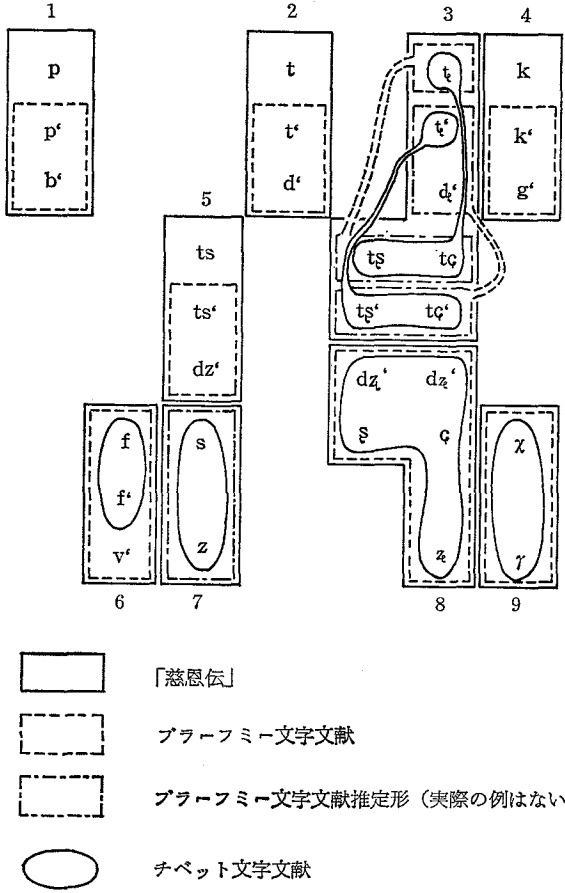
p ¹		t ⁴		t̥ ⁷	k ¹⁰	*13
p ²		t ⁵		t̥ ⁸	k ¹¹	
b ³		d ⁶		d̥ ⁹	g ¹²	
		ts ¹⁴		ts ¹⁷	tʃ ²⁰	
		ts ¹⁵		tʃ ¹⁸	tʃ ²¹	
		dz ¹⁶		dʒ ¹⁹	dʒ ²²	
f ²³	s ²⁶			ʃ ²⁸	ʧ ²⁹	x ³¹
f ²⁴						
v ²⁵	z ²⁷			ʒ ³⁰	ʤ ³²	
				nʒ ³³		
m ³⁴	m̥ ³⁵	n ³⁶		n̥ ³⁷	ŋ ³⁸	
		l ³⁹				
				y ⁴⁰	f ⁴¹	

<慈恩伝>

p ¹ ₂ ³		t ⁴ ₅ ⁶		k ¹⁰ ₁₁ ¹²	q ¹⁰ ₍₁₁₎ ⁽¹²⁾	.13
b ³⁴				g ³⁸		
		ts ¹⁴ ₁₅ ¹⁶		č ⁷ ₈ ¹⁷ ₁₈ ²¹ ₂₀		
f ²³ ₍₂₄₎ ²⁵	s ²⁶ ₂₇			š ¹⁹ ₂₂ ²⁹ ₃₀	x ³¹ ₃₂	h ³¹ ₃₂
v ³⁵ ₄₀				ž ³³		
m ³⁴		n ³⁶				
		l ³⁹				
				y ⁴⁰ ₄₁	w ⁴⁰ ₄₁	

上掲中、括弧に入れた番号は実際には例をもたなかったもの。又、イタリック字体のものは中古音が分割された子音である。声母の数は約半分に減少し、

多くの融合が認められる。もちろんこの体系がそのままの漢語の体系を反映しているとはいえない。たとえば気音の対立はもとの漢語には存在したに違いない。しかし、この体系がチベット文字文献やブラーフミー文字文献のものと類似していることは障害音の融合の仕方を比べてみればよく理解できる。



「慈恩伝」とブラーフミー文字文献との異りは気音の有無に関するものである。上掲1～5の「慈恩伝」に有気無気の対立を与えると全体はブラーフミー文字文献と一致する。しかも気音の対立の有無はウイグル文字からは判別でき

なかった。チベット文字文献は1～5の有声無声を区別する点においてブラーフミー文字文献と異なる。

鳴音中、鼻音の脱鼻音化の程度に関しても「慈恩伝」はチベット文字文献、ブラーフミー文字文献とよく似ている。微母 *m*、疑母 *ŋ* は「慈恩伝」では *v*, *g*、ブラーフミー文字文献でも *v*, *g* のごとく完全な口腔音を表わす。チベット文献では 'b' *g* のごとく文字 *bg* とは異った表記を用いて鼻音性の存在を表わそうとしているが、やはり脱鼻音化の傾向は強い。日母 *n* は三者共に *ŋ* になった。一方、「慈恩伝」とチベット文字文献において明母 *m* は鼻音韻尾の前では *m* を保っており、非鼻音韻尾の前では *b* (T では 'b) に交替する。ブラーフミー文字文献でも *m b* 2種が現われる。しかし鼻音韻尾の有無を条件としない。泥母 *n* はチベット文字文献では明母と同じ発達をとげる。すなわち、非鼻音の前では *n* にかわって 'd が現われる。ブラーフミー文字文献も明母同様に交替の条件はもたないが、*n* と *d* が現われる。「慈恩伝」には鼻音以外の韻尾と結合する例はない。他のウイグル文献の例を参考にすれば、非鼻音韻尾との結合に際しても *n* の立った可能性はでてくるが、明母との均衡において、やはり *d* との交替の存在を推定した方がよい。

喻母はチベット文字文献では三等と四等の区別をもっていた。「慈恩伝」は開口、合口を主な基準にして大きく二つのグループに分けることができる。すなわち *y* グループ（開口）と *w v* グループ（合口）。しかし *y* グループの多くは四等に所属しているし、*w* をもつものは三等に所属する例が多い。一方、逆にチベット文字文献は例外形式として扱われたものも含めて開口、合口を条件とした二つのグループに分類することが可能である。すなわち「慈恩伝」とチベット文字文献とは類似する喻母の体系をもっていたといえる。ブラーフミー文字文献にも大凡似かよった体系を見出すことができる。

Karlgren のいう「*yod* 化」は「慈恩伝」では牙喉音のみに認めることができる。Karlgren の再構とは少し異っていて、「仮四等」にもこの現象の現われるのが特徴であるが、この点においてもチベット文字文献と平行する。

以上のごとく、声母を通して「慈恩伝」中の漢語を観察するなら、これが中古漢語（切韻系）よりはかなり発達した段階のものであり、チベット文字文献やブラーフミー文字文献のものと同様なる性格のものであったことがわかる。

2.2 韻母

中古漢語の韻母は十六攝に分類し、韻目名は「韻鏡」第一欄に掲げられた平声韻をもって示す。拗音三等と四等の区別はウイグル語には反映されていないので、介母形式にその区別はつけない。いわゆる「仮四等韻」には「4」を与えるが、それ以外には三等、四等両韻をもつものにも三等を代表させて「3」と記しておきたい。⁽²⁹⁾

2.2.1 韻尾にŋをもつ韻母の反映

2.2.1.1 通撰・江撰

a)		T		B
	東（通1）	uŋ	} <u>oŋ</u>	ūmŋi
	冬（通1）	oŋ		
	江（江2）	ɔŋ	<u>aŋ</u> ~waŋ	amŋi

<慈恩伝>

1° Uig. *wŋk*

(東) 公	kun	<i>qwnk</i>	(冬) 悰	tsoŋ	<i>tswnk</i>
東	tun	<i>twnk</i>	宗	tsoŋ	<i>tswnk</i>
鴻	ɣun	<i>qwnk</i>	統	t'oŋ	<i>twnk</i>
(江) 江	koŋ	<i>kwnk</i>			
双	ʂoŋ	<i>ʂwnk</i>			

2° Uig. *wn*

(東) 公 *qwn*

(29) 開口と合口の区別は、介音に u iu をもつものを合口とし、それ以外を開口とした。但し、同一韻目名に開合の区別のないものは開合の表示をしなかった。漢語の声調はウイグル文字表記には反映されていないので声調表示はしなかった。

東韻冬韻は慧琳「一切経音義」⁽³⁰⁾ではすでに合流している。江韻は中世漢語への過程で陽韻唐韻に合流する。漢音では韻尾ŋを失い東冬江ともに韻母はouとなる。上掲チベット文字文献のñ, プラフミー文字文献のmniはいずれもŋを表わす。1°の-nkにもŋを与えてよい。

チベット文字文献では核母音は東冬がo, 江がaをもつ。これは朝鮮文献と同じである(ong:ang)⁽³¹⁾。プラフミー文字文献では東はū(uと考えてよい。水谷 P. 21), 江はaをもつ。1°では東冬江の核母音には全てwが表記されているが、この文字はふつうウイグル語のuとoを表わす。プラフミー文字で書かれたウイグル文献 TT-VIII では東韻に所属する通 t'uŋ が tuñと表記されており、東の核母音が狭母音の範疇に入れられている。ここでも1°の東冬の核母韻wにuを与えて韻母形式 uŋ を立てたい。江は東冬よりは広い母音をもっていた可能性が大きいのでwにはoを与えてoŋを立てたい。2°のqwnは公主 kuŋ tçiu qwnčwy に現われる。この単語はウイグル文献だけでなく突厥碑文においても同じ形式がみられるので、早い時代の定着形式であったと考えてよい。-wnにはunを立てたい。-ŋ > nの変化がどの過程で起ったのかはわからない。趙公 č'wqwnk 英公 'yqwnk に現われる1°の公 qwnk が「慈恩伝」の時代の一般的形式であったといえる。⁽³²⁾

<他の文献>

他にも東冬には-uŋを立てることができる。公は志公 či-quŋ (BTT-I) 相公 sār-quŋ (BTT-XIII) のようにやはり韻母-uŋをもつが、公主に限って上述のごとくqunčui~qunčüの形式が現われる(TT-IIA VII U-II, III, IV KP TsP etc. cf. P. 94)

(30) 787年~807年に撰述。ここでは河野六郎(1968)の記述を利用した。

(31) 河野(1968 P. 448)は江韻について「少なくとも唐代以降は -ang が最も適当である」と述べているが、ウイグルでは明確に円唇母音が表記されている。

(32) プラフミー文字ウイグル文献は、「慈恩伝」より後の時代に書かれたと推定されるが、漢語形式は「慈恩伝」時代の定着形式を用いている。なお、プラフミー文字ではuとoの区別は明確に行われる:/bol-/「なる」bol- bhol- pol-, /bul-/「探す」pul-, /bulit/「鬘」pūlit (TT-VIII pp.87~88)。

(32) TT-VII に現われる qundu は紅豆 ʃuŋ d'əu の音写とされているが、正しいとすれば qun の-nはdの前でŋが歯基音に同化した形式といえる。

b)		T	B	
	東(通3)	iuŋ	<u>u</u> ŋ	uŋŋi
	鐘(通3)	ioŋ	<u>u</u> ŋ(～on)	uŋŋi～yūŋŋi

<慈恩伝>

1° Uig. *wŋk*

(東)	嵩	siuŋ	<i>s</i> wŋk	(鐘)	鐘	tçioŋ	<i>ç</i> wŋk
	中	tçiuŋ	<i>ç</i> wŋk		封	fioŋ	<i>f</i> wŋk
	融	fiuŋ	<i>y</i> wŋk		用	yioŋ	<i>y</i> wŋk

2° Uig. *wyŋk*

(東)	宮	kiuŋ	<i>k</i> wyŋk	(鐘)	鐘	tçioŋ	<i>ç</i> wyŋk
					龍	lioŋ	<i>l</i> wyŋk
					雍	'ioŋ	'wyŋ ⁽³³⁾ (<i>k</i>)

3° Uig. *yŋk*

(鐘)	恭	kioŋ	<i>k</i> yŋk
-----	---	------	--------------

4° Uig. *w～w*

(鐘)	龍	lioŋ	<i>l</i> w	重	dçioŋ	<i>t</i> w
-----	---	------	------------	---	-------	------------

東(3)鐘(3)は「慧琳」ではなお区別があった。チベット文字文献では「大乘中宗見解」に二つの例外(-on)をもっているが、この二韻には明確な区別がなかったといってよい。ブラーフミー文字文献には区別がなかった。「慈恩伝」では a) の東(1)冬(1)と比べて2°3°の現われるのが特徴といえる。2°の -wy- はウイグル語正書法では前舌母音 ü 又は ö を表示する。ここでは ü を与えて韻母形式 üŋ を立てたい。3°は介母 i を直接反映しており、韻母 iŋ を立てたい。1°の w は表記上は a) の一等音と同一であるが、2°3°の現われるところから、それより狭い前舌よりの音価をもっていたと推定できる。ここではこの w に ü を与えて一等音と区別しておきたい。但し、円唇声母あるいは喩母と結合する場合は wy の表記がないので w には ü ではなく u が現われたであろう。4°

(33) 雍は雍京洛京 'wyŋky l'qky として現われる。ky は京を指すので雍は 'wŋy と綴られたことになるが、'wyŋk と ky とが結合して表記上 k が1つ省略されたものと単純に考えたい。

は韻尾 ŋ の表示がないが、少なくとも龍は定着形式であったといえる。 *lw* には *lúu*, *tsw* には *tsú* を与えたい。因みに漢音では東(3)は *yuu*, 鐘(3)は *you* のごとく韻尾 ŋ は欠落している。又、朝鮮文献では東鐘の区別の他、三等と四等の区別がみられる：東(3)ung 東(4)yung 鐘(3)ong 鐘(4)yong.
 <他の文献>

他でも *uŋ* がふつりに立つ。上掲2°のごとく *üŋ* の現われる場合もみられる：窮 *g'iuŋ* *küŋ* (Ts'P)。定着形式と推定される龍 *lü~lúu* も色々の文献に現われる (MS BTT-III U-III etc.)。BTT-XIII には重が現われるが *èu* のごとくやはり ŋ を欠いている。

2.2.1.2 宕 攝

a)	T	B
唐 (開1) <i>âŋ</i>	<i>o~aŋ</i> (糠康)	<i>ā</i>
唐 (合1) <i>uâŋ</i>	<i>o~waŋ~woŋ</i>	/
	正齒 正齒	
陽 (開3) <i>iâŋ</i>	<i>yo~o~oŋ</i> (帳) <i>~aŋ~yaŋ</i>	<i>ā~yā</i>
陽 (合3) <i>iuâŋ</i>	<i>o'o~oŋ~waŋ</i>	<i>vā</i>

<慈恩伝>

1° Uig. *w*

(唐開1) 藏 <i>dz'âŋ</i> <i>tsw</i>	(陽開3) 尚 <i>ziâŋ</i> <i>šw</i>
郎 <i>lâŋ</i> <i>lw</i>	襄 <i>siâŋ</i> <i>sw</i>
剛 <i>kâŋ</i> <i>qw</i>	昌 <i>tç'âŋ</i> <i>čw</i>
(唐合1) 広 <i>kuâŋ</i> <i>qw</i>	良 <i>liâŋ</i> <i>lw</i>
皇 <i>ɣuâŋ</i> <i>qw</i>	(陽合3) 坊 <i>fiuâŋ</i> <i>v</i>

2° Uig. *ww*

(唐合1) 光 <i>kuâŋ</i> <i>qww</i>	(陽開3) 長 <i>d'iâŋ</i> <i>čww</i>
(陽合3) 房 <i>v'iuâŋ</i> <i>vww</i>	梁 <i>liâŋ</i> <i>lw</i>
	常 <i>ziâŋ</i> <i>šww</i>

3° Uig. 'w

(唐合1) 光 kuân q'w 皇 ruân q'w

4° Uig. wy

(陽開3) 梁 liân lwy 涼 liân lwy

5° Uig. 'nk

(陽開3) 様 yian y'nk (陽合3) 王 huan v'nk

宕摂での特徴は韻尾 η を脱落させている点である。これはチベット文字文献、ブラーフミー文字文献とも平行する。唐陽の核母音はチベット文字では o~a, ブラーフミー文字では ā (実際の音価は o である。水谷 P. 25) が表記されている。1°唐の w が広い母音を表わした可能性は大きい。この w に o を与えたい。2°の ww は介母をもった韻母に現われる。「慈恩伝」と同じく韻尾を脱落させた漢音は、唐 au (開1) wau (合1) 陽 yau (開3) yau~wau~au (合3) のごとく二重母音 -au をもつ。「慈恩伝」ww の第二成分も奥舌狭母音であったと考え、唐 (合1) の ww には ou を与えておきたい。3°の唐 (合1) 'w は au を表わしたと考えたい。au は 2°唐 (合1) ou の変種として扱える。4°の lwy は lwyčyw (涼州) lwyčyw (梁朝) のごとく複音節表記の第一音節を構成するのでウイグル語の正書法からは wy は一前舌母音として扱わねばならない。前舌母音によって拗音性を表示しようとしたと考えられる。wy には ö を与えてよい。一方、1°陽 (開3) では swčyw (襄州) のごとく奥舌母音の範疇を示す w が表記されている。しかし、4°を考慮すればこの w が唐(開1)のものよりは前よりの狭い母音であったと推定できる。ここでは1°の陽の w には ó を与えておきたい。2°陽の ww も唐の ww よりは前よりで狭かったと考え、óu を与えたい。5°は韻尾 η を保っている。'nk には an を与えてよい。⁽³⁴⁾ この2つの単語は韻尾 η を脱落する以前に借用され、定着した形式といえる。チベット文字文献では陽 (開3) に声母が正歯音のものとそうでないものによって二種の韻母形式が現われているが、ウイグルにはそのような区別

(34) この2例は声母に輸母が立つので an を与えたが、これと唇音声母を除いては an を与えるべきである。

はない。

<他の文献>

他では韻尾に η をもつグループともたないグループとに分れる。 η をもたないグループが最大で、 η をもつグループは、時代的にその先に位置するものと後に位置するものと更に二分できる。 η を欠く例：蔵 dz'ân tso (TT-V BTT-VII Z. Steuer Z. Singqu) ~ so (TT-VI Ga-Alt-tü UTb) 剛 kân qo (TT-VB BTT-I, XIII) 梁 liân ló (BTT-I) 長 d'ian čou ~ čó (Z. Agama) 昌 tç'ian čó (U-II₃ Ge. Mani Yamada Sho. Ava Iduq) 商 çian šou (BTT-I) 上 zian šö (TT-VII) 陽 yo (TT-VI Z. Säkiz BTT-XIII). この内、少なくとも BTT-XIII, TT-VII, UTb, Z. Agama, Sho. Ava, Iduq, Yamada は後期文献に所属するが、上掲韻母形式の現われる含蔵、金剛經、八陽經、長阿含、高昌、上元などの単語はすでにウイグル語中に定着していたといつてよい。 η をもつ例：①狼 lân lan (TT-VII₁₄) 蔵 dz'ân tsan (ETŠ Mo. Yüan) 梁 liân lan (Iduq) 相 siân san (BTT-XIII Iduq) 昌 tç'ian çan (Iduq) 楊 yian yan (Iduq) 広 kuân kon (Iduq) 皇 yuân hon (TT-VII₄₀ BTT-XIII) 王 fiuân 'on (Iduq) ②廊 lân lan (TT-VI) 倉 ts'ân tsan ~ san (U-I Suv Ge. Mani Sho. Ava U-II Z. Ernte) 場 d'ian çan (M-III BTT-XIII 「道場」) 陽 yian yan (TT-VI) 様 yian yan (U-I Suv Ts'P BTT-I Iduq) 王 fiuân wan (TT-VB U-II₇ Z. Pacht)⁽³⁵⁾。①は後期文献に現われる形式であつて、これらが新しい漢語形式を反映していることは声母の形式からも判断できる (e. x. 広の k, 王の ')。一方の②は「慈恩伝」以前に導入された形式である。②に多化する TT-VI (「八陽神呪經」) はウイグル文献中では最も早い時代に所属する文献の一つである (cf. PP. 97~98)。様, 王, 倉, (道) 場は「慈恩伝」をふくむ色々の時代の文献にみられる定着形式として固定していた。 η を欠く韻母には óu ou ö も現われるが、「慈恩伝」と同じく唐(開1)には出てこない (cf.

(35) TT-VI には t'nk という形式がある。これに Gabain は堂 d'an をあてたが、等とも読めると註記(85)している。

(36) 長 d'ian を çan と読んだ例が U-II81-70 と Suv 4-7 にみられるが、いずれも人名を表わし、確実とはいえない。

上掲, 商, 陽, 上).⁽³⁶⁾

2. 2. 1. 3 梗攝

a) 庚 (開 2) aŋ	<u>e~eŋ</u>	e
耕 (開 2) ǎŋ	/	/
庚 (合 2) uaŋ	/	/
耕 (合 2) uǎŋ	/	/
庚 (開 3) iaŋ	<u>e~ye~eŋ</u>	/
庚 (合 3) iuaŋ	<u>we'e</u>	/
清 (開 3) ieŋ	<u>e~ye~yen</u>	e~ye
清 (合 3) iueŋ	<u>we</u>	/
青 (開 4) ieŋ	<u>e~ye</u>	ye
青 (合 4) iueŋ	/	/

<慈恩伝>

1° Uig. y (#'y)

(庚開 2) 庚 kaŋ qy 衡 ɣaŋ qy

2° Uig. y

(庚開 3) 京 kiaŋ ky (清開 4) 正 tɕieŋ ɕy

慶 k'iaŋ ky 声 ɕieŋ ʃy

英 iaŋ #'y 令 lieŋ ly

(庚合 3) 永 fiuaŋ wy 瀛 yieŋ #'y

明 miuaŋ⁽³⁷⁾ my

(青開 4) 經 kieŋ ky 寧 nieŋ ny

定 d'ieŋ ty

3° Uig. yy

(庚合 3) 環 kiuaŋ kyy

(37) Hs-X の Tezcan (711)では明蔵を写した形式を mintso としているが、これは誤りで実際には mytsw と表記されている。

4° Uig. *y'*

(庚開3) 敬 *kiaŋ ky'* (清開3) 瀛 *yien yy'*

「慧琳」ではすでに耕(2)は庚(2)に、庚(3)と青とは清に合流していた。

「慈恩伝」韻尾の *ŋ* はチベット文字文献やブラーフミー文字文献と同じく欠落する。ウイグル文字 *y(ʃ'y)* はウイグル語の *iie* の三種の母音を表示しうる。しかしチベット文字やブラーフミー文字文献は一般に *e, ye* を表示し、*i* の表示はない。又、開2と開3の間には若干の区別もみられる。漢音でも開2は *au*、開3は *ei* のごとく区別があり、しかも開3においても *i* よりは広い母音を反映している。ところで、ウイグル文献 TT-VIII のブラーフミー文字では梗撰に所属するものには次のような表記がある：(庚開2) 庚 *kaŋ qe* (P 31, 39) (庚合3) 丙 *piuaŋ pe* (P6, 35) 平 *b'iuuaŋ pe* (P3, 28, 37) (青開4) 丁 *tien dhe* (P36) 定 *d'ien dhe* (P4, 29, 38)。韻母は全て *e* で表わされている。ブラーフミー文字の *e* はウイグル語の *ä* とは対立する狭い *e* を表わす。この形式とチベット文字文献(T)、ブラーフミー文字文献(B)あるいは漢音の形式とを考慮するなら、⁽³⁸⁾少なくとも2°の *y'* には *e* を入れるべきである。*q* はウイグル語では前舌母音とは結合しないので、1°の *y'* に *e* を入れるのは無理がある。ここでは奥舌狭母音に所属する *i* を入れておきたい。*i* は [ë] に近い音声をもったと推定できる。3°の *yy* は庚(合3)の特徴を表わしており、漢音三・四等にみられる *ei* と同じ *ei* を与えておきたい。4°の *y'* は三つの考えが可能である。*y'* は敬宗 *ky'tswŋk* 瀛州 *yy'čw* と表記されている。1) *y'* は二重母音に読んで *'* を *ä* とすることもできる。2)「慈恩伝」では固有名詞を漢字毎に切り離して書くこともある：王義 *w'ŋk ky*、又続けて書く場合も多い：遂良 *swyrlw*、そしてこの *'* はこの両者の中間の表記に用いられた。すなわち *'* は分離符号であったとする。3)「慈恩伝」では *'* と *n* との区別はない。公主が *kwnčwyt* と表記され、*ŋ* に対して *n* を留めたように、「慈恩伝」の *'=n* もなおもとの韻尾の

(38) 洛京 *layke* には後舌母音に結合する接尾辞 *-ya* (与格) が付くので(VII-1a-2)、末尾の *e* は第1音節の *a* に同化して後舌母音化していたと推定できる。ここではもとの形式である *e* を立てておきたい。

鼻音性を書き留めたとする。上掲の1)は昔 *iek* 仙(開3) *ien* 塩 *iem* が *ig en em* に反映されて、決して *-eä~iä-* の例をもたないことや、単独語形に例をもたないことから、可能性は小さい。2)も韻尾に *ŋ* をもつこの二つ以外に同様の例が見付かっていないので可能性は小さい。3)に関しては現在のところこれを否定する理由はない。ここでは一応3)を採用しておきたい。

<他の文献>

他でも4°を除いて「慈恩伝」と同じ表記がみられる。*yy* は 丙 *piuaŋ pɥy* (TT-VII) に現われるが、やはり庚(合3)に所属する。又、韻尾 *ŋ* をもった形式もみられるが全て後期文献においてである：庚 *kaŋ→kiəŋ* (中原) *kiŋ* (BTT-XIII) 卿 *k'iaŋ→k'ieŋ kiŋ* (BTT-XIII R.S.Chü) 丙 *piuaŋ→pieŋ piŋ* (BTT-VII) 省 *sieŋ→sieŋ siŋ* (Iduq) 正 *tɕieŋ→tɕieŋ ɕiŋ* (BTT-VII UTb) 領 *lieŋ→lieŋ liŋ* (Iduq) 令 *lieŋ→lieŋ liŋ* (UTb BTT-VII Iduq) 定 *d'ieŋ→tieŋ tiŋ* (TT-VII₁₈) 丁 *tieŋ→tieŋ tiŋ* (TT-VII₁₈ BTT-XIII).

2.2.1.4 曾撰

a)	T	B
登(開1) əŋ	<u>eŋ</u> ~in	imɳi
登(合1) uəŋ	/	/
蒸(3) iəŋ	<u>eŋ</u> ~in	imɳi

<慈恩伝>

1° Uig. *ynk*

(登開1) 層 *dz'əŋ tsynk* 恒 *ɣəŋ qynk*

2° Uig. *ynk*

(蒸3) 乘 *dz'iəŋ ʃynk* 仍 *nziəŋ ʒynk*

3° Uig. *wnk*

(登合1) 弘 *ɣuəŋ qwnk*

登(開1) 蒸(3)の核母音はブラーフミー文字文献では *i(i)* が現われる。

チベット文字文献の「千字文」では e が、他では i が現われる。ここでは1°の *ynk* には *iŋ* を、2°の蒸(3) *ynk* には1°の核母音よりは前舌よりの母音をもった *iŋ* を与えたい。3°の登(合1) *wnk* の *w* は1° *y* の円唇母音 *u* であったと考え、韻母形式 *uŋ* を立てたい。

<他の文献>

他でも蒸(3) には *iŋ* が現われる：升 *ciəŋ šiŋ* (U-II_{7,8} Hk-II) 乘 *dz'iəŋ šiŋ* (U-I BTT-XIII Sho.Ava.)。登(開1) には *iŋ*, *aŋ*, *oŋ* が現われる：増 *tsəŋ siŋ* (Ga. Drucke) 層 *dz'əŋ siŋ* (BTT-I, III) 駮 *təŋ taŋ* (TT-VB) 僧 *səŋ saŋ* (Maitri Ts'P TT-VI U-III)~*soŋ* (U-II TT-IVA)。最後の *soŋ* は仏僧 *burson* に現われるが、第二音節の *o* は第一音節の *u* に同化した形式と考えられる。*iŋ* は破擦音声母に結合する傾向があるといえる。因みに漢音では首撰に所属する韻母の韻尾 *ŋ* は脱落し、登(開1) *ou* 蒸(3) *you* 登(合1) *wou* となっている。

2.2.2 韻尾に *n* をもつ韻母の反映

2.2.2.1 臻撰

a)		T	B
	痕(1) <i>ən</i>	<u><i>in</i></u>	<i>aɲni</i>
	魂(1) <i>uən</i>	<u><i>on</i></u> ~ <u><i>un</i></u>	⁽³⁹⁾ <i>vimni</i> ~ <i>imni</i> (唇)

<慈恩伝>

1° Uig. *yn* (#*yn*)

(痕) 根 <i>kən</i>	<i>qyn</i>	(魂) 門 <i>muən</i>	<i>myŋ</i>
恩 <i>'ən</i>	<i>#'yn</i>	本 <i>puən</i>	<i>pyŋ</i>

2° Uig. *wn*

(魂) 孫 <i>suən</i>	<i>swn</i>	論 <i>luən</i>	<i>lwn</i>
敦 <i>tuən</i>	<i>twn</i>		

(39) *-ɲni* は *n* を表わす(水谷 P.25)。又、*v* は [w] 又は [u] に近い音を表わすという(水谷 P.4)。

1°痕の *y* (*y*) はチベット文字文献と同じく狭母音を表わそうとした。2.2.1. 4a)-1°と同様にこれに *i* を与え、韻母形式には *in* を立てたい。合口韻 2°の *wn* の *w* には *i* の円唇音 *u* を与えて *un* を立ててよい。1°の魂に所属する門本の韻母にも *in* を与えることができるが、2°との違いはこれらが唇音声母と結合する点である。

<他の文献>

他にも痕は *in* をもち、魂は *un* をもつ：恩 *'ən 'in* (Feng BTT-XIII) 尊 *tsuən tsun* (Maitri UTb)~*sun* (UTb) 存 *dz'uən sun* (TT-VII). 魂に所属する唇音声母と結合する韻母には「慈恩伝」と同じく *in* が現われる：門 *muən mīn* (KIP U-II₃ TT-VII) 本 *puən pīn* (Z.Steuer UTb). しかし門は後期の文献では *mun* (TT-VII₁₄ Iduq) のごとく *un* をもつ例もみられる。闍 *k'uən* には例外的に *kún* (U-III_{1,3,7} U-IVC)~*kúun* (BTT-XIII) の形式が現われる。⁽⁴⁰⁾ 又、論にも *lun* に混って *luän* (TT-VB)がみられる。

b)		T	B
真 (3)	iën	<u>in</u>	imni
欣 (3)	iən	<u>in</u>	/

<慈恩伝>

1° Uig. *yn*

(真3) 仁	<i>nziën</i>	<i>žyn</i>	麟	<i>liën</i>	<i>lyn</i>
秦	<i>dziën</i>	<i>tsyn</i>	浜	<i>piën</i>	<i>pyn</i>

「慧琳」では欣は真に合流している。チベット文字文献、ブラーフミー文字文献では核母音は *i*(*i*) で示される。漢音も *in* の韻母形式をもつ。又、TT-VIII のブラーフミー文字表記でも辛 *siën* に *sim* の例がみられるので、1°の *yn* にも *in* を与えてよい。他の文献に欣の例はないが、真の例は全て *in* で現われている。

(40) *kwn kwon* と綴られている。又 *-täki* のごとく前舌母音と結合する接尾辞がつくので、*kún* や *kúun* の *ú* は前舌音として扱われた。

c)		T	B
文 (3)	iuən	<u>un</u>	viṃni~iṃni (唇)
諄 (3)	iuēn	<u>un~on</u>	/

<慈恩伝>

1° Uig. *wyn*

(文3) 訓	χiuən	⁽⁴¹⁾ <i>kwyn</i>	(諄3) 舜	çiuēn	<i>šwɣn</i>
君	kiuən	<i>kwyn</i>	倫	liuēn	<i>lwɣn</i>

2° Uig. *wɣyn*

(諄3) 濬 *siuēn swɣyn*

3° Uig. *yn*

(文3) 文 *ɱiuən vɣn* 問 *ɱiuən vɣn*

「慧琳」ではすでに文諄は合流している。1°の訓は人名の文訓を *vynkwɣn*, 倫は師倫を *sylwɣn* と綴った中に現われている。⁽⁴²⁾ ウイグル語 正書法では第二音節に立つ円唇母音 *ouöü* は全て *w* で綴られるので、上掲 *wy* は単母音ではなく<円唇母音+y>の二重母音を表示したことがわかる。一方、2°では明濬を *my swɣyn* と綴っているが、第一音節表記 *swɣyn* (濬) の *wɣyn* は明らかに<前舌円唇母音+y>を表わす。この *wɣyn* には *üin* を与えてよい。又、1°の円唇母音も前舌音であった可能性は大きい。ここではこの *wyn* に *üin* を与えておきたい。二重母音の第二要素を *e* とせず *i* としたのはブラーフミー文字文献(B)を参考にした。3°は円唇声母を条件として *yn* と表記したもので、*yn* には *in* を与えてよい。1°と3°の分布条件はブラーフミー文字文献のものと平行する。

<他の文献>

他では順 *dçiuēn šuin* (TT-VII) 軍 *kiuən kün* (TT-VII) 春 *tçiuēn*

(41) Hs-VII (Gen. 5a-5)では文訓が *winkün* と読まれている。この訓は馮 (1953) や Csongor によっても *kün*, *hün* と転写されている。文訓は *vynkwɣn* と綴られているので、*-wy-* は2重母音に読まねばならない。単母音なら *vynkwɣn* と綴られるか、*vyn kwɣn* と表記される。
 (42) *sylwɣn* を Tezcan (X-994) は *šilun* としているが、*-wy-* を *-u-* とは読めない。

čüän (TT-VB)のごとく必ずしも ün に統一されていない。又、円唇声母と結合するものにも円唇母音が現われる：文 m̩iuən v̩n (TT-VII₁₄)

2.2.2.2 山摂

a)	T	B
寒 (1) ân	<u>an</u>	aṃni
桓 (1) uân	<u>wan</u> ~ <u>an</u> (唇)	vaṃni
山 (開2) ǎn	<u>an</u> ~ <u>en</u> ~ <u>yen</u>	aṃni
刪 (開2) an	<u>an</u>	/
山 (合2) uǎn	/	/
刪 (合2) uan	wan	vaṃni

<慈恩伝>

1° Uig. 'n

(寒) 安 ân 'n⁽⁴³⁾ (山開) 山 ǎn ʃ'n
 讚 tsân ts'n
 看 k'ân q'n

2° Uig. w'n

(桓) 觀 kuân qw'n 館 kuân qw'n

3° Uig. wwn

(桓) 觀 qwwn

4° Uig. 'p

(桓) 般 puân p'

「慧琳」では山は刪と合流している。寒も中世漢語への過程でこれらと合流する。チベット文字文献、ブラーフミー文字文献ではすでにこれらの間に区別はないといえる。

(43) 長安 čwo 'n を Tezcan (X-10) は čoo-nan, Tuguševa (V-126-13) は čü-nan と読んでいるが、もちろん誤りである。'は a の初頭音表記である。又安は上古音においても初頭に n をもたなかった。

1°の寒, 山(開2)を表わす 'n には an を与えたい. 2°w'n 3°w^{wn} の最初の w は合口音を反映したもので, 2°には uan, 3°には uon を与えてよい. 4°' には a を与えることができるが, この形式は常に般若 p'z' に用いられ, 定着形式であった. だが合口韻母が唇音声母に結合して唇音性を表示しない点はチベット文字文献と平行している. 韻尾 n の欠如に理由はない. 般若ではなく波若 puā nziā を音写した可能性もある.

<他の文献>

他にも寒, 山(開2)はふつう an で表示される. 恒(合1)の合口性は「慈恩伝」と同じく牙音の後で表示される. 又, uan の他に an もみられる: 観 kuān qon (BTT-XIII Ha.Gedicht Sho.Ava)~quan (Ts'P U-II₃ KIP) 官 kuān qan (TT-V)~quan (Ge. Mani Feng)⁽⁴⁴⁾ 唇音の後では「慈恩伝」と同じく an が立つ: 満 muān man (TTVII, VIII) 般 puān pan(TT-VB)~pa(BUY「般若」). 刪(合2)の例は「慈恩伝」にはみられなかったが, 唇音声母を条件として an が現われる: 版 puan pan (U-II₆) 板 puan pan (BTT-XIII Z. Datierung)⁽⁴⁵⁾.

b)	T	B
先(開4) ien	<u>yan</u> ~yen~en	yemni
仙(開3) ien	<u>yan</u> ~ <u>yen</u> ~ <u>an</u> (正齒)	amni~yemni
元(開3) ien	en	vamni
先(合4) iuen	ywan	/
仙(合3) iuən	<u>wan</u> ~ <u>wen</u>	/
元(合3) iuən	<u>wan</u> ~ <u>an</u> (唇)	vamni

<慈恩伝>

1° Uig. yn

(44) 耿世民 (Ge. Mani l. 22)が官布を写した形式に qoqpu を与えたのは正しくない. qw'' pw の '' を q と読んだが, '' は 'n であって qw'n- は quan- と読まねばならない.

(45) ETŞ には翰林 ʔân lim に対して q'lym が対応しているが, ʔân の -n が lim の l- に同化減少して n が消失したと考えられる. q'lym には halim を与えたい.

(先開4) 殿 d'ien tyn (元合3) 遠 ŋiuən wɣyn

堅 kien kyn (仙合3) 院 ŋiuən wɣyn

顯 ɣien kyn 亮 yiuən wɣyn

(仙開3) 乾 g'ien kyn

彦 ŋien kyn

禪 zien šyn

2° Uig. wɣyn~wɣwn

(元合3) 元 ŋiuən kwɣyn (仙合3) 伝 d'iuən čwɣyn

(先合4) 玄 ɣiuən kwɣyn 專 tɕiuən čwɣyn

宣 siuən tswɣyn

卷 kiuen kwɣyn~kwɣwn

「慧琳」では先仙元は合流している。但し元韻の唇音声母と結合するものは、後に「中原音韻」の寒山韻に入る。1°における先仙元も、2°における先仙元もそれぞれ基本的には同じ韻母形式を反映していると推定できる。すなわちこれら三韻母は合流していた。チベット文字文献、ブラーフミー文字文献(B)ではこれらの韻の核母音として e~a が表われる。漢音では en が立つ。TT-VIIIのブラーフミー文字では元(開3) 建 kien, 先(開4) 蓮 lien が khem lemのごとく核母音 e をもって表示されている。1°の yn にも en を与えてよい。元(合3) 遠, 仙(合3) 院亮は喻母を条件として1°の形式をとるといえる。2°の玄は鄭玄 čykwɣyn, 宣は義宣 kytswɣyn と表記されている。したがって kwɣyn⁽⁴⁶⁾ (玄) tswɣyn (宣) の wy が二重母音であったことがわかる。2°のそれ以外の例は第一音節の表記をもっているが wy はやはり二重母音と考えるべきである。又, w は拗音性を反映して前舌音であった可能性が大きい。ここでは2°の wɣyn に uən を与えておきたい。なお巻はチベット文字文献でも例外的に

(46) Hs-IV, VII に現われる kwqčwɣyn に Arlotto (1966, P.197) が同定したように 顛 顛 luk tɕiuən の音写と考えるべきであろう。tɕiuən (仙合3) は čwɣyn と写されている。なお, Toalster は kwqčwɣyn を lurčün と転写し、墨 韌の音写とするがこれは誤りである (cf. Kara 1983 pp.46~47, 及び J. Hamilton の Toalster (1977) の書評 BSOAS. Vol. 41-Pt. 3 P.617).

kwon と綴られている。kwɔn には kuón を与えたい。

<他の文献>

他にも先(開4) 仙(開3)には yn(en) が現われる: 田 d'ien tyn (BTT-XIII Z.Steuer) 麵 mien myn (Hk-I U-I₇ USp₇₆⁽⁴⁷⁾). 「慈恩伝」には例はないが、元(開3)にも yn(en) が現われる: 建 kiɛn kyn (TT-VII)~khem (TT-VIII). 元(合3) 仙(合3)には wɔn(üen)~wn(ün)~wɔn(üón) が現われる: 元 wɔn(üduq)~kwn(TTVII) 卷 kwɔn(Ts'P TT-VI)~kwɔn(BTT-XIII Ha. Gedicht) 宣 swɔn. 元(合3)に所属する万 miuɛn には p'n のごとく 'n(an) が現われるが、これは借用定着形式である。但し核母音に唇音性のないのは声母が唇音をもつからである。

2.2.3 韻尾にmをもつ韻母の反映

2.2.3.1 咸攝

a)	T	B
覃(1) âm	<u>am</u>	aɱmi
談(1) âm	<u>am</u>	aɱmi
銜(2) am	<u>am</u>	/
咸(2) ǎm	<u>am</u>	/
釅(3) iɛm	<u>em</u>	/
凡(3) iuɛm	am	vaɱmi
塩(3) iɛm	<u>em</u>	/
添(4) iem	<u>yam</u> ~em~am	yɛɱmi

<慈恩伝>

1° Uig 'm

(談1) 三 sâm s'm (銜2) 讖 tɕ'am ǰ'm

南 nâm n'm

(47) TTVII-18(31)には延'ien が yiu の形式で表わされている。u が n の誤植でないと思えば、yiu は別の漢語を写したものと考えられる。

2° Uig. 'm

(凡3) 梵 v'iuem v'm

「慧林」では覃と談、銜と咸、嚴と塩と添はそれぞれ合流している。唇音声母と結合する凡と嚴は中世漢語への過程で寒山韻に合流する。談銜はチベット文字文献でも同一形式 am が現われる。漢音においても am が現われる。1° の 'm には am を与えてよい。2° 'm にもチベット文字文献と同じ am を立てることができる。⁽⁴⁸⁾

<他の文献>

他でも談銜には am が現われる：甘 kām qam (Hk-II Suv) 三 sām sam (TS'P BTT-VIII) 讖 tṣ'am čam (BTT-XIII) 讖 dz'am čam (USp_{56,73})。覃(1)にも am が立つ：貧 t'ām tam (TT-VII) 龕 k'ām qam (Suv)。ただ含 ɣām にはふつう ham が立つが (Ga. Drucke K. Z. Agama), 「含嚴」を表わす場合には xöm が現われる。この形式は定着形式(xöm_{tso}~xöm_{so})であった。塩(3)には em が立つ：廉 liem lem (TT-VII) 簾 liem lem (Maitri)。

2.2.3.2 深摂

a)	T	B
侵(3) iəm	<u>im</u>	iṃmi

<慈恩伝>

1° Uig. ym

壬 nziəm	žym	林 liəm	lym
金 kiəm	kym	櫛 liəm	lym

ym にはチベット文字文献と同じく im を与えてよい。TTVIII のブラーフミー文字でも壬が šim で表記されている。

<他の文献>

ふつうは im が現われる：壬 šim (TT-VII, VIII Z.Stab.) 金 kim (Ts'P

(48) cf. 註26.

BTT-I, III) 標 lim (TT-I). 後期文献中には韻尾の -m が -n になったものがある：琴 g'iəm kin (BTT-III).

2.2.4 韻尾にuをもつ韻母の反映

2.2.4.1 効摂

a)		T		B
豪 (1)	áu	<u>au</u> ~ <u>e'u</u>		au
肴 (2)	au	<u>a'o</u> ~ <u>e'u</u>		au

<慈恩伝>

1° Uig. 'w

(豪1) 草 ts'áu ts'w (肴2) 教 kau q'w

高 káu q'w 孝 χau q'w

宝 páu p'w

2° Uig. w

豪 (1) 道 d'áu tw (~t'w)

3° Uig. '

肴 (2) 孝 χau q'

豪と肴は中世漢語への過程で合流する。チベット文字文献では両韻には若干の異りがみられる。ここではブラーフミー文字文献と同じく、'w には au を与えて、両韻は合流していたと考えたい。2°3°は例外形式として扱いたい。2°は常に道人 *twyym* に現われるが、tw には to を与えたい。3°の q' には ha を立てる。

<他の文献>

他では au の他に o がしばしば現れる：道 d'áu tau (Maitri M-III) ~ to (Ts'P U-III Sho.Ava 「道人」) 高 káu kau (Iduq) ~ qo (U-II₃ Ge. Mani Iduq Sho.Ava 「高昌」) 鈔 tš'au čau (USp Iduq) ~ čo (Z. Pacht). 又、韻尾が u にかわって v で現われることがある：道 tav (BTT-XIII). Hk-I, II の荷

d'âu da は「慈恩伝」の孝 ha と平行する。

	T	B
宵 (3) ieu	<u>a'u</u> ~ <u>ya'u</u> ~ <u>ye'u</u> ~e'u	/
蕭 (4) ieu	<u>ya'u</u> ~ <u>e'u</u>	/

<慈恩伝>

1° Uig. *yw*

(宵 3) 晁 d'ieu čyw ⁽⁴⁹⁾	(蕭 4) 蕭 sieu syw
照 tçieu čyw	堯 ñieu kyw
小 sieu syw	遼 lieu lyw

2° Uig. 'w

(宵 3) 趙 d'ieu č'w	紹 zieu š'w
超 tçieu č'w	

3° Uig. *w*

(宵 3) 姚 yieu yw

「慧琳」では宵蕭はすでに合流している。漢音では両韻に eu が反映しているが、その形式とチベット文字文献の形式、更に2°の変種 'w の存在を考慮するならば、1°の *yw* には iu ではなく eu を与えるべきである。2°の 'w は1°の変種として äu を立てることができる。3°は喻母を条件として現われた1°の変種であって、w には u を与えてよい。宵だけが2°の äu をもつことは、宵と蕭との間になお音声上、若干の異りのあったことを示している。

<他の文献>

宵の例があるが、核母音には全て ä が現われる：朝 tçieu čäu (TT-VII) 招 tçieu čäu (TT-VB) 小 sieu säv (Suv). säv の v は a) の道 tav の v に平行する。

2.2.4.2 流撰

(49) Tuguševa (12a-2) は čau と読んだが誤りである。

a)		T		B
侯 (1)	əu	<u>a'o~e'u~u</u> (唇)	~i'u	au
尤 (3)	iəu	e'u~u (唇)	~i'u	yau~yu
幽 (3)	iəu	/		/

<慈恩伝>

1° Uig. yw

(侯1) 寶 d'əu tyw

2° Uig. yw

(尤3) 流 liəu lyw 州 tçïəu cyw

周 tçïəu cyw

3° Uig. ww~w

(尤3) 祐 fiəu yww (侯1) 戊 məu bww~w

州 tçïəu čw

4° Uig. 'w

(侯1) 楼 ləu l'⁽⁵⁰⁾w

「慧琳」では尤と幽は合流している。又、侯尤の唇音声母と結合する韻母は合流する。

1°と2°とは共に yw で表記される。尤の核母音にはチベット文字文献では e~i, プラーフミー文字文献では a, 又、漢音では i(u)が立つ。侯の核母音にはチベット文字は ae i, プラーフミー文字は a, 漢音は o(u)である。yw の y はウイグル語の i e i を表わすが、ここでは2°の尤の y が i の範疇に所属し、1°侯の y が i より奥舌よりの i に所属するものと考えたい。実際の音価としては尤の i が [i]~[e], 侯の i が [i]~[ë] をもっていたものと推定できる。韻尾の w には u を与えたい。3°の戊は声母に唇音をもつ。侯の唇音と結合する韻母はチベット文字文献と同じく尤の唇音声母のものと合流して u になった

(50) 耿世民(1986「重修」)は ariy çongluγ bi taš tururdi (l.21) の çongluγ を鐘楼の音写と考え、この一文に「并立鐘楼碑石」の訳を与えた。しかし luγ は楼ではなく、çong 鐘についた形容詞表示接尾辞である。すなわち çongluγ bi taš は「鐘(çong)のついた碑(bi)石(taš)」を表わす。bi も碑の音写形である。

と考えてよい。戊の *w ww* には *u, uu* を与えることができる。祐の *ww* は
 喻母を条件として現われたもので、やはり *uu* を立てたい。州の *u(w)* は *iu*
 にかわって例外的に現われた形式である。4° の 'w は例外として扱えるもので、
au とした。楼は Ts'P では *liu* の形式が立つ。

<他の文献>

他でも侯には *iu*, 尤には *iu* がふつうに現われる：(侯1) 口 *k'əu qiū*
 (Ts'P) 后 *ɣəu hīu* (TT-VII BTT-XIII) (尤3) 留 *liəu liu* (Iduq) 秋 *ts'iau*
tsiu (TT-VB) 収 *ɕiau šiū* (TT-VII) 州 *tɕiau čiu* (BTT-I Suv). 唇音声母
 に結合するものには *u~uu* が現われる：戊 *məu bu* (TT-VIII)~*buu* (TT-
 VII) 母 *məu mu* (BTT-XIII)~*buu* (BTT-XIII). 又、核母音 *i* の消失した
 例もみられる：州 *čū* (Mo.Yüan) 呪 *tɕiau čū* (Suv) 篋 *ɣəu hu* (TT-IX)
 豆 *d'əu du* (TT-VII). 篋には *hau* (KP U-IVA Maitri) の形式があるが、
 これは「慈恩伝」楼 *lau* に平行する。又、収 *ɕiau* の *šiv* (TT-VII)にみられ
 る -v は効撰の道、鈔、少などの韻尾形式と平行する。⁽⁵¹⁾

2.2.5 韻尾に *i* をもつ韻母の反映

2.2.5.1 蟹撰

a)

泰 (1)	ai	<u>e'i</u> ~e~a'i	ayi
哈 (開1)	ai	<u>a'i</u> ~e'i~e~a'e	ayi
皆 (開2)	ai	<u>e'i</u> ~e	eyi
佳 (開2)	ai	a~e~we	eyi
夬 (開2)	ai	/	/
齊 (開4)	iei	<u>e'i</u> ~ <u>ye</u> ~e	i~yai

(51) UTb BTT-XIII Ge.Tutum などには *lūkčün* という地名表示の形式が現われる。この地名は、Ge. Tutum (P. 82) によると現在のトゥルフアン東南の魯克沁であり、漢代の柳中にあたるという。*lūkčün* は UTb のように柳城にあてられることもあるが、柳中 (*liəu tjuŋ*) の上古音 *liōg tjuŋ* を写したと考えれば無理がない。ウイグル文献の漢語音形式としては例外的存在である。

祭 (開3) *iei* *e'i*~*e*

廢 (開3) *iei* / /

<慈恩伝>

1° Uig. 'y

(泰開1) 大 <i>d'ai t'y</i>	(哈開1) 才 <i>dz'ai ts'y</i>
太 <i>t'ai t'y</i>	台 <i>t'ai t'y</i>
泰 <i>t'ai t'y</i>	(皆開2) 齋 <i>tšai č'y</i>
	(佳開2) 街 <i>kaī q'y</i>

2° Uig. y

(齊開4) 弟 <i>d'iei ty</i>	齊 <i>dz'iei tsy</i>
西 <i>siei sy</i>	

泰哈、皆佳夫は「慧琳」ではそれぞれ合流して各一韻になる。ブラーフミー文字文献ではこの二グループには明確な区別があった。チベット文字文献にも若干の区別がみられる。「慈恩伝」にもこの区別の存在した可能性は大きいが、表記上の弁別はない。ここでは1°の'yにおいて泰哈には *ai* を与え、皆佳 (夫) には *äi* を与えて、両グループを区別したい。ä は *a* より狭い母音を表わす。齊祭廢も「慧琳」では合流している。これらの韻は後に止摂に入る。チベット文字文献では齊祭は合流しているものの、なお止摂とは異った形式を保っている。ブラーフミー文字文献では止摂と同じ形式 *i* が立つ。2° に掲げたように、「慈恩伝」では齊は単母音表示の *y* が現われている。ブラーフミー文字と同じくこれには狭母音 *i* を与えておきたい。すなわち齊母は止摂と同じ形式を示す⁽⁵²⁾。

<他の文献>

他でも泰哈皆佳は 'y で表記されている。齊は *i* の他に *ii* の例もある：閉 *piei*

(52) TT-VIII のブラーフミー文字表記では閉 *piei pi* 弟 *d'iei te* のごとく齊韻が *i* と *e* で現われる。しかし *te* は早い時代の借用定着形式、弟子にみられるので、ここでは閉 *pi* の形式を「慈恩伝」の形式と考えたい。なお、弟子には Hs-VII と U-III8 に *taisi* あるいは *taitsi* が現われる。Gabain (Hs-VII 註1778) はこれを太師の音写形式との混淆による変種と考えた。なお、齊韻はチベット文字文献「千字文」では *ts* 組 (精清從心邪) *k* 組 (見溪群疑) には *ye* が現われ、他の声母の後では *e'i* が現われるが、ウイグルではその区別はみられない。

pii(TT-VII). ii は齊韻の特徴を表わしているといえる。祭(開3)の例がみられるが、やはり i が立つ：世 ɕiei ši (U-II_{3,8} KIP) 祭 tsiei si(UTb).

b)	T	B
泰(合1) uâi	<u>wa</u> 'i~we'i~we	/
灰(1) uâi	<u>wai</u> ~ <u>a</u> 'i(唇)~ei	/
皆(合2) uăi	<u>we</u> 'i	/
佳(合2) uaī	<u>wa</u> ~we	/
夬(合2) uai	/	/
齊(合4) iuei	<u>we</u>	/
祭(合3) iuei	<u>we</u> 'i	vī
廢(合3) iuei	/	/

<慈恩伝>

1° Uig. wy

(灰1) 罪 dz'uâi tswy (皆合2) 槐 γuăi qwy⁽⁵³⁾
 (齊合4) 慧 γiuei kwy 懷 γuăi qwy

2° Uig. y

(祭合3) 銳 fiuei wy

「慧琳」では泰灰、皆佳夬はそれぞれ合流して二つのグループになっている。チベット文字文献「千字文」では第一のグループは第二のグループより広い核母音をもっているが、「金剛經」などでは両グループに区別をつけ難い。ウイグル文献 TT-VIII のプラーフミー文字表記には槐が *hoy* と綴られている。1°の皆(合2)槐懷の *wy* の *w* も *o* であった可能性が大きい。一方灰(1)に所属する罪の *w* がどんな性格をもっていたかの判断はむづかしい。「千字文」に従うなら皆(合2)より広い母音を与えねばならない。だが、上の第一のグループは中世漢語への過程で齊微廢と合流して「中原音韻」では「齊微韻」を構成する。この「齊微韻」(ui)の核母韻は皆(合2)が所属することになる「皆来韻」(uai)

(53) Tezcan (X-48)ではqay-のごとく *w* にかえて *a* を立てている。

のものより狭かった。しかし、他の文献において、唇音声母と結合する灰(1)はなおチベット文献同様に核母音 a を留めている：貝 puai pai (TT-VII U-I Suv BTT-VIII, XIII) 昧 muai bai (Ts'P TT-VB)。「中原音韻」ではこれら唇音声母をもつものも ui となる：貝 pui 昧 mui。したがって「慈恩伝」灰(1)の w がなお広い母音を表示した可能性は大きい。ここでは灰(1)皆(合2)共に wy には oi を与えておきたい。この形式は朝鮮語文献のもの⁽⁵⁴⁾と一致している(河野 pp. 498~499)。齊(合4)の韻母は(3.2.1c), (3.2.2b)との平行関係から拗音性を前舌音化で表示したと考えると、wy には ui を与えたい。2°の鋭の y は喻母との結合を条件として現われた形式であって、y には i を立ててよい。この条件をもたないものには齊(合4)と同じく ui が立つであろう。

<他の文献>

他でも灰(1)には oi, 齊(合4)祭(合3)には ui を立てることができる：罪 tsoi (Ts'P BTT-III, XIII)~soi (KP TT-IIA) 内 nuai noi (Mü. Pf) 慧 xui (Z.Steuer) 恵 γiuei xui (Feng) 歳 siuei sui (TT-VI)。又、皆(合2)には oi の他に uai の立つ例がある：壞 γuǎi huai (U-II₇)。

2.2.5.2 止攝

以下に掲げる全ての韻目が韻尾に i をもつとはいえないが、ここでは i 韻尾グループとして扱いたい。

a)	T	B	
支(開3) iě	}	}	i (~e)
脂(開3) iěi			
之(3) iəi			
微(開3) iəi			

<慈恩伝>

(54) 漢音では泰灰皆佳夬の合口音には全て wai が立つ。齊の合口には ei が立つ。

1° Uig. y

(支開3) 義	ɲiě	ky	(之3) 慈	dzʹiəi	tsy
	智	tʃiě		子	tsiəi sy
(脂開3) 師	ʃiěi	sy	記	kiəi	ky
	遲	dʹiěi			
	毗	bʹiěi			py

2° Uig. yy

義 ɲiě kyy

「慧琳」ではこれら4韻は三等四等の区別はあったが既に合流していた。チベット文字文献では*i*の他に、歯頭音、正歯音に結合する韻母に*e*の立つことがある：子 *tsi~tse* 事 *çi~çe*。このことから羅常培は既に現代北京語の資使の母音にみられる [ɿ] [ɿ] への発展の前兆のあったことを疑わせるとしている(P. 46)。朝鮮文献では歯頭および正歯音二等(歯上音)にはこのような母音を表わす形式が現われる(河野 pp. 479~480)。1°の*y*からはそのような母音は確認できないが、TT-VIIIのブラーフミー文字では弟子が *tethsi~tethse~thetse~tethtse* のごとく書かれており、子の韻母にはチベット文字文献と同じく *i~e* の二種が現われる。又、ウイグル文字によるこの単語 *tytsy~tysy* は *-iɣ, -liɣ* のような奥舌母音にのみ後接する接尾辞と結合する。したがってこの子の韻母が [i] よりむしろ [ɿ] に近い音声をもっていたことは明らかである。おそらく「慈恩伝」の*y*も歯頭音、歯上音と結合する場合は [i] より後退低下した母音を表わしたにちがいない。本来これらをウイグル語の *i* の範疇に入れることが適切かと思えるが、後の作業が複雑になるのでここではあえて *i* をもって1° *y* の発音形式とした。2°の *yy* には *ii* を入れておきたい。

<他の文献>

他でも支脂之は一樣に *y* が現われる。「慈恩伝」にはみられなかった徴(開

(55) 智は人名「馬玄智」の音写の一部である。p' baɣ-liɣ kwynčyɣ の p' は馬を指し、kwynčyɣ が玄智を指すが、Tuguševa (V-13a26~27註)はkwynčyɣ を玄智の音写という。末尾の-kはウイグル語対格の-gを表わしたものだ。

3) にもやはり *y* が現われ、*i* を与えることができる：氣 *k'iai ki* (TT-VII Ts'P UTb).

b)		T		B
	支 (合3) <i>iuě</i>	<u><i>u'i</i></u> ~ <u><i>u</i></u>	}	VI
	脂 (合3) <i>iuěi</i>	<u><i>u</i></u> ~ <u><i>wi</i></u>		
	微 (合3) <i>iuəi</i>	<u><i>i</i></u> (唇) ~ <u><i>yi</i></u> (唇) ~ <u><i>e</i></u> (飛) ~ <u><i>u'i</i></u> ~ <u><i>u</i></u>		

<慈恩伝>

1° Uig. *wy*

(支合3) 隋 <i>ziuě swy</i>	(脂合3) 遂 <i>ziuěi swy</i>
窺 <i>k'iuě kwy</i>	癸 <i>kiuěi kwy</i>
(微合3) 微 <i>χiuəi kwy</i>	季 <i>kiuěi kwy</i>
魏 <i>ηiuəi kwy</i>	

2° Uig. *y*

(脂合3) 維 <i>yiuei vy</i>	唯 <i>yiuei vy</i>
-------------------------	-------------------

3° Uig. *w*

(脂合3) 水 <i>çiuěi šw</i>

「慧琳」では支脂微は合流していた。ブラーフミー文字文献は三韻共に *vi* で表わしている。チベット文字文献にも三韻に明確な区別はない。1°では三韻が *wy* で表記されている。TTVIII のブラーフミー文字表記では危 *ηiuě* が *gyu* と綴られ、*gü* の形式を示しているので、「慈恩伝」の韻母も前舌母音をもっていった可能性が大きい。1°の *wy* の中には癸のごとく *kwy* # の表記がある。もし TTVIII のごとく韻母形式が *ü* であるなら、*kw* # と表記するのがふつうである。*wy* はチベット文字文献やブラーフミー文字文献のごとく二重母音を表わしたと考えられる。前舌円唇音と *i* との結合は *wyy* と表記することもできるが、その例は上掲韻には現われていない (cf. P.59)。もちろん *wy* は *ui*~*oi* 以外に *üi*~*öi* も表示できる。しかし、ここでは *wy* には便宜的に *üi* を与えて

おきたい。2°は喩母との結合を条件としており、y には i を与えることができる。3°は例外形式で、w には ú を立てておきたい。

<他の文献>

他では wy (úi) の他 ww (úú) がみられる：癸 kiuēi kúu (TT-VII) 危 ŋiuē gúu (TT-VII)。何れも牙音声母をもつ。「慈恩伝」同様に、喩母と結合するのは i が現われる：唯 yiuēi vi (TT-VB)。

2.2.6 韻尾にゼロをもつ韻母の反映

2.2.6.1 果摂・仮摂

a)	T	B
歌 (1) á	<u>a</u>	a
麻 (開2) a	<u>a</u>	a
麻 (開3) ia	<u>ya</u> ~a (正齒)	ya

<慈恩伝>

1° Uig. '

(歌 1) 阿 'á '	(麻開2) 賈 ka q'
羅 lá l'	沙 ša š'
河 ɣá q'	馬 ma p'
(麻開3) 若 nɕia ž'	

2° Uig. y

(歌 1) 河 ɣá qy	(麻開3) 若 nɕia žy
---------------	-----------------

3° Uig. y'

(麻開3) 射 dɕ'ia šy'

1°歌(1) 麻(開2) の ' には a を立てることができる。麻(開3) は 2° と 3° に交替形をもつので ä を与える。2°歌(1) の y は 1° の例外形式 i として扱わざるをえない。2°麻(開3) の y には i を、3°y' には ia を与えたい。⁽⁵⁶⁾

(56) Hs-X (レングラード 1a, Tez. 280)には、嘉尚という人名表記の嘉 ka にあたる部分を ki と表記している。ka の書き誤りか、誤って喜 xiqi を音写したのかいずれかと考えられる。

1° Uig. *w*

(模1) 蘇 <i>so sw</i>	(虞3) 主 <i>tçiu čw</i>
徒 <i>d'o tw</i>	武 <i>mju vw</i>
蒲 <i>b'o pw</i>	符 <i>v'iu vw</i>
(魚3) 臚 <i>lio lw</i>	
如 <i>nçio žw</i>	
書 <i>çio šw</i>	

2° Uig. *wy*

(魚3) 呂 <i>lio lwy</i>

3° Uig. *ww* (#'ww)

(模1) 杜 <i>d'o tww</i>	(魚3) 許 <i>çio kww</i>
蘇 <i>so sww</i>	褚 <i>t'io čww</i>
(虞3) 于 <i>fiu 'ww</i>	序 <i>zio sww</i>
裕 <i>yi u yww</i>	

「慧琳」では模(1)はuになる。中世漢語への過程で模魚虞は合流し、魚模韻(u, iu)をつくる。模(1)は「慧琳」同様すでに高母音化していたと考えたい。1°の*w*にはuを与える。上掲例中、多音節を綴り、その第一音節を構成するのは魚(3)の2°呂と1°臚である。呂は呂才に現われ常に*lwys'ts'y*と表記されている。したがって*lwy-*の*wy*は前舌円唇母音を表わした。TT-VIIIのブラーフミー文字では除*d'io*が*čö*と表記されているので、この*wy*に*ö*を推定することができる。一方臚は臚山に現われ*lws'n*と表記されている。*w*は前舌母音を表示しない。魚虞のそれ以外の例は正書法上、前舌後舌の決定はできない。ここでは呂の存在を考慮して、呂以外の魚の*w*には*ö*を与えておきたい。虞の*w*には*ü*を与えてよいが、円唇声母をもつ韻母は模韻と合流してuとなるので、円唇声母と結合する*w*にはuを立てたい。3°の模*ww*にはuo魚の*ww*には*üö*を与えたい。虞の裕*yi u yww*は介母要素が声母表現*y*の中に吸収されていると見做して*ww*には*uu*を与えたい。但し于*fiu 'ww*の*ww*

には $\overset{(57)}{uu}$ を立てる.

<他の文献>

模はふつう u が立つ. uo の例もみられる: 湖 γo huo (Iduq) 都 to tuo (Iduq). 魚には w と rw がみられるが, 多音節を綴る第一音節には魚商 ηio $qian$ $kw\delta rw$ (BTT-I) 所処 ξio $t\epsilon io$ $sw\epsilon w$ (Maitri) のごとく後舌母音を示す w が立っている. しかし「慈恩伝」の形式に則って \acute{o} を立てたい: 魚 $g\acute{o}$ 所 $\acute{s}\acute{o}$ 処 $\acute{\delta}\acute{o}$ 如 $n\acute{z}io$ $\acute{z}\acute{o}$ (TT-VI BUY). $\acute{u}\acute{o}$ もみられる: 如 $\acute{s}\acute{u}\acute{o}$ (BTT-XIII) 除 $d\acute{i}o$ $\acute{\epsilon}\acute{u}\acute{o}$ (TT-VII) 序 zio $s\acute{u}\acute{o}$ (BTT-I). 虞は「慈恩伝」と同じ条件のもとに $\acute{u}\sim u$ が現われる: 主 $t\epsilon iu$ $\acute{\epsilon}u$ (U-III Maitri) 珠 $t\epsilon iu$ $\acute{\epsilon}u$ (Hk-II) 俱 kiu $k\acute{u}$ (TT-VB) 府 fiu fu (Iduq) 撫 $f\acute{i}u$ fu (Z.Sklaven). 喻母と結合する w には「慈恩伝」の裕の場合と同じく u を与える: 瑜 yiu yu (TT-VB). 又, 円唇声母と結合する w には uu を与えてよい. 傅 fiu fuu (BTT-I) 符 $v\acute{i}u$ fuu (TT-VII KIP).

2.2.7 韻尾に k をもつ韻母の反映

2.2.7.1 通撰

a)	T	B
屋 (1) uk	<u>og</u>	$\acute{u}hi:$
沃 (1) ok	<u>og</u>	$\acute{u}hi:$
屋 (3) iuk	<u>ug</u>	$v\acute{u}hi:$
燭 (3) iok	<u>ug</u> ~ og	$\acute{u}hi:\sim v\acute{u}hi:$

<慈恩伝>

1° Uig. $wq\sim rwq$

(屋1) 穀 kuk qwq

(沃1) 僕 $b'ok$ pwq

薰 $d'ok$ $twqw$

(57) 耿世民(VII5a-18)は(tü)tsük lügのlügを炉loの音写と考えた(5a18註). しかしこのlüg(lük)はウイグル語の所有表現の名詞接尾辞であり, tütsük-lük「香-をもったもの」=「香炉」を構成する.lügは漢語ではない.

2° Uig. *wyq*

(燭3) 玉 *ɲiok kwyq*

3° Uig. *w*

(沃1) 僕 *b'ok pw*

(屋3) 福 *fiuk vw*

東(1)冬(1), 東(3)鐘(3)と同様に, 屋(1)沃(1), 屋(3)燭(3)はそれぞれ合流していた。1°の *wq rwq* の *w* と3°沃(1)の *w* には東(1)冬と同じ *u* を立てることができる。2° *wyq* の *wy* には鐘(3)と同じく *ü* を与えてよい。3°屋(3)の *w* は唇音声母と結合しているもので *u* を与えてよい。韻尾 *k* はチベット文字文献のごとく有声化し, プラーフミー文字文献のごとく摩擦音化していた可能性は大きい。ここでは *q* にウイグル語後部軟口蓋子音の一つである *ɣ* を与えたい。3°には韻尾 *k* の欠落した形式が現われる。福 *vw* は弘福寺 (*ɣuən fiuk ziəi*) のみに現われ常に *qwnk vw tsy* と表記されている。寺は他の場合は *sy* と表記されるのに, これに限って *tsy* と綴られる。これには, *fiuk* の *-k* が声門閉鎖音に変化し, それに *s-* が同化して破擦音 *ts* になったと推定することができる。したがって *vw* の *w* の後に声門閉鎖音 (·) があったと考えたい。僕は *pwq* と *pw* の二種が現われるが, いずれも僕射を構成し, 第五卷では *pwqy-'* 第七卷では *pwsy-'* と表記されている。後者の *sy-'* は明らかに射 *dɣ'ia* を表示したもので, 前者の *pwq* の *q* がよく似た文字である *s* を書き誤った可能性はある。あるいはもともと *pwqsy-'* と書かれるべきであったかもしれない。いずれにしても福や僕之 *-k* の欠落が後代書写人の手による可能性は大きい。⁽⁵⁸⁾

<他の文献>

屋(1)沃(1)には *uɣ* が現われる: 鹿 *luk luɣ* (Maitri) 督 *tok tuɣ* (U-II₃ KP). 屋(3)燭(3)には東(3)鐘(3)で立てた核母音 *ü* をもつものがある: 宿 *siuk swq sùɣ* (TT-VII P.57) 六 *liuk lwq lùɣ* (Abhi) 録 *liok lwq lùɣ* (Ts'P). 又, 韻尾 *-k* を欠落した形式もみられる: 副 *f'iuik wu* (BTT-XIII)

(58) 現存の「慈恩伝」は Šingqo-sāli の翻訳本からの書写本である。cf. Tezcan (1975 pp.10~12).

曲 kiok kiu~kúu (TT-VII₁₄), いずれの文献も後期に所属している。

2.2.7.2 宕攝

a)	T	B
鐸 (開1) âk	<u>ag</u>	ahi:
藥 (開3) iâk	<u>ag~yag</u>	ahi:

<慈恩伝>

1° Uig. 'q

(鐸開1) 洛 lâk	l'q	博 pâk	p'q
錯 ts'âk	ts'q	鶴 γâk	q'q

1°の'にはチベット文字文献, プラーフミー文字文献と同じ母音 a を与え,
qにはγを与えてよい。⁽⁵⁹⁾

<他の文献>

他でも鐸 (開1) には a_γ が立つ: 惡 'âk 'a_γ (KP) 博 pâk pa_γ (BTT-I, Maitri). 藥 (開3) に所属する 鑰 yiâk は y'q と表記されている (Mü. Pf). 韻母形式として a_γ を立てることができるが, 喻母との結合を条件としている。

2.2.7.3 梗攝

a)	T	B
陌 (開2) ak	<u>eg~ig</u>	ehi:
昔 (開3) iek	<u>ig~yig</u>	ihi:

<慈恩伝>

1° Uig. yq

(陌開2) 蹟 dz'ak	ʃyq	(昔開3) 尺 tç'iek	čyq
---------------	-----	----------------	-----

(59) Hs-X には大般若経が t'yp'ž'ky (Tez. 125), 般若経が p'ž'ky (Tez. 132) のごとく表記されている。又 Hs-III にも t'yp'ž'ky あるいは t'yp'žyky とよめる形がある (北京本35b-11)。若を Tezcan は葉韻に所属する ŋžjak (nžiak) と考えたが, これは麻 (馬開3) nžia を写したと考えるべきである。「広韻」麻 (馬開3) には若に対して, 「乾草, 又般若出釈典, ……」の記述がある。cf. 沈兼士(1985 P. 1088).

宅 d'ak čyq

百 pak pyq

2° Uig. 'q

(陌開2) 白 b'ak p'q 扱 d'ak č'q

3° Uig. yk

(昔開3) 石 ziek šyk

1°の陌に所属する yq はチベット文字、プラーフミー文字文献では e~i の核母音をもつが、庚（開2）と同じく y には後舌狭母音 i を入れて iγ の韻母形式を立てたい。2°の 'q は iγ の変種で aγ としてよい。3°昔の yk の y には i を与えておきたい(cf. TB)。-k は -γ との平行性から前部軟口蓋の有声の摩擦音化子音を入れるべきであろう。しかしここでは、ウイグル語音韻の γ に対する前部軟口蓋音である g を与えておきたい。1°の尺は定着形式で、早い時代の借用形（上古音 *t'iak (Karlgren 1957)）を留めている。因みに尺は、漢音では seki, 呉音では siyaku が立つ。

<他の文献>

他では陌（開2）に aγ の例、昔（開3）に iγ の例がみられる：帛 b'ak paγ (BTT-III) 冊 tš'ak čaγ (BTT-III) 尺 tč'iek čīγ (U-II_{7,8} BTT-XIII) 石 ziek šīγ (BTT-V Ge.Mani)。又、錫（開4）iek の例もみられる：曆 liek lig (TT-VI Maitri)~li (TT-VII₁₈) 壁 piek püg (Suv)。錫（開4）の韻母形は ig が一般形と考えられる。li は韻尾 k を欠いたもので、新しい時代の形式である。TT-VII₁₈は元朝時代に書かれた。büg の üg は唇音声母の後で ig から変化した形式と推定できる。

2.2.7.4 曾撰

a)

徳（開1）ək	<u>eg~ug</u> （唇）~ig	ihi:~ūhi:
職（開3）iək	<u>ig~eg</u>	ihi:

徳 (合1) uək	og	ūhi:
職 (合3) iuək	/	/

<慈恩伝>

1° Uig. *yĕ*

(徳開1) 徳 *tək tyk* (職開3) 識 *çiak ŷyk*

2° Uig. *yyĕ*

(職開3) 極 *g'iək kyyk*

3° Uig. *wq*

(徳合1) 国 *kuək qwq*

4° Uig. *y*

(職合3) 域 *fiuək wy*

徳 (開1) は1°で *yĕ* と表記されている。登 (開1) əŋ との平行からは *yq* *iŷ* を予想させるが、徳 *tək* は常に *tyk* と綴られている。ここでは *yĕ* に *ig* を与えておきたい。⁽⁶⁰⁾ 徳 (合1)の3° *wq* の *w* には登 (合1) と同じく *u* を入れて *uŷ* の韻母形式を立てたい。職 (開3) は1°と2°に現われる。蒸 (開3) と同じく1°の *y* には *i* を入れて *ig* を立ててよい。2° *yyĕ* には *ieg* を立てたい。職 (合3) は鼻音韻尾の対をもたないし、チベット文字やブラーフミー文字文献にも例がない。臻摂の文 (合3) *iuən* の文 *vin* 問 *vin* と同じく4°域 *wy* の *y* には *i*⁽⁶¹⁾ を入れておきたい。声母が喻母 (や唇音) でなかったら文 (合3) と同じく *ü* が与えられるであろう。域は西域記 (*siei fiuək kiçi*) に現われ、*sywyky* と表記されている。k の脱落は域の漢字音韻尾がすでに声門音化していたことを示すとも考えられるが(cf. P.78), ここでは、記の声母 *k*-と、それに前接する域の韻尾 *-k* とが表記上統合されたものと、単純に考えたい。cf. ウイグル語 *ekki* 「2」は *yky* と表記される。

<他の文献>

(60) チベット文字文献やブラーフミー文字文献では唇音あるいは牙音声母の後で円唇母音が現われるというが、多分ウイグルでもそうであったろう。

(61) 声母が喻母や唇音でなかったら、文 (合3) と同じように母音に *ü* が立つであろう。

他では識 $\text{ci}\dot{\text{q}}\text{k} \text{šig}$ (TT-VB) があるが、「慈恩伝」1°と平行する。

「慈恩伝」にはみらなかつた、江摂・覚(2)の例が他の文献には現われる：
濁 $\text{d}'\text{ok} \text{čoy}$ (TT-VB) ~ $\text{čoo}\dot{\text{y}}$ (Suv), 学 $\text{ɣ}'\text{ok} \text{xäi}$ (ETS₃). 濁に $-\text{oy} \sim -\text{oo}\dot{\text{y}}$ のごとく o の現われるのは江(2)と同じである。学の $-\text{äi}$ は後期(元朝)の形式を反映している。学は「中原音韻」では蕭豪摂に所属し、 xiau の形式をもっていた。

2.2.8 韻尾に t をもつ韻母の反映

2.2.8.1 山摂

a)	T	B
曷(1) ät	<u>ar</u>	ari
月(合3) iuet	<u>war</u> ~ ad ~ ar	/
薛(開3) iet	yer ~ war	yeri

<慈恩伝>

1° Uig. $'r$

(曷1) 達 $\text{d}'\text{ät} \text{t}'r$

2° Uig. $(y)r$

(薛開3) 薛 $\text{siet} \text{sy}r$ (月合3) 発 $\text{fiuet} \text{vr}$

1°の $'$ には寒(開1)と同じ母音 a を与えて韻母形式 ar を立てたい。2° 薛 $\text{sy}r$ には仙(開3)に与えた母音と同じ e を与えて er を立てる。又、発は母音表記をもたないが、文字 v の後で類似の字形 y が省略されたと考えて、元(合3)に立てたのと同じ母音 e を与えて韻母形式を er としたい。韻尾 t に対して r の現われるのはチベット文字、プラーフミー文字文献と平行する。

<他の文献>

曷には全て ar が立つ：薩 $\text{sät} \text{sar}$ (KIP U-II_{3,8} Sho.Ava) 褐 $\text{ɣät} \text{har}$ (Ts'P Maitri). 「慈恩伝」には現われなかつた黠(開2)黠(合2)屑(開4)がみられる：黠(開2)察 $\text{tɕ'at} \text{ča}$ (Yamada) 黠(合2)八 $\text{puät} \text{par}$ (Z. Säkiz) ~ var (Abhi BTT-XIII) 屑(開4)節 $\text{tsiet} \text{tser}$ (TT-VII) ~

ser (TT-VII). 察の韻尾 -t は欠落しているが、これは後代の形式を反映している。「中原音韻」では tʂ'a の形式が立つ。

2.2.8.2 臻撰

a)		T	B
質(3)	iět	<u>ir</u>	iri
物(3)	iuət	<u>ur</u>	viri

<慈恩伝>

1° Uig. yr (#'yr)~yyr

(質3) 乙 'iět 'yr 実 dʒ'iět syr

筆 piět pyyr

2° Uig. wr

(物3) 仏 (b'iuət→) v'iuət pwr(q'n)

3° Uig. #'wyr

(物3) 尉 'uət 'wyr

1°質(3)yr~yyr の y('y) には真(開3)と同じく i を入れて、ir~iir の韻母形式を立てることができる。TT-VIII のブラーフミー文字表記でも蜜 miět mir 乙 'iět ir が綴られている。尉 'wyr の 'wy には文(3)と同じく úi を立ててよい。仏 pwr- の wr には ur を与えるが、文(3)では唇音声母と結合する韻母には i が立つ。pwrq'n (burxan) は定着形式であった。

<他の文献>

他でも質(3)には ir が立つ⁽⁶²⁾：日 nziět žir (TT-VI)~šir (Maitri) 蜜 miět mir (UT-VII Hk) 唳 'iět 'ir (Ga. Drucke) 帙 dʒ'iět čir (Ts'P). 後期文献には韻尾の t を欠落させた形式も現われる：密 miět mui (Iduq). この形

(62) U-II(P.61) には lisib の形式がみられ漢語「食竅流鬼」に対応する。U-II の著者 F. W. K. Müller はこの形式を痢疾 liēi dz'iět の音写と考えた。しかし、ウイグル文献中、漢語韻尾 -t を -p に写した例は他にない。TT-VIII(I 7, 5) にはトカラ語(A)から借用した lešp 'Schleim' が現われる。U-II の lisib もトカラ語からの借用と考えるべきである。Csongor(1952) も lisib を痢疾の音写と考えた。

式は「中原音韻」の mui と一致する。物(3)に所属する仏は他でも pur(xan) として多数現われるが、TT-XIII には fir の形式がみられる。軽唇音声母を条件として i の立つのは、文(3)と平行する：間 mjiuən vīn.

2.2.9 韻尾にpをもつ韻母の反映

2.2.9.1 咸摂・深摂

a)

合(1) âp	<u>ab</u>	api
業(3) iɛp	ab~eb	/
葉(3) iɛp	<u>yab</u> ~ <u>eb</u> ~ab (正齒)	/
乏(3) iuep	<u>ab</u>	vapi
緝(3) iəp	<u>ib</u>	/

<慈恩伝>

1° Uig. 'p

(合1) 雜 dz'âp ts'p (乏3) 法 fiuep v'p

2° Uig. yp

(業3) 業 niɛp kyp (緝3) 十 ziəp ʃyp

(葉3) 撰 ɕiɛp ʃyp 立 liəp lyp

合(1)の雜の'には覃(1)やチベット文字、ブラーフミー文字文献と同じく a を入れたい。乏の法'にも凡(3)と同じくやはり a を入れてよい。但し、唇音声母と結合する。業と葉は「慧琳」では合流していた。業 kyp 撰 yp の y には塩(3)と同じく e を与えることができる。緝(3)に所属する十 ʃyp 立 lyp の y には侵(3)やチベット文字文献と同じく i を与えてよい。韻尾の p は p で表記されるが、k に対する g(〜ɣ)同様に有声の b を立てておきたい。

<他の文献>

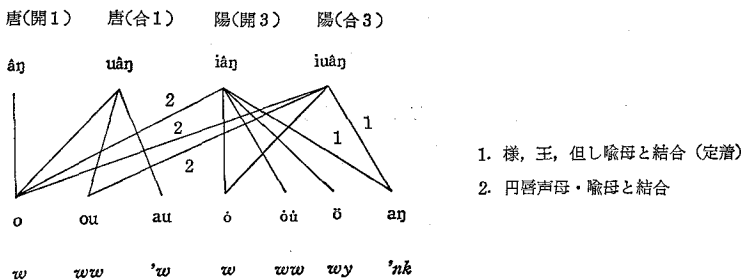
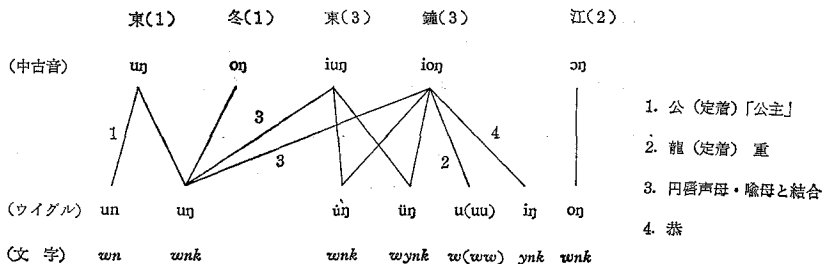
合(1)には ab の他 av も現われる：踏 t'âp tab (Sho. Ava BTT-III Suv)

合 kâp qab (Abhi)~qav (U-II 7,8), 乏(3)に所属する法はやはり fab のご

とく *ab* をもつ (U-II₇, TT-VB BUY). 「慈恩伝」には例のなかつた盍(1)狎(2)がみられる. 盍(1)にも *av* が立つ: 爛 *d'áp tav* (Maitri). 狎(2)の例, 甲 *kap* には四種の韻母表現がある: *qab* (TT-VI, VII) *qav* (TT-VI) *qyap* (TT-VIII) *kä* (Iduq). このうち, TT-VIII のブラーフミー文字表記 *qyap* には *qäb* の形式を与えることができる.⁽⁶³⁾ 狎(2)の核母音は若干狭い母音であったといえる. 又, 韻尾 *b, v*, ゼロは丁度 *b > v > ɸ* の発展過程を示すもので, 最終段階の Iduq のゼロは元朝時代の形式を反映している (cf. P. 95). 「中原音韻」では甲は *kia* の形式で現われる.

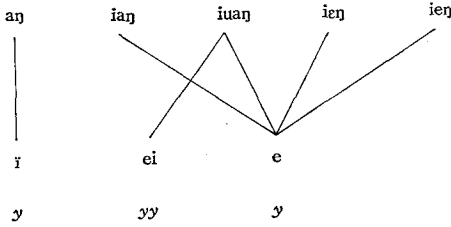
2.2.10 「慈恩伝」漢語韻母の特徴

2.2.10.1 以下に中古漢語声母とその「慈恩伝」への反映形式, 及びその表記文字との関係について図示する (cf. 2.6.1).

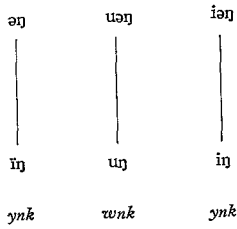


(63) TT-VIII のブラーフミー文字では *-p* が現われるが, *p b* を表わす文字の使用は混同している: /bo/ 「これ」 *bo po bho*.

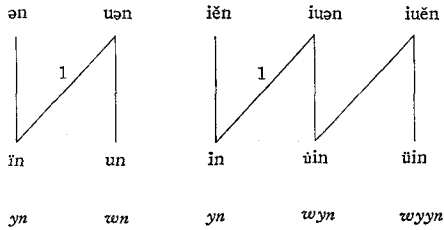
庚(開2) 庚(開3) 庚(合3) 清(開3) 青(開4)



登(開1) 登(合1) 蒸(3)

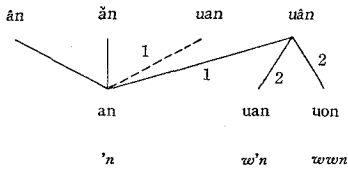


痕(1) 魂(1) 真(3) 文(3) 諄(3)



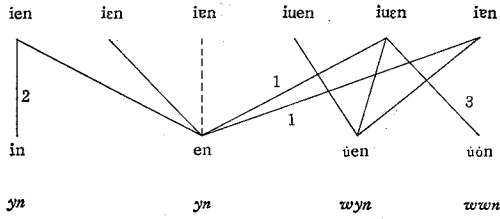
1. 唇音声母と結合

寒(1) 山(開2) 刪(合2) 桓(1)



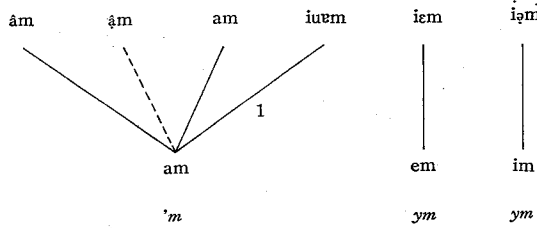
1. 唇音声母と結合, 桓(1)の般の韻尾は欠落(定滑), 「般若」
2. 牙喉音声母と結合

先(開4) 仙(開3) 元(開3) 先(合4) 仙(合3) 元(合3)



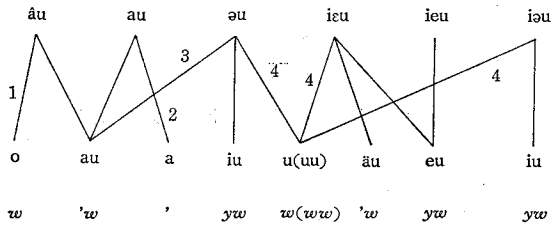
1. 喻母と結合
2. 入(定着)「道人」
3. 卷

談(1) 覃(1) 銜(2) 凡(3) 塩(3) 侵(3)

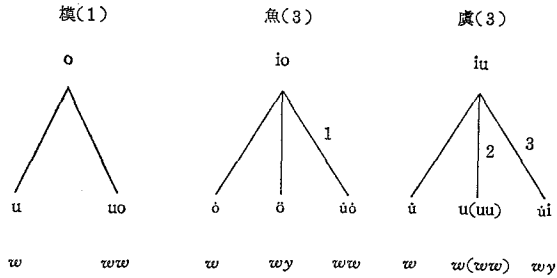


1. 唇音声母と結合

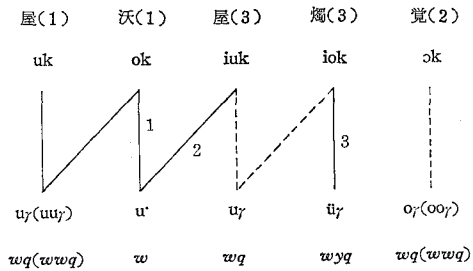
豪(1) 肴(2) 候(1) 宵(3) 蕭(4) 尤(3)



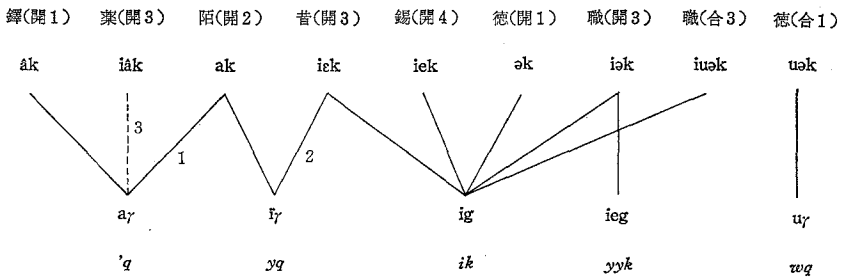
1. 道(定着)「道人」
2. 孝
3. 楼
4. 唇音声母・喻母と結合



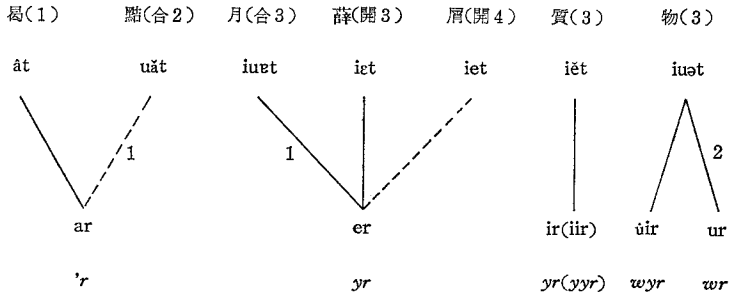
1. 上声音(cf. O)
2. 唇音声母・喻母と結合
3. 主(定着), 「公主」



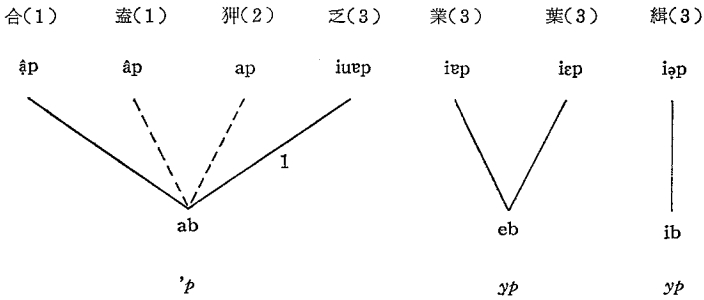
1. 模
2. 福(唇音声母と結合)
3. 玉



1. 白, 探
2. 尺
3. 喻母と結合



1. 唇声母と結合
2. 仏(定着), burxan



1. 唇声母と結合

2.2.10.2 「慈恩伝」中の漢語韻母の特徴は、介音と韻尾の表現から説明できる。

介音 i をもつ、いわゆる「齊齒呼」にはウイグル文字 y(i) で介音を直接表現する例がわずかにみられる。

射 d_z'ia šia cf. 若 n_z'ia ža

極 g'i_ək kieg cf. 識 ç'i_ək šig

しかし、上掲の若や識のように、介音は一般に核母音に吸収され、核母音は前舌音化する傾向がある。

東(3) iuŋ üŋ~ûŋ: 東(1) uŋ uŋ

鐘(3) ioŋ üŋ~ûŋ: 冬(1) oŋ uŋ

燭(3) iok üγ : 沃(1) ok uγ

業 (3) iɛp eb cf. 合 (1) ɛp ab

(宮 kiun kūŋ 鐘 tɕion čün 玉 ŋiok güŋ 業 ŋiɛp geb).

ただし、声母に唇音の立つ場合には前舌音化は起らない。すなわち i 介音による拗音性は失われる：符 v'iu fu cf. 主 tɕiu čü 馮 v'iuŋ fuŋ cf. 宮 kiun kūŋ. 又、喻母と結合するときは、介音、あるいは<介音+核母音>はゼロに交替する：融 fiun yuŋ cf. 宮 kiun kūŋ, 姚 yieu yu cf. 晁 d'ieu čeu.

介音に u をもつ「合口呼」において、声母に牙喉音をもち、広い核母音の立つ韻母の中には介音が直接表現されるものがある：覩 kuán quan ~ quon, 館 kuán quan 華 χua hua. しかし、合口介音も核母音に吸収され、核母音は後舌円唇化するものがふつうである。

登 (合1) uəŋ uŋ : 登 (開1) əŋ iŋ

魂 (合1) uən un : 痕 (開1) ən iŋ

灰 (1) uai oi : 哈 (1) ai ai

皆 (合2) uai oi : 皆 (開2) ai ai

(弘 χuəŋ huŋ 孫 suən sun 罪 dz'uai tsoi 槐 χuai hoi).

ただし、唇音声母と結合するときは、核母音は i, a に交替する：門 muən mĩn 本 puən pĩn cf. 敦 tuən tun, 般 puán pa(n).

「撮口呼」の介音 iu は前舌化円唇単音になるか、核母音に吸収され、前舌化円唇音をつくる傾向にある。

文 (3) iuən }
諄 (3) iuěŋ } uin ~ iin (訓 χiuən xuin 濬 siuěŋ sün)

元 (合3) iuən }
仙 (合3) iuən } uen (元 ŋiuən güen 宣 siuən tsüen 玄 χiuən
xüen)

祭 (合3) iuei }
齊 (合4) iuei } ui (慧 χiuei xui 遂 ziuěi sui)
脂 (合3) iuěi }

ただし唇音声母・喻母と結合するときは、核母音は *i, e* 又はゼロに交替する：
 文 *miuən vin* 問 *miuən vin* 遠 *fiuən wen fiuən wen* 銳 *fiuei wi* 備
b'iuēi pi 唯 *yiuei vi*.

チベット文字文献、プラーフミー文字文献においても、とりわけ *i* 介音は *y* 字表記によるものよりは核母音に吸収されて前舌母音を構成するものが目立つ。しかし *u* 介音は一般に *w* 字 *v* 字で表記されている。又、*iu* 介音もふつうは *w* 字 *v* 字で表記される。介音の多くが核母音に吸収される「慈恩伝」の表示はむしろウイグル語音韻に同化したやり方と考えるべきである。

一方、唇音声母の後でチベット文字文献では *wa*→*a* *wi*→*i* *wai*→*ai* *wan*→*an* *war*→*ar* の交替がある(羅 P. 66)。これは韻母から *u* 介音 *iu* 介音の唇音性の欠落を意味しており、上述「慈恩伝」のものとは一致する。(Tの例：杯 *puai pa'i* 摩 *muá 'ba* cf. 「慈」*ba*, 飯 *v'iuən ban.*) 又、チベット文字文献には、円唇声母の後で *o*→*u* *eu*→*u* *iu*→*u* の交替がある(羅 P. 66)。*iu*→*u* は {求 *g'iau gi'u* → 富 *fiəu p'u*} のごとく *i* 介音による拗音性の欠落を意味し、「慈恩伝」と平行する。*eu*→*u* は {樓 *ləu le'u*→ 茂 *məu 'bu*} のごとく直音における交替を表わすが、「慈恩伝」にも同じ交替(*iu*→*u*)がみられる：{寶 *d'əu tiu*→ 戍 *məu bu*}。*o*→*u* {杜 *d'o do*→ 布 *po pu*} の交替と平行するものは「慈恩伝」には確認できない。⁽⁶⁴⁾唇音声母と結合する際のこのような交替は、わずかではあるがプラーフミー文字文献にもみられる：本 *puən piṃni* 摩 *muá ma* 聞 *miuən viṃni* cf. 云 *fiuən yviṃni* (水谷 pp. 14, 17)。

「慈恩伝」では喻母声母が *i* 介音 *iu* 介音をもつ韻母と結合して唇音声母をもつものとよく似た交替をした。実はチベット文字文献においても分節の仕方によっては同じようなことがいえる。たとえば、尤(開3)に所属する猶遊猷 *yiau yu* を羅常培は *yu* の韻母に入れ、声母は *y* 組に入れた。すなわち *yu* の *y* は韻母と声母の両方の要素として扱われた。この *y* を声母要素専用とすれば韻母には *u* のみが残ることになる。プラーフミー文字文献でもある

(64) 「慈恩伝」では横韻には全て *u* を与えた。

程度同じことがいえる。

以上のごとく、介音と核母音との関係からみた「慈恩伝」の韻母の性格はチベット文字文献、ブラーフミー文献とよく合致している。

韻尾に関して、「慈恩伝」の最も大きな特徴は、軟口蓋鼻音 η が宕摂梗摂において脱落している点である。

宕摂→ w ($\sim ww \sim wy \sim 'w$) 梗摂→ y ($\sim yy$)

代表表記 w は o , y は e を表わす。この宕摂梗摂の韻尾 η が脱落するのはチベット文字文献（「千字文」）、ブラーフミー文字文献と共通する。又、宕摂では η 脱落后、核母音が円唇化する点もこれらと共通する。 η 脱落を核母音の種類からみると、円唇母音と \emptyset を除く母音と結合して η は脱落したことになる。円唇音をもつ通摂江摂、 \emptyset をもつ曾摂の η は脱落しない。

ところで、チベット文字文献では唐陽庚清各韻の一部はなお \dot{n} (η) を保存する。又、邱囊銘寧などの漢字のもつ鼻音声母は脱鼻音化して 'bo 'do 'be 'de とならず $mo no me ne$ として現われる。これらの事実から羅常培は、 η は完全に消失したのではなく、なお鼻音性を保存していたとし、H. Maspero (1920) の説に従って η 脱落部分に鼻音摩擦音 $[\tilde{\eta}]$ の存在を推定する（羅 pp. 38~42）。 η を脱落したものに声母の脱鼻音化がみられないのは「慈恩伝」と同じである：明 $miua\eta me$ 銘 $mien\eta me$ 。一方、ウイグル語のものに関して、Csongor は宕摂に所属する将 $tsi\dot{a}\eta$ と通摂に所属する公 $kun\eta$ には $\tilde{\eta}$ の存在の可能性を認めている（pp. 94, 96）。そしてこれらに関して次のような説明を与えている：Two glosses represent ACh-ng by n. (126) $sangun$, $s\dot{a}ng\ddot{u}n \sim$ ACh $tsi\dot{a}\eta k\ddot{j}ua\eta$ is obviously early MCh as it occurs also in the Turkish runic inscriptions in the same form; the same applies to (156) $qun\check{c}ui$ (\sim ACh $kung t's'i\ddot{u}$). Even these instances reflect a stage in the process of wearing down the-ng' (P. 97). (126) には将、(156) には公が入る。'sangun' 「將軍」は確かに 'runic inscriptions' (突厥文字碑文) や突厥文字 写本 Irk Bitig に現われる。Csongor による

とこの単語は san-gun と分析され san が將を反映しているという。この分析は Maspero (1920, P. 49)や羅常培 (1933, P. 39) によっても行われた。突厥文字には n と ŋ の区別があって、ここでは文字 ŋ が用いられている。古代チュルク語では ingäk 「牝牛」や ingän 「牝駱駝」のように n と g の結合は可能で、突厥文字でも *ing'k ing'n* と表記される。したがって Csongor のような分析は突厥文字の正書法からは無理である。saŋun は早い時代に saŋ-gun の形式で借用され、ウイグル語内で saŋun に発達した形式と考えるべきである。一方、公主も定着借用語であるが、通撰の ŋ はウイグルでは脱落しない。公 kun も「公主」以外では quŋのごとく ŋ を保っている：「趙公」čäuquŋ (Hs-VII) 「英公」'equŋ (Hs-VII). ŋ > n の変化はもとの漢語の性格を反映しているのではなく借用に際しての仲介言語形式の反映か、ウイグル語内での変化を示したものである。これらに対して、「慈恩伝」中の敬宗 *kian tsoŋ* 瀛州 *yien tçiau* は *ky'tswŋk yy'čw* と表記されており、' は n と読むこともできた(cf. PP.55~56)。もしこの' が正しく n を表わしたのであるなら、Csongor の考えたように n は ŋ 脱落に際してなお韻母末尾に鼻音性を残していたことの証拠となりうる。しかし今のところわずかに二例をみるにすぎないし、果して n であったか否かも決定できない。漢音では、漢字の結合における後接漢字の初頭音や、漢字に付く活用形初頭音の有声化が、先行する漢字の韻母末尾が鼻音性をもっていたことを示すという。しかし、ウイグルでは漢字の結合に際してそのような有声化は起っていない：皇太子 *γuän t'ai tsiçi qwt'y-tsy* ho-tai-tsi (Hs-VIII) 声明雑論 *çien miuaŋ dz'ap luən symy-ts'plwŋ* še-me-tsab-lun (Hs-IV)。太は tai, 雜は tsab のように無声の t- tsab を保っている。先に述べたが、チベット文字文献同様に、ウイグルでも明銘などの声母の脱鼻音化は起らない。しかしこれは、声母の脱鼻音化が -ŋ 脱落以前に起った変化であれば m- はそのまま残るので、このことが韻母の鼻音性保持の証拠とはならない。したがって、今後、上掲の敬や瀛のような例がウイグル文献中にまとまった量として現われるまでは、ウイグル語中の韻尾 -ŋ

脱落漢語が末尾に鼻音性を保持していたという推定はなり立たない。

羅常培によれば、入声音 $-p-t-k$ は $-b-d(-r)-g > -\beta-\delta(-r)-\gamma$ の過程を経て消失したという (P. 68)。「慈恩伝」ではこの三種入声音は $-p-r-k \sim q$ と表記されており、 $-b-r-g \sim \gamma$ の子音を与えた。他のウイグル文献では $-b$ のかわりに $-v$ の立つ例も多いのでこの三種が摩擦音化の傾向をもっていたことは確かである。チベット文字文献では $-b-d-g$ 、ブラーフミー文字文献では $-p\cdot -r\cdot -h\cdot$ の表記がみられる。ブラーフミーの $-p\cdot$ には β 、 $-r\cdot$ には δ 、 $-h\cdot$ には γ が推定されている (水谷 pp. 25~26)。ウイグル語では δ は文字 d で表示されるので、「慈恩伝」の r に δ を与えることはできない。「慈恩伝」の特徴は $-k$ に g と γ の2音が対応することである。中古漢語においては、韻尾 $-k -\eta$ はそれぞれ口蓋化された $-k' -\eta'$ と非口蓋化の $-k -\eta$ がある。 $k' \eta'$ は梗曾摂に現われ $k \eta$ は通江宕摂に現われる。「慈恩伝」をはじめとするウイグル語中のものは $\eta -\eta'$ の区別はないが、 $k-k'$ の区別に相当するものがある。通江宕摂は全て $-\gamma$ で表わされる：穀 $kuk\ qu\gamma$ (Hs-VII) 玉 $\eta iok\ g\ddot{u}\gamma$ (Hs-IX) 濁 $d\dot{u}k\ \dot{c}o\gamma$ (TT-VB) 洛 $l\dot{a}k\ l\dot{a}\gamma$ (Hs-VI)。曾摂のうち、徳(合1)は γ 、職(開3)徳(開1)は g で表わされる：国 $ku\dot{a}k\ qu\gamma$ (Hs-VI) 識 $\dot{c}i\dot{a}k\ \dot{s}ig$ (Hs-IV) 徳 $t\dot{a}k\ tig$ (Hs-V)。梗のうち陌(開2)は γ 、錫(開4)は g 、昔(開3)は $-g \sim \gamma$ が混用されている：百 $pak\ p\ddot{i}\gamma$ (Hs-IV) 歴 $liek\ lig$ (TT-VI) 石 $\dot{z}iek\ \dot{s}ig$ (Hs-X) $\sim \dot{s}i\gamma$ (BTT-V) 益 $\dot{i}ek\ yig$ (Hs-VI) 尺 $t\dot{c}'iek\ \dot{c}i\gamma$ (Hs-III)。ウイグル語のものは梗曾摂にも γ の現われるのが特徴的である。一方、漢音では ku と ki の区別があるが、その分布はウイグル語中の $\gamma\ g$ とよく似ている。異なるところはウイグルの徳と昔に γ と g の混用がみられる点である。漢音では徳に ku 、昔には ki が立つ。しかし、ウイグルにおいても徳の g 昔の γ は変種として扱えるので、基本的には漢音と同一分布の型をもっているといえる。

その他、チベット文字文献「千字文」には二重母音による韻母の表記がみられるが、それらの多くは上声字であった：組 $dzo'o$ 紡 $p'o'o$ 酒 $dz'u$ 拳 $ku'u$ 象 $sy'o'o$ (羅P.66)。「慈恩伝」にみられる二重母音表記も全体としては上声字に

現われる傾向が強いと見える。たとえば魚韻においては次のごとくである。許
xio(上) xúo 褚 t'io(上) čúo 序 zio(上) sùo 呂 lio(上) lö 臚 lio(平)
ló 如 nzio(平) žo 書 čio(平) šo.

韻尾 k の反映形のように、「慈恩伝」にはチベット文字文献やブラーフミー文字文献にはみられない特徴もあった。しかし韻母に関する特徴の多くは声母の場合と同様にこれら二つと共通するものである。

2.3 「慈恩伝」、チベット文字文献、ブラーフミー文字文献の漢語に強いて時代の順をつけるとすれば、チベット文字文献の漢語が、声母の閉鎖音・破擦音に有声音を残している点、徵母や明母の不完全な脱鼻音化、すなわち 'b をもつ点、唐陽庚清の一部になお多くの η 韻尾が現われる点から、やはり最も早い時代に属するものといえる。ブラーフミー文字文献の漢語と「慈恩伝」のものとの関係は、前者の資料上の制限のために判断はむづかしい。

3. 通時的考察

3.1 「慈恩伝」のウイグル語訳の年代にはいくつかの推定がある。A. v. Gabain はウイグル文中、洛陽に代わって洛京 (laγ-ke) が用いられていることを理由に、後唐時代に当る十世紀第二・四半期を訳出年代と推定した⁽⁶⁵⁾。これに対して馮家昇は、洛京は洛陽を指す後唐時代の正式な地名であったが、後唐以後にもなお用いられていたとし、北宋時代のウイグル語訳を推定した⁽⁶⁶⁾。森安孝夫氏は1022年の日付の入った「金光明最勝王経」の一写本断片 (T. IIY. 37) を Šinǰo Sali 訳と考へ、10世紀末～11世紀初頭の翻訳と推定した⁽⁶⁵⁾。

一方ここで扱ったチベット文字文献「千字文」は吐蕃の隴西占拠時代 (A. D. 763～857) の作と推定され (羅 pp. 2～3)、ブラーフミー文字文献は八～九世紀

(65) Gabain (1935) pp. 152～153. 森安(1985) PP. 59～60.

(66) 馮家昇 (1953) pp. 8～12. 「洛京」が「慈恩伝」では「洛陽」に限って用いられているのではないということも示した。なお、「慈恩伝」の訳出年代に、J. Hamilton は 10世紀以前という早い年代を推定している (Toalster (1977) の書評 BSOAS. Vol.41-Pt.3 P. 617.)

の時代の書写とされている(水谷 P. 1)。「慈恩伝」の漢訳が「千字文」より若干新しい特徴を示していることは上に述べたが、西北方言漢語が晩唐から宋にかけて、どのような時間と変化の関係をもっているのか正確には知られていないので、このわずかな特徴の差異からウイグル訳「慈恩伝」の書かれた年代を推定するのはむづかしい。ただ、遅く見積っても宋代半ばに至ることはないといえる。ここでは五代末から宋初の間に書かれたものと推定しておきたい。

3.2 「慈恩伝」以外のウイグル文献に現われる漢語形式の多くは「慈恩伝」にみられる、漢語の反映体系内に適合できる。これは文献自体が「慈恩伝」の時代に書かれたか、その時代に借用され定着した形式を継承したものかのいずれかと考えてよい。しかし若干のものは明らかに「慈恩伝」以前の形式を示している。そのほとんどは早い時代に借用されたもので、同じ形式が「慈恩伝」にも現われている。たとえば様、王、公主、將軍、龍、道人などがそれに該当する。「慈恩伝」より早い時代の文献で、その作成時代の漢語の特徴を確認するためには、かなり大きな時間的距離が必要である。たとえば、漢文から翻訳された「報恩経」は「慈恩伝」よりは早い時代に書かれたと推定できるが、漢語が「慈恩伝」のものより古形を保っているとはいえない。悪 *ʼāk ay* 安 *ʼân ʼan* 蓮華 *lien χua lenhua* 布施 *po qiě puši* 罪 *dzʼuái soi* 都督 *to tok tutuγ* 筓篋 *kʼuŋ γəu qunhau* (定) 仏 *bʼiuət → vʼiuət bur(xan)* (定) 公主 *kuŋ tçiu qunčui* (定) 龍 *lion lú* (定)。「定」で示したものは「慈恩伝」の反映体系に合わない定着形式である。だが最初の例(筓篋)を除くと「慈恩伝」中にも類似の形式が現われる。残りは「慈恩伝」の反映体系に適合する。やはり「慈恩伝」より早い時代に書かれたと推定できる「天地八陽神呪経」ロンドン本と京都本中の漢語は次のごとくである。

	ロンドン	京都
步廊 <i>bʼo lân</i>	<i>pulan</i>	<i>pulan</i>
真如 <i>tçien nçio</i>	<i>činzö</i>	<i>čin—</i>

含藏	ɣâm dz'ân	xömsö	xömsö
卷	kiuën	küën	/
曆日	liek nziët	ligžir	ligžir
甲	kap	qab	qav
太歳	t'ai siuei	taisüi	taisüi
等	təŋ	taŋ	/
陽	yiän	yaŋ	yo

このうち、「慈恩伝」の反映体系をはずれるものは、廊、含、等、陽（ロンドン本）の4字である。含(藏)等は定着借用語として他の文献にもみられる。

(歩)廊が定着語であったか否かの判別はむづかしい。ただ、ロンドン本の陽 yaŋ は京都本の yo に対して古い形式を保っている。陽は他のウイグル文献では一様に yo で現われる。小田寿典氏の研究(1983)によるとロンドン本は京都本より古いという。おそらく yaŋ はロンドン本の書かれた時代の漢語形式を反映しているのであろう。だがその時代に韻尾 ŋ が全て保存されていたとはいえない。(含)藏 dz'ân の韻尾はすでに脱落している。なお、ロンドン本の甲 qab に対する京都本の qav は、韻尾の摩擦音化が京都本において進んでいたことを示している。

「慈恩伝」と同じ時代か近い時代の文献は同じ反映体系を示すであろうが、ウイグル文献のほとんどは作成年代が明記されていないのでどれがその時代に当るのか判断はむづかしい。⁽⁶⁷⁾しかし、漢語を翻訳の原典とする文献で豊富な漢語をもち、それらが「慈恩伝」と同じ反映の体系を示すものは逆にその時代に近い文献といえることができる。たとえば「慈悲道場懺法」はその一つといつてよかろう。このような文献中の漢語形式は定着形式と共に「慈恩伝」の反映体系を補強し、その欠落部分を埋めてくれる。たとえば「慈恩伝」では口腔音韻尾と結合する泥母の例をもたなかったが、「慈悲道場懺法」の那 nâ na は「慈

(67) 「金光明最勝王経」は「慈恩伝」と同じ Šinqo-sāli によってウイグル語訳された。しかし現存の「金光明経」は1687年に書写されたもので、それまでの継承過程において多くの新形式の混入した可能性がある。

恩伝」にも泥母声母の脱鼻音化の進んでいなかったことを教えてくれる。

3.3 「慈恩伝」の反映体系に適合しない形式の多くは後代の新しい形式であった。それら新しい形式が「慈恩伝」からみてどう異っているのか、どんな文献に含まれているのかは興味ある問題といえる。ウイグル文字文献の最も新しいものは明代に作成された「高昌館訳語」である。この文献のいわゆる「来文」とよばれる漢語対訳ウイグル文の中には多くの漢語が含まれている。「高昌館訳語」ウイグル語はトゥルファン地方で使用されていたと推定できるので、導入漢語もその地方で用いられていたと考えてよい。但し、土着のものではなく中央のものに近かったろう。「慈恩伝」のウイグル語訳から数百年の間隔があり、漢語体系も「慈恩伝」のものとは大きく異っているので上述2章3章にはこれを含めなかった。しかし、ウイグル文字文献中の最も新しい段階の漢語形式として、他の文献中の形式との比較において重要な役割を果たす。

以下4.3.1には「高昌館訳語」中の漢語形式について述べたい。対照させる漢語には中古漢語（切韻系漢語）の他、「中原音韻」の漢語形式を掲げた。「中原音韻」を用いたのは他の文献中のものとの比較を前提としたため、明代漢語音を表わした「等韻図経」などの方が時代的には「高昌館」に近い。「中原音韻」の形式が「等韻図経」と大きく異っている場合は後者の形式も掲げる。⁽⁶⁸⁾

3.3.1 「高昌館訳語」の漢語形式

3.3.1.1 声母

<幫 p 滂 p' 並 b'>

1° Uig. p

表 piɛu(「中古」)→piɛu(「中原」) päu(「高」)

箔 b'ák→po paq 匹 p'iet→p'í pi

「高昌館」ウイグル文字にも p b の区別はない。同じ時代に作られた「畏兀

(68) 「中原音韻」の再構形は、楊耐思(1981)を用いた。又、寧繼福(1985)を参考にした。「等韻図経」の再構形は陸志章(1967)を用いた。「高昌館訳語」については Ligeti(1966~9), 胡振華・黃潤華(1981), 及びパリ国民図書館本, 東洋文庫本などを用いた。

児館訳語」で漢字表記のウイグル語において、有声音は漢語の無気音声母を、⁽⁶⁹⁾無声音は有気音声母を用いて表示されているので、上揚1°の表箔など、「中原音韻」で無気の声母はウイグル語の有声音 b で発音し、匹のような有気音は無声の p で発音されたにちがひ。しかし、別の時代に所属するウイグル文献中の漢語にこの区別があったか否かわからないので、ここではそれらに与えたのと同じ形式 p を三声母に与えて均衡を保っておきたい。

<明 m>

1° Uig. m

慕 mo→mu muu 憫 miuén→mièn min

帽 mâu→mau mau

<非 f 敷 f' 奉 v'>

1° Uig. f

法 piuep→fa fa 服 b'iuuk→fuu fuu

封 pion→fuŋ fuŋ 赴 p'iu→fu fuu

犯 b'iuem→fan fan 撫 p'iu→fu fuu

<微 m>

1° Uig. w

文 miuén→vuén→'uén (「等韻図経」) wun

聞 miuén→vuén→'uén wun

2° Uig. ·

望 miuân→vaŋ→'uaŋ 'oŋ

聞 miuén→vuén→'uén 'uun

<端 t 透 t' 定 d'>

1° Uig. t

都 to→tu tuu 通 t'uŋ→t'uŋ tuŋ

(69) 「畏兀児館訳語」の表記は次のごとくである。(cf. 庄垣内1984)

哭子 khu ts] /küz/ 「秋」：以力革力 i li ke li/ilgäri/ 「前」，塔 tha/taγ/ 「山」：打魯 ta lu /daru/ 「薬材」，批惕 phi thi/pit/ 「虱」：把児 pa ət/bar/ 「有」。

頂 tierŋ→tiəŋ tin 太 t'ai→t'ai tai

定 d'ieŋ→tiəŋ tin 同 d'uŋ→t'uŋ tuŋ

「高昌館」では t, d に関しては文字上の区別がない。「中原音韻」で無気音の立つ左側の三漢字は実際にはウイグル語の d で発音されたにちがいない。

<幫滂並>の項参照。

<泥 n>

1° Uig. n

男 nām→nam nam 年 nien→nien nän

<来>

1° Uig. l

了 lieu→lieu läu 頼 lái→lai lai

<知 t 徹 t' 澄 d' 照 tç 穿 tç' 莊 tç 初 tç'>

1° Uig. ç

中 tçiuŋ→tçiuŋ çuŋ 長 d'iaŋ→tç' aŋ çan

紵 d'io→tçiu çü 綢 d'ieu→tç'ieu çü

指 tçiei→tç'i çi 差 tç'ai→tç'ai çai

提 tçok→tçau çuo

「高昌館」には ʃ を表わす専用文字はないが、上掲左側の「中原音韻」の無気音は ʃ に読まれたにちがいない。 <幫滂並>の項参照。

<精 ts 清 ts' 從 dz' 心 s 邪 z>

1° Uig. s

曾 tsəŋ→tsəŋ sŋ 僉 ts'iem→ts'iem sām

爵 tsiak→tsieu säu 裁 dz'ai→ts'ai sai

子 tsiəi→tsi si 西 siei→si si

2° Uig. ç

子 tsiəi→tsi çi 「様子」

「畏兀児館訳語」ではウイグル語の z を漢語の ts- で表記する。⁽⁷⁰⁾したがって

(70) 呀子 ia tsʃ/yaz/ 「春」: 怕思 pha sʃ/pas/(庄垣内1984 P.80).

1°左側の「中原音韻」で ts- に対応する s が z (又は dz) に読まれた可能性は大きい。ただし、文字 s と z の弁別はない。〈幫滂並〉の項参照。2°の či は 1° si の変種と考えられる。

〈牀 dz 神 dz 山 ʃ 審 ʒ 禪 z〉

1° Uig. š

事 dz'iai→fi ši 升 ʒiɛŋ→fiɛŋ šiŋ

師 šiěi→fi ši 盛 z'iɛŋ→fiɛŋ šiŋ

2° Uig. č

誠 z'iɛŋ→tʃ'iɛŋ čiŋ

2°では中古漢語の z が「中原音韻」で tʃ' に変化している。ウイグルの形式は後者の形式を反映している。

〈見 k 溪 k' 群 g'〉

1° Uig. k

京 kiaŋ→kiɛŋ kiŋ 官 kuân→kon kon

見 kien→kien kân 謹 g'ien→kiɛn kin

居 kio→kiu kü 可 k'á→k'ó ko~kau

功 kuŋ→kuŋ kuŋ 遣 k'ien→k'ien kām

2° Uig. q

高 káu→kau qo 金 kiəm→kiəm qim

感 kām→kam qam 考 k'áu→k'au qau

敢 kām→kam qam

1°の見母はウイグル語の g に読まれたにちがいない。〈幫滂並〉の項参照。

2°の q は金以外は全て、「中原音韻」の核母音 a と結合している。

〈疑 ŋ 影・喻 fi y〉

1° Uig. y

仰 ŋiân→ŋiɛŋ→'iɛŋ(等) yaŋ 樣 yiân→'iɛŋ yaŋ

嚴 ŋiɛm→'iɛm yām 也 yia→'ie yā

因 $\cdot i\ddot{e}n \rightarrow \cdot i\ddot{e}n$ yin

又 $fi\ddot{a}u \rightarrow \cdot i\ddot{a}u$ yiu

依 $\cdot i\ddot{a}i \rightarrow \cdot i$ yi

域 $fiu\ddot{a}k \rightarrow \cdot iu$ yuu

2° Uig. · (表記ゼロ)

外 $\eta\ddot{a}i \rightarrow \cdot uai$ 'ui

違 $fiu\ddot{a}i \rightarrow \cdot uei$ 'ui

安 $\cdot \ddot{a}n \rightarrow \cdot \ddot{a}n$ 'an

惟 $yi\ddot{u}\ddot{e}i \rightarrow \cdot uei$ 'ui

穩 $\cdot u\ddot{e}n \rightarrow \cdot u\ddot{e}n$ 'un

王 $fiu\ddot{a}\eta \rightarrow \cdot u\ddot{a}\eta$ 'on

畏 $\cdot i\ddot{u}ei \rightarrow \cdot uei$ 'ui

<曉 x 匣 ɣ>

1° Uig. h

揮 $xiu\ddot{a}i \rightarrow xuei$ hui

戸 $\gamma\ddot{o} \rightarrow xu$ hu

紅 $\gamma u\eta \rightarrow xu\eta$ huŋ

寒 $\gamma \ddot{a}n \rightarrow xan$ ham

2° Uig. x

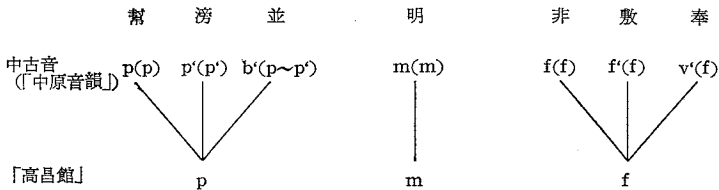
或 $\gamma u\ddot{a}k \rightarrow xuo$ (現代北京語) xuu

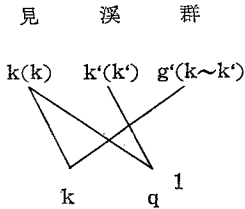
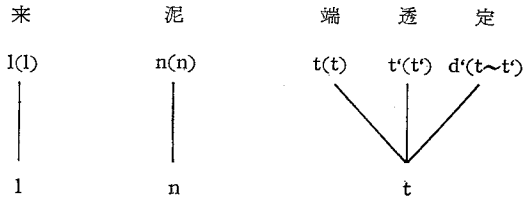
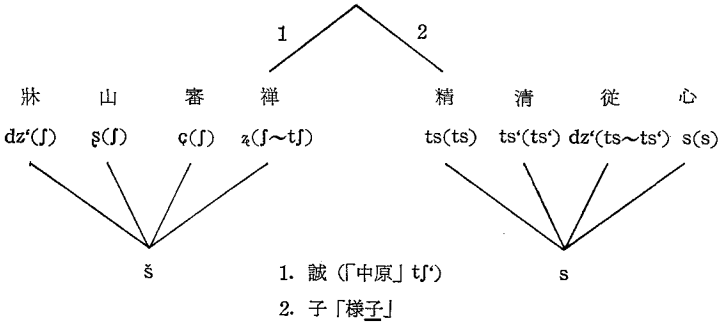
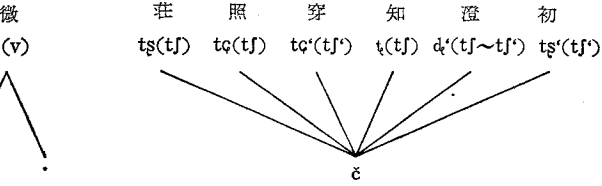
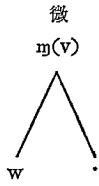
獲 $\gamma u\ddot{a}k \rightarrow xuo$ (〃) xuu

3° Uig. ·

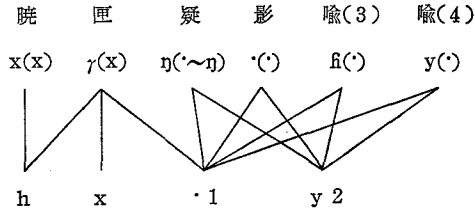
完 $\gamma u\ddot{a}n \rightarrow \cdot on$ 'on

「高昌館訳語」中の漢語の声母は中古漢語の声母形式と次のような対応を示す。「中原音韻」の形式は「高昌館」に現われたもののみ記した。





1. 「中原音韻」の核母音 a と一般に結合する。



1. 「中原音韻」の開口・合口音と結合
2. 「中原音韻」の齊齒音と結合

「高昌館」の漢語反映形式は当然のことながら中古音形式を大きく離れている。「中原音韻」よりは新しい形式もみられる。たとえば、微母の聞、望、疑母の仰は「中原音韻」より発達した形式である。しかし、全体として「中原音韻」に近い性格をもっていたといえる。「慈恩伝」と異なる主な特徴は次の六つである。

1. 「高昌館」では明母の脱鼻音化がみられない。
2. 「高昌館」微母の一部は影母と合流する。
3. 「高昌館」では精、清、從母には s が立ち、心母と合流する。
4. 見、溪母は「慈恩伝」では中古音形式の i 介音をもつ場合に k, それ以外は q が立ったが、「高昌館」では中古音形式とは無関係に、「中原音韻」で核母が広母音 a をもつものに q, それ以外に k が立つとあってよい。
5. 「高昌館」では疑、影、喻母は合流し、「中原音韻」の齊齒音には y が、開口合口音には · が立つ。但し撮口音の例はない。
6. 「高昌館」では匣母は中古音が i 介音をもたないものにも x が立つ。又、一部は影母と合流している。

3.3.1.2 韻母

通撰

1° Uig. uŋ

(東1) 同 d'uŋ → t'uŋ tuŋ

衆 tçiun → tʃuŋ čuŋ

功 kuŋ→kuŋ kuŋ (鐘3) 封 fiŋ→fuŋ fuŋ
(東3) 忠 t̚iŋ→t̚fuŋ čuŋ 龍 liŋ→liuŋ→luŋ luŋ

2° Uig. uu~u

(屋3) 服 v'iuŋ→fu fuu (沃1) 督 tok→tu tu
目 miuŋ→mu mu (燭3) 東 çioŋ→ʃu šu

江摂

1° Uig. uo

(覺2) 捉 t̚çok→t̚fau→t̚suo čuo

宕摂

1° Uig. aŋ

(唐開1) 蟒 m̄aŋ→maŋ maŋ 賞 çiaŋ→ʃaŋ šaŋ
(陽開3) 張 t̚iaŋ→t̚ʃaŋ čaŋ 仰 ŋiaŋ→ŋiaŋ→'iaŋ yaŋ

2° Uig. o

(陽開3) 昌 t̚çiaŋ t̚'ʌŋ čo

3° Uig. oŋ

(陽合3) 望 miuāŋ→vaŋ 'oŋ 王 hiuaŋ→'uaŋ 'oŋ

4° Uig. aɣ

(鐸開1) 箔 b'ak→po paɣ

5° Uig. uo

(鐸合1) 獲 ɣuāk→xuo xuo

6° Uig. äu

(葉開3) 掠 liäk→lieu→lieu läu 爵 tsiäk→tsieu→tsieu säu

2°の昌は「高昌」に、3°の箔は「金箔」に現われる定着借用語である。

梗摂・曾摂

1° Uig. iŋ

(庚開3) 京 kiaŋ→kiəŋ kiŋ 兵 piuaŋ→piəŋ piŋ
敬 kiaŋ→kiəŋ kiŋ (青開4) 定 d'ieŋ→tiəŋ tiŋ

(庚合3) 明 miuaŋ→miəŋ min 頂 tieŋ→tiəŋ tin

2° Uig. iŋ

(清開3) 盛 zɛiəŋ→ʃiəŋ→ʂəŋ ʂiŋ (登開1) 曾 tsəŋ→tsəŋ siŋ

誠 zɛiəŋ→tʃ'iəŋ→tʂ'əŋ čiŋ (蒸開3) 升 ɕiəŋ→ʃiəŋ→ʂəŋ siŋ

(青開4) 冷 liəŋ→ləŋ liŋ

陞 ɕiəŋ→ʃiəŋ→ʂəŋ siŋ

3° Uig. iŋm

(清開3) 政 tɕiəŋ→tʃiəŋ→tʂəŋ čim

4° Uig. i

(昔開3) 隻 tɕiek→tʃi či

(職開3) 即 tsiək→tsi si

(錫開4) 的 tiek→ti ti

5° Uig. ai

(陌開2) 百 pak→pai pai

6° Uig. ä

(德開1) 特 d'ək→tə tä

7° Uig. uo

(德合1) 或 ɣuək→xuo xuo

8° Uig. uu

(職合3) 域 fiuək→'iu yuu

臻攝

1° Uig. in

(真3) 辛 siēn→siən→sin sin (諄3) 憫 miuēn→miən→min min

謹 g'iēn→kiən→kin kin

2° Uig. iŋ

(真3) 鎮 ɕiēn→tʃiən→tʂən čin

3° Uig. un~uun

(文3) 文 miuən→vuən→'uən wun (魂) 穩'uən→'uən 'un

聞 miuən→vuən→'uən wun~'uun

4° Uig. i

(質3) 匹 p'iet→p'i pi 膝 siēt→→si si

1°の韻は唇音声母を条件として in をもつ。他の声母の場合は3°に入る。

山摂

1° Uig. an

(刪合2) 頒 puan→pan pan (元合3) 蕃 b'iuən→fan fan
慢 muan→man man

2° Uig. än

(山開2) 間 kăn→kian→kien kăn 年 nien→nien nän
(先開4) 隣 lien→lien län 先 sien→sien sän
(仙開3) 連 lien→lien län

3° Uig. on

(桓1) 官 kuân→kon→kuan kon 完 γuân→'on→'uan 'on
管 kuân→kon→kuan kon (仙合3) 伝 d'iuən→t'iuən→t'suan
ön

4° Uig. am

(寒1) 安 'ân→an am 寒 γân→xan ham

5° Uig. äm

(先開4) 千 ts'ien→ts'ien säm (仙開3) 遣 k'ien→k'ien käm

6° Uig. ä

(薛開3) 設 çiet→jie→še šä

咸摂・深摂

1° Uig. am

(覃1) 感 kâm→kam→kan qam (談1) 敢 kâm→kam→kan qam
男 nâm→nam→nan nam

2° Uig. äm

(咸2) 減 käm→kiam→kie käm (塩3) 僉 ts'iem→ts'iem→ts'ien säm

3° Uig. im

(侵3) 金 kiəm→kiəm→kin qim

4° Uig. aŋ

(覃1) 參 ts'əm→ts'am→ts'an san

5° Uig. an

(凡3) 犯 b'iuəm→fan fan

6° Uig. än

(嚴3) 嚴 ŋiem→'iem→'ien yän

7° Uig. a

(乏3) 法 piuep→fa fa

8° Uig. i

(緝3) 給 kiəp→ki ki

効撰・流撰

1° Uig. au

(豪1) 帽 mâu→mau mau

勞 lau→lau lau

討 t'âu→t'au tau

(侯1) 頭 d'âu→t'au tau

2° Uig. o

(豪1) 高 kâu→kau qo

3° Uig. ou

(豪1) 道 d'âu→tau tou

4° Uig. äu

(宵3) 照 tçiəu→t'fiəu čäu

(蕭4) 調 d'ieu→t'fiəu täu

表 piəu→piəu päu

了 lieu→lieu läu

5° Uig. iu

(尤3) 寿 z'ieu→'fiəu šiu

又 fiəu→'ieu yiu

久 kiəu→kiəu kiu

6° Uig. u

(尤3) 綢 d'ieu→t'fiəu→t'şəu ču

蟹摂

1° Uig. ai

(泰開1) 太 t'ai→t'ai tai (皆2) 差 tš'ai→tš'ai čai

(哈1) 戴 t'ai→tai tai

2° Uig. äi

(皆2) 皆 k'ai→kiai kai

3° Uig. i

(祭開3) 世 čiei→fi ši (齊4) 西 siei→si si

4° Uig. ui

(祭合3) 歲 siuei→suei sui (泰合1) 外 ŋuäi→'uai 'ui

(灰1) 每 muäi→muei→mei mui

止摂

1° Uig. i

(支開3) 知 tš'ie→tš'i→tš'ɿ či (之開3) 子 tš'ie→tš'i→tš'ɿ si

賜 si'ie→si'→s'ɿ si 之 tš'ie→tš'i→tš'ɿ či

(脂開3) 机 ki'ie→ki ki (微開3) 依 'ie→'i yi

指 tš'ie→tš'i→tš'ɿ či

「中原音韻」では、支脂之の各韻の齒音，職櫛の齒音は中舌音化して「支思」韻を作った。上掲中，賜指子之はこの「支思」に所属する。一方残りのものは「中原音韻」「齊微」韻に所属する。前者の Uig. の母音は中舌音化していたにちがない。しかし，ここでは他の文献との比較を前提としているため，特に中舌音化母音を表示せず一様に i を立てた。

2° Uig. ui

(支合3) 累 liue→luei→lei lui (微合3) 妃 p'iuäi→fi→fei fui

(脂合3) 惟 yiuč'i→'uei 'ui 揮 xiuäi→xuei hui

畏 'iuäi→'uei 'ui

果摂・仮摂

1° Uig. o

(歌1) 可 k'â→k'o ko

2° Uig. au

(歌1) 可 k'â→k'o kau (戈合1) 鎖 suâ→suo sau

3° Uig. a

(麻開2) 把 pa→pa pa

4° Uig. iya

(麻開2) 加 ka→kia kiya

5° Uig. ä

(麻開3) 些 sia→sie sä 也 'ia→'ie yä

遇撰

1° Uig. uu~u

(模1) 慕 mo→mu muu (虞3) 撫 f'iu→fu fuu

都 to→tu tuu 赴 f'iu→fu fuu

度 d'o→tu tu

戸 γo→xu hu

2° Uig. ü

(魚3) 居 kio→kiu→kü kü (虞3) 主 tçiu→tçiu→tçü çü

紵 d'io→tçiu→tçü çü

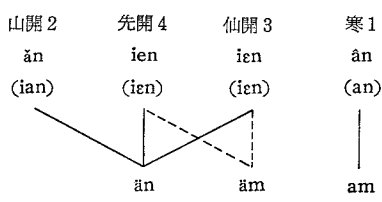
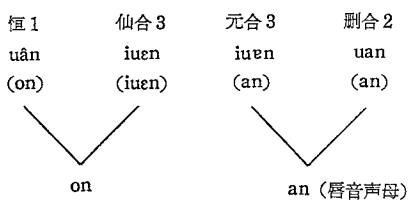
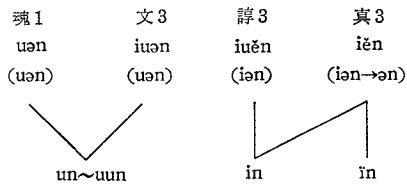
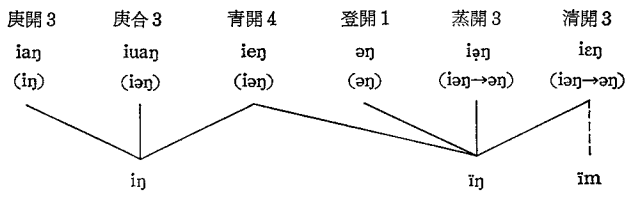
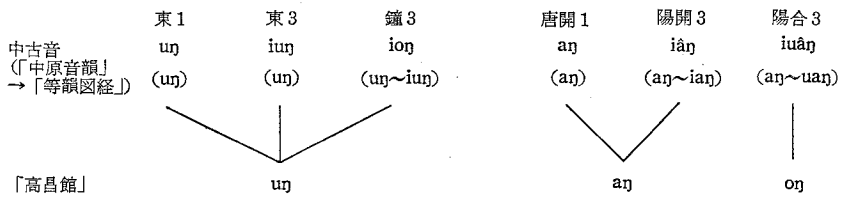
3°

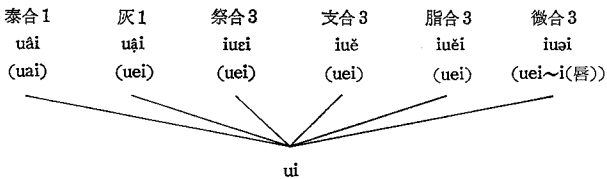
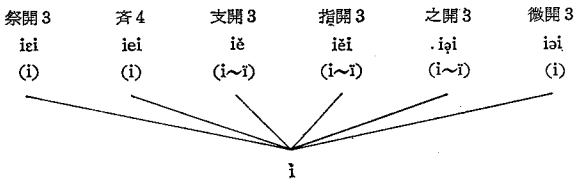
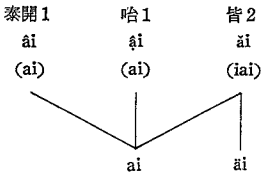
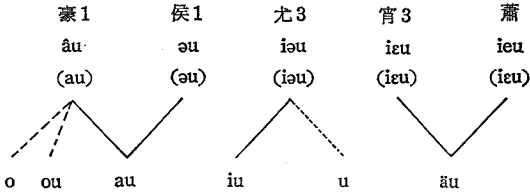
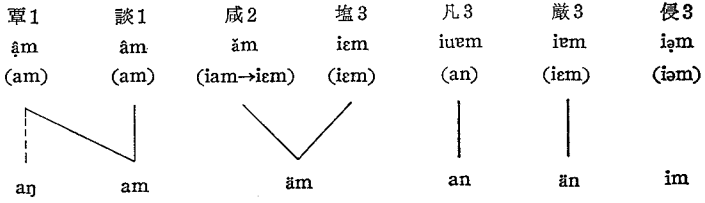
(魚3) 書 çio→çiu→çü çiu

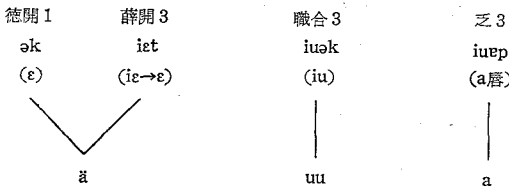
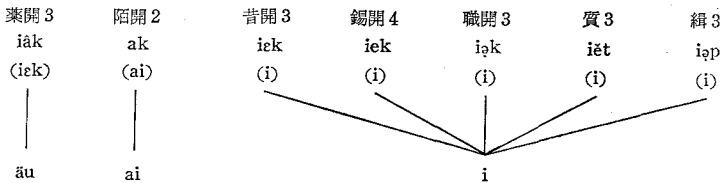
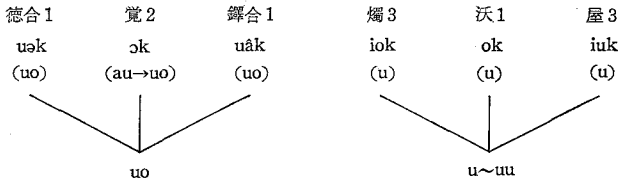
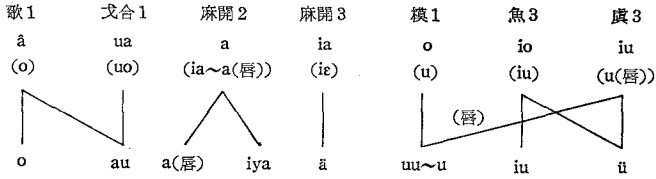
1°の虞(3)は唇音声母を条件としている。

「高昌館」中の漢語の韻母は中古漢語の韻母形式と次のような対応を示す。

「中原音韻」の形式は「高昌館」に現われたものを記した。但し定着借用語は省いた。又、破線は例外的形式を示す。







上掲図で判断できるように、「高昌館」中の漢語韻母形式は基本的には「中原音韻」の体系に適合する。「中原音韻」の韻母体系は中古音のものに比べると単純化され韻目の数も少なくなっているが、「高昌館」はその体系をよく反映している。「高昌館」に反映されている韻母形式と、「慈恩伝」のものを比べて、その特徴的な異りを抽出すると次のごとくである。

1. 「慈恩伝」では宕攝梗攝は中古音の韻尾 $-ŋ$ を欠落させ、母音の形式も変化したが、「高昌館」では $-ŋ$ は完全に現われ、又母音の変化もない。

2. 韻尾 $-p$ $-t$ $-k$ は欠落している。

3. 韻尾 $-m$ は区別されているが、 $-n$ 、 $-ŋ$ との混同がみられる。

4. 核母音 \hat{a} は o に変化した。

5. 韻母の融合によって、低母音化、脱拗音化、拗音化が起った。

中古	中原	慈	高
$ieu \rightarrow i\epsilon u$		$eu \rightarrow \ddot{a}u$	
$ien \rightarrow i\epsilon n$		$en \rightarrow \ddot{a}n$	
$i\epsilon n \rightarrow i\epsilon n$		$en \rightarrow \ddot{a}n$	
$i\epsilon m \rightarrow i\epsilon m$		$em \rightarrow \ddot{a}m$	
$iu\ddot{e} \rightarrow uei$		$\ddot{u}i \rightarrow ui$	
$iu\ddot{a}i \rightarrow uei$		$\ddot{u}i \rightarrow ui$	
$\ddot{a}n \rightarrow ian$		$an \rightarrow \ddot{a}n$	
$am \rightarrow iam$		$am \rightarrow \ddot{a}m$	

以上五項目の他、中古音と「中原音韻」との間にみられる小さな異りも「高昌館」にはよく反映されている。

「高昌館訳語」は「中原音韻」より後の時代に書かれた文献であって、時代的にはむしろ「等韻図経」に近い。声母形式においては「中原音韻」よりも発達した特徴がみられた。韻母形式においても、「中原」より新しい特徴はある。たとえば、韻尾 $-m$ が $-n$ や $-ŋ$ と混同する点などはやはり新しい特徴といえる。しかし、「等韻図経」では $-m$ は完全に $-n$ に融合しているの、少なくともこれに関しては「高昌館」の方が古形を留めている。

「高昌館」中の漢語の性格については更なる研究が必要である。

3.3.2

「高昌館訳語」は明代の作成であって、漢語音もその時代の形式をよく反映

していた。しかし「高昌館」のチュルク語は、「慈恩伝」と同じウイグル文語を継承している。そのことは「慈恩伝」漢語反映体系に適合する定着形式あるいは「慈恩伝」中の定着形式の存在からも明らかである。

鑰	iäk (中古)→iau (中原)	yaγ 「鑰(匙)」
博	pāk→pau	paγ 「博(士)」
弥	miē→mi	bi 「〔沙〕弥」
蓮	lien→lien	len 「蓮(華)」
仏	b'iuət→v'iuət→fo	bur(xan) 「仏」
龍	lioŋ→liuŋ	luu 「龍」

この最も新しい時代のウイグル語文献と「慈恩伝」との間には多くのウイグル文献が存在する。それら中間にある文献中の漢語形式が如何なる性質のものであるかについて述べてみたい。

ウイグル文献中漢語を大量に含むものに、1334年に建てられた「Iduq qut 高昌王世助碑」がある。⁽⁷¹⁾この碑文中には十干 *zi:p kân šibqan* のように「慈恩伝」の反映体系に則った定着借用語もみられるが、大体は碑文建立時代の漢語音を表記しており、「慈恩伝」よりはむしろ「高昌館」に近い特徴を示している。

1. 明母は非鼻音韻尾と結合しても、脱鼻音化しない。

密 *miēt mui*

2. 中古音で i 介音をもたない韻母と結合する牙音声母も軟口蓋前部音を立てる。

広 *kuāŋ koŋ* 高 *kâu kau* 甲 *kap kâ*

3. 疑母と喻母は合流し、「中原音韻」の開口、合口音に対応するものは・に、齊齒音に対応するものはyになる。又、撮口音にも・が立つ。

王 *fiuāŋ→'uan*(中原) 'oŋ 院 *fiuēn→'iuēn 'uēn* 元 *ŋiuēn→'iuēn 'uēn* 衙 *ŋa→'ia ya* 楊 *yiāŋ→'iaŋ yaŋ*

(71) 現在の甘肅省武威県北方にある。

4. 宕攝・梗攝の韻尾 ŋ は欠落しない。

広 kuān koŋ 相 siān sǎŋ 梁 liān lǎŋ 楊 yiān yaŋ 昌 tɕ'iaŋ cǎŋ
令 liəŋ liŋ 省 siəŋ siŋ

5. 中古漢語の閉鎖音韻尾は欠落する。

甲 kap→kia kǎ 密 miēt→muei mui

6. その他、個別の漢語音の特徴も「高昌館」や「慈恩伝」のものをよく反映している。たとえば、中古音 ɣ はふつうは「中原音韻」の一般的対応形である「*ʃ*」を写して *ʃ* を立てるが、「中原」では tɕ'iaŋ となっている丞 ɕiəŋ は「世助碑」(Iduq) でも ɕiŋのごとく声母は tɕ を写している。これは「高昌館」の誠 ɕiəŋ→tɕ'iaŋ が ɕiŋ と写されているものと平行する。又、品 p'iaŋ は「中原」では p'iaŋのごとく韻尾 m は n に融合している。「世助碑」も「中原」の形式を忠実に写している : pin.

「世助碑」の漢語形式は「高昌館」に近いが完全に一致するというものではなく、なお若干の点で「慈恩伝」に近い特徴ももっている。その一つは、「高昌館」でみられた低母音化がこの碑文にはみられないことである。

	「世」	「慈」	「高」
仙(開3)	汴 b'ien pen	禪 ɕien ʃen	連 lien lǎn
仙(合3)	院 fiuən 'uən	宣 siuən tsuən	伝 q'iuən čon

このように「世助碑」の漢語形式は、「高昌館」の近くにあつて、なおそれに至るまでの一段階をよく表わしており、ウイグル人の使用した元朝後期の漢語形式を代表しているといつてよい。

Türkische Turfan-Texte VII にも多くの漢語が含まれている。この文献の断片類は十世紀後半から十四世紀末までに書かれたもので、作成年代の推定可能なものが多い。その内、No. 14 (1323年~1328年) と No. 18 (1348年) の漢語は「慈恩伝」のものよりは「世助碑」あるいは「高昌館」に近い形式を呈している。

(72) 作成年代に関しては、Bazin (1974) に従った。

No. 14

狼 lâŋ→laŋ (中原) laŋ cf. 郎 lâŋ lo 「慈」

曲 k'ioŋ→kiu k'iu~kiu cf. 玉 ŋioŋ gŷ 「慈」

禄 luk→lu liu cf. 穀 kuk quŷ 「慈」

門 muən→muən mun cf. mín 「慈」 mun (Iduq)

文 ŋiuən→vuən vún⁽⁷³⁾ cf. vin 「慈」 vun 「高」

No. 18

定 d'ieŋ→tiəŋ tiŋ cf. te 「慈」

丁 tieŋ→tiəŋ tiŋ

庚 kaŋ→kiəŋ kiŋ cf. qī 「慈」

曆 liek→li li cf. lig (TT-VI)

戊 məu→vu 'uu cf. bu~buu 「慈」

しかし、「高昌館」にみられるような低母音化は起っておらず、やはり作成年代の似かよった「世勛碑」により近い性格を示している：廉 liem→liem lem (No. 14) cf. 兪 ts'iem→ts'iem sām 「高」天 t'ien→t'ien tien (No. 18) cf. 年 nien→nien nän 「高」。

TT-VII の No. 14 と No. 18 を除く断片にはこのような新しい形式は現われず、全て「慈恩伝」の反映体系に適合する。たとえば「十干」と「建除十二神」は次のごとくである。

丙 piuaŋ pe No. 6 (1391年) ~pei No. 5 (1367—1368) No. 7 (1398)

丁 tieŋ te No. 4 (1202) No.5 No. 6 (1391) No. 7

庚 kaŋ qī No. 1 (1368—1370) No. 5 No. 7

甲 kap qab No. 4 No. 5 No. 7 No. 10 (1202)

乙 'iët 'ir No. 4 No. 5 No. 7 No. 10

戊 məu bu No. 4~buu No. 1 No. 5 No. 7 No. 9 (988—990)

十 zīəp šib No. 1 No. 10 No. 40 (1328)

(73) Arat (Rachmati) は yun としているが y は v と読むべきであろう。(TT-VII, 14-35).

干 kân qan No. 1 No. 10 No. 40

平 b'iuan̄ pe No. 4 No. 5 No. 11 (1202)

定 d'ieŋ te No. 4 No. 5 No. 7

執 tçiəp̄ čib No. 4 No. 5 No. 6 No. 7 No. 11

建 kien ken No. 4 No. 5 No. 7 No. 38

これらの形式は全て借用定着形式であったといえる。壬 nziəm は zim (No. 5, 7, 8, 25) と同時に äzim という形式が No. 4 と No. 10 に現われる。äzim はウイグル語が初頭に *z* をもたないので、*ä* を語頭音添加してウイグル語音韻構造に適合させた形式である。No. 4 と No. 10 は他に丁甲乙戊定執建をもっている⁽⁷⁴⁾ので、「十干」「建除十二神」が No. 4 や No. 10 ではセットとして定着していたことは確かである。

一方、No. 18において、天曆 t'ien liek や泰定 t'ai d'ieŋ が tien-li tai-tiŋ と表わされるのは、これらが元朝時代の年号であったから当然当時の漢語音を写したものと理解できる。しかし、他では一般に定着形式として扱われている「十干」の項目名称も上掲のごとく丁 tiŋ 庚 kiŋ 戊 'uu の新しい形式で現われる。又、No. 14 の新しい形式は「九星」中の星の名に現われるが、巨門星 g'io muən sieŋ kô-mun-se のように星 sieŋ→siəŋ には「慈恩伝」の反映体系に則った形式が立っている。このような状況から判断して、定着形式には定着性に程度⁽⁷⁵⁾の差があったと考えられる。「十干」や「九星」の各個別名称はウイグル語の世界においてはなお完全には定着していなかったといえる。BTT-VII (B-105) には丙十干が piŋ šibqan, BTT-VIII 46.1 には丁十干が tiŋ šibqan と表記されている。「十干」という総称名は定着度が高く、項目名称は高くなかった⁽⁷⁶⁾と考えられる。

(74) Csongor (1952 P.84 P.106—註31) は Rachmati (TT-VII) のこの äzim という転写をわざわざ nziəm に訂正し、これが中古音形式を写したものとしている。しかし「慈恩伝」の反映体系では nzi は常に *z* で現われる。13世紀の文献に nzi が現われることはなかったろう。

(75) 1336年の印刷とされる (BTT-VII P. 66 註105, Zieme (1981 JA P.398)).

(76) TT-VIII4-45 には廉貞が limtin と音写されている。貞 tciəŋ は tciəŋ (中原) → tçen (現代北京語) と変化した⁽⁷⁶⁾が、TT-VII 14が写した漢語では既に *n* > *n* の変化があったのか？

BTT-XIII は頭韻詩を集めたテキストで、何れもモンゴル・元朝時代の作と推定されている。このテキストにも多くの漢語がみられるが、その中から新旧二種の形式が抽出できる。

旧形：沙弥 *ša-bi* 阿弥陀 *a-bi-ta* 蓮華 *len-xua* 博士 *paγ-ši* 尺 *čiy* 八陽經 *var-yo-ke* 金剛經 *kim-qo-ke* 觀世音 *qon-ši-im* 十干 *šib-qan* 丙 *pe* 螺貝 *la-pai*。

新形：五台山 *ʷ-tai-šan* (五 *ŋo*→*ʷ*(中原)) 相公 *sān-kun* (相 *siān*→*sian* 公 *kun*→*kun*) 太卿 *tai-kiŋ* (卿 *k'iaŋ*→*k'iaŋ*) 丁 *tiŋ* (*tien*→*tien*) 庚 *kiŋ* (*kaŋ*→*kiŋ*) 皇太后 *hoŋ-tai-hiu* (皇 *γuaŋ*→*xuaŋ*) 右丞 *yiū-čing* (丞 *ziŋ*→*t'jiŋ*) 副使 *wu-ši* (副 *f'iu*→*fu*) 皇后 *huŋ-hiu*。

旧形は定着語で、「慈恩伝」の反映体系に適合する。一方、新形は「世勛碑」や TT-VII (14, 18) と同じ体系に適合する。だが、新旧両方の反映体系にも適合しうる形式については分類の仕様がな^い：大悲 *d'ai*→*tai* *piuēi*→*puei* *taipi*。なお、皇太子 *huŋ-tai-zi* のように子 *tsi* に *ts* や *s* でなく *z* を用いるのは「世勛碑」, BUY₂, など後期の文献にみられるのでこの単語の音写形式も新しいといえる。⁽⁷⁷⁾

「世勛碑」, TT-VII, BTT-XIII は新しい時代の漢語形式をもつ代表的文献といってよい。他の後期文献中にも多くの漢語が現われるが、ほとんどは「慈恩伝」の反映体系に適合する定着形式であって、漢語を翻訳の原典としたものでさえ翻訳当時の漢語形式の導入には何故か消極的であった。それ故、定着形式に混ってまれにみられる新形式はその文献の作成年代の新しさを示す上で重要である。Ex. 丙 *piuaŋ*→*piŋ* (中原) *piŋ* (BTT-VIIB 1336 年) 正 *tčien*→*t'jiŋ* *ciŋ* (UTb 1350年, BTT-VII) 母 *məu*→*mu* *mu*(UTb) 令 *liŋ*→*liŋ* *liŋ* (UTb BTT-VIII) 湿 *čiap*→*fi* *ši* (UTb) 白 *b'ak*→*pai* *pai* (ETS 19) 蔵 *dz'aŋ*→*tsaŋ* (ETS 16, Mo. Yüan) 学 *γok*→*γiau* *xai* (ETS 16) 卿 *k'iaŋ*→*k'iaŋ*

(77) *nz* に対して *z* ではなく *s* を立てる例は、Maitrisimit の日 *šir* のように早い時代の文献にもまれにみられる。しかし、後期の文献にやはり多く現われる。BTT-XIII には真如 *čišu* 壬 *šim* 夫人 *vušin* が記されているが、*š* は表記上明確に *z* と区別されている。(cf. 2.1.3.2-c).

kinj (R.S. Chü).

3.4 これまで新しい形式といったのは、全て「世助碑」や「高昌館」に近い形式であって、モンゴル・元朝時代の形式といてよい。これらの形式と「慈恩伝」のものとの間には大きな差異がある。しかしその中間を埋めるような形式はまだ見つかっていない。たとえば、韻尾 *-p-t-k* は旧形式では保たれており、新形式では脱落している。「高昌館」で韻尾 *-m* が *-n* や *-ŋ* と混同し、中世漢語から近代漢語への過渡期の状況を示したように、*-p-t-k* が混同したような表記はみられなかった。これら韻尾の閉鎖音も一瞬のうちに消失したのではなく、韻尾 *-m* の *-n* への融合期の状況に類似した、過渡期の混乱があったはずである。⁽⁷⁸⁾ ウイグル文献中の漢語形式のこの両極性は、十一、十二世紀の文献に同定できる文献が奥書などによっては、わずかにしか確認されていない事実と一致している。⁽⁷⁹⁾

「慈恩伝」の写した漢語音が当時の西域で口語として使われていたものか、漢語使用者のもっていた漢字音であったのか、ウイグル語使用者専用の漢字音であったのか、あるいはそれ以外の音形式であったのか、明確にはできない。高田時雄氏は、トゥルフアン出土漢字文献中の、「慈悲道場懺法」に対する難字音注を記した刊本断片一葉と、「法華経」に対する難字音注を記した写本断

(78) 王力によると宗代漢語閉鎖音韻尾には次のような変化があったという。

	A	B	
陌音職 (開3)	<i>ɨək</i>	→ <i>it</i>	} A = 晚唐—五代 } B = 宋代
錫 (開4)	<i>ɨək</i>	→ <i>it</i>	
陌音職 (合3)	<i>ɨuək</i>	→ <i>iuit</i>	
錫 (合4)	<i>ɨuək</i>	→ <i>iuit</i>	

(『漢語語音史』中国社会科学出版社1985年pp.250, 296)

(79) ドイツ・トゥルフアン蒐集品中には、漢字とそのソグド文字音写形式との対照による仏典断片がある。漢字、ソグド文字各7行の小断片であるが、古代漢語音研究には重要である。このソグド文字で音写された形式については吉田豊氏の研究がある(『漢字音のソグド文字による転写について』1976未定稿)。

吉田氏はこの文献は8世紀前後に書かれたという。漢語音は全体として「慈恩伝」にみられる形式よりは、チベット文字文献のものに近い。チベット文字の *'b[mb]* *'d[nd]* *'g[ng]* に相当する形式がみられるし、舌頭音、歯頭音には有聲と無聲の対立がある。しかし、宕摂・梗摂が韻尾 *-ŋ* を完全に保存している点ではチベット文字よりは古い。なお、2.1.2. 2-a-2^o で「慈恩伝」の重が例外的に *ts* の声母形式をとったが、ソグド文字でも重には *tcwŋk* のごとく *c* の予想されるところに *ts* が立つ。重の声母が澄母中では他と異った性質をもっていたことがわかる。

片一葉について言及し、その音注の検討から、この断片がウイグル字音を基礎にして作られたと推定した (1985)。声調と声母の使用の混乱が、ウイグル語音韻構造の影響によるものと考えらるなら説明がつく、というのが同氏の推定の主な根拠といえる。確かに音注がウイグル語化された漢語体系を基盤としている可能性は大きい。高田氏はこの漢語体系を「ウイグル字音」の体系と考えている。又、「恐らくはウイグル字音は9世紀のトルファンの漢語音を基礎にして成立したものであろうと推論される。……少なくとも元代後期までは用いられていたのではないかと思われる。」(P. 137)と述べている。だが、高田氏は韻母形式については触れていない。同氏の論文 III-a-2 の「声母」に掲げられた音注漢字から、韻母について簡単に検討してみると次の二点がわかる。

1. 閉鎖音韻尾 -p -t -k は保たれている。
2. 鼻音韻尾 -ŋ は全てに保たれている。

「慈恩伝」では閉鎖音韻尾は保たれているが、-ŋ は宕攝、梗攝において欠落しているので、「慈恩伝」がこの断片に所属する「ウイグル字音」を用いたとすれば、上掲二攝の -ŋ は現われたにちがいない。

氷音平 (慈悲7)

氷 piəŋ (蒸3) cf. 仍 nziəŋ žiŋ (Hs-X)

平 biuan (庚3) cf. 平 pe(TT-VII, VIII)

明 miuan me (Hs-IV)

又、仮に「慈恩伝」のこの二攝の -ŋ が完全に消失したのではなく、鼻音性は鼻音化母音として残っており、ウイグル文字には表現されていないが、漢字音としては -ŋ と共に一類を構成できる性質のものであったと推定したなら、⁽⁸⁰⁾ -ŋ 欠落に伴って起った母音の変化は「ウイグル字音」にも反映されているにちがいない。しかし、そのような変化はうかがえない。

頃音強 (法14)

頃 k'iuəŋ (清3) cf. 環 kiuan (庚3) kei (Hs-VIII)

(清3は庚3に合流)

(80) 実際には -n との混同を免れえないであろう。

「慈恩伝」体系に基づいて頃を kei 強を kō̄ と発音したならおそらく両韻は同一音として扱われることはなかったであろう。少なくとも「慈恩伝」はこの九世紀の漢語音を基礎にした「ウイグル字音」を使っていない。「ウイグル字音」が「慈恩伝」以後に成立したとするなら、-ŋをもった中原共通語がトルファン地方で用いられるようになり、なお -p-t-k を保存していた時代のものであったと考えられる。だが、それはウイグル文化圏に広く定着していたとはいえない。定着していたのなら後期文献に韻尾の閉鎖音を欠落させた形式が現われるはずがない。この断片に関する高田氏の記述は、これからのウイグル文献研究にとって重要である。

4. 結 語

ウイグル文献中、最も多くの漢語を導入した文献は「慈恩伝」である。しかもその漢語の多くは「慈恩伝」が訳出された時代の一種の漢語形式として取り扱えるものであった。⁽⁸⁰⁾ウイグル文字には漢語を表わす専用文字や、補助記号の使用はなかったが、もとの漢語音形式がウイグル語音韻構造の中に収まるものでないことは韻母の二重母音表示などから理解できる：義宣 *ŋiē siuen kytswyn gitsüen* (Hs-X)。しかし、ウイグル文字の性格上、実際の再構形はウイグル語の音韻構造を大きく離れることはできなかった。だが再構された「慈恩伝」の漢語反映体系はもとの漢語音の性格をよく表わしていた。又、その体系はウイグル文献中の大概の漢語借用語に適合できるものであった。すなわち、ウイグル語中の漢語借用語は基本的には「慈恩伝」の訳出時代かそれに近い時代に導入されたといつてよい。「慈恩伝」の反映体系を逸脱する形式には、「慈恩伝」

(81) 「慈恩伝」漢語の再構においては、他の文献にも同形の現われる確実な借用形を除いては、漢語は一共時態上のものと仮定した。しかし、実際には若干の形式に導入時期の異りのあるのを認めざるをえない。たとえば、洛京は *layke* と再構したが、この地名は後舌母音語幹と結合する接尾辞 -qa (与格) をとるので、*layke* の e が第1音節に同化していたと推定すべきである。この地名は定着していた。「慈恩伝」中においてもこのような変化がみられるので、「慈恩伝」以後の文献中の定着借用語はウイグル語構造に大きく同化していたと考えてよい。したがって、定着借用語に関してここに提出した再構形は導入時代の形式に近いものと考えてよい。

以前に導入された形式もわずかにあったが、ほとんどは後代に所属する形式で、むしろ「高昌館」の漢語反映体系に近いものであった。

これまでに提出されたウイグル語転写テキストには、漢語からの借用とされるがなお問題を含んだ多くの形式がある。ここではそのような形式は除外した。今後、それらを詳細に検討し、上の記述を更に発展させる必要がある。

5. ウイグル文献中の漢語リスト

<通攝・江攝>

東 1

東	tun	tun	Hs-VIII
通	tun	tun	Z. Singqu TT-VIII (tun)
同	d'un	tun	Hs-IX
童	d'un	tun	BUY ₁
公	kuŋ	quŋ	Hs-I, VII BTT-I
		kuŋ	BTT-XIII
		qun	Hs-IV TT-VII U-II, III, IV
			Ts'p UTb Maitri <i>passim</i> 「公主」
筮	k'un	quŋ	U-IVA Maitri KP Mü. Pf
孔	k'un	quŋ	TT-VB
鴻	ɣun	hun	Hs-IX

冬 1

統	t'oŋ	tun	Hs-VII U-I, II USp ₁₅ <i>passim</i>
悰	tsoŋ	tsun	Hs-VII
宗	tsoŋ	tsun	Hs-IX
		sun	Hs-VII
琮	dz'oŋ	sun	Hs-IX

江 2

双	ʂoŋ	šoŋ	Hs-VII
---	-----	-----	--------

江	kɔŋ	qoŋ	Hs-VII
東 3			
馮	v'iuŋ	fuŋ	Hs-X
中	tɕiuŋ	čüŋ	Hs-VIII, IX BTT-XIII USp ₁₅
嵩	siuŋ	süŋ	Hs-VII, VIII
充	tɕ'iuŋ	čüŋ	USp _{5, 48}
宮	kiuŋ	küŋ	Hs-X
窮	g'iuŋ	küŋ	Ts'P
融	fiuŋ	yuŋ	Hs-V
鐘 3			
封	fioŋ	fuŋ	Hs-IX
重	d'ioŋ	tsü	Hs-IX
		čü	BTT-XIII
龍	lioŋ	lüŋ	Hs-X
		lüü(~lü)	Hs-VII, X Maitri BTT-III TT-VIII U-III <i>passim</i>
籠	lioŋ	luŋ	Hs-VII
鐘	tɕioŋ	čüŋ	Hs-IX
		čüŋ	Hs-VII U-III ₂ BTT-VIII Ge.Mon
恭	kioŋ	kiŋ	Hs-VII
雍	'ioŋ	'üŋ	Hs-VI
用	yioŋ	yuŋ	Z. Land
屋 1			
鹿	luk	luγ	Maitri
甌	luk	lu [~]	Hs-IV, VII
祿	luk	luγ	TT-VII ₁₇
		liu	TT-VII ₁₄

穀	kuk	qu γ	Hs-VII
沃 1			
督	tok	tu γ	U-II ₃ KP Ge.Mani Mü. Pf
僕	b'ok	pu γ	Hs-V
		pu'	Hs-VII
蕪	d'ok	tuu γ	Hs-VII
覺 2			
濁	d'ok	ɕo γ	TT-VB
		ɕoo γ	Suv
学	ɣok	xäi	ETŞ
屋 3			
福	fiuk	fu'	Hs-VII
副	f'iuk	wu	BTT-XIII
六	liuk	lü γ	Abhi
肅	siuk	sü γ	ThS
宿	siuk	sü γ	TT-VII (P. 57)
燭 3			
錄	liok	lü γ	Ts'P
曲	k'iok	kiu	TT-VII ₁₄
		küu	TT-VII ₁₄
玉	ŋiok	gü γ	Hs-IX, X

<宕攝・梗攝>

唐開 1

唐	d'än	to	Hs-V, X
堂	d'än	taŋ	TTIVI (等?)
郎	läŋ	lo	Hs-IX

廊	lãŋ	laŋ	TT-VI
狼	lãŋ	laŋ	TT-VII ₁₄
藏	dz'ãŋ	tso	Hs-III, V, VII, X BTT-VII Z.Steuer Z. Singqu Ts'P
		so	TT-VI Ga.Alt-tü UTb
		tsaŋ	ETS ₃ Mo.Yüan
并	dz'ãŋ	tso	Hs-V, VII, VIII
倉	ts'ãŋ	tsaŋ	U-I Suv Ge.Mani Sho.Ava
		saŋ	U-II Suv Z.Ernte
剛	kãŋ	qo	Hs-VII TT-VB BTT-I, XIII Ts'P
綱	kãŋ	qo	Hs-VII
庚開 2			
庚	kaŋ	qĩ	Hs-VII TT-VII TT-VIII (qe)
		kiŋ	BTT-XIII TT-VII ₁₈
衡	ɣaŋ	hĩ	Hs-VIII
陽開 3			
梁	liãŋ	lô	Hs-X BTT-I Ts'P
		lôú	Hs-VIII
		lô	Hs-VIII
		lãŋ	Iduq
良	liãŋ	lô	Hs-VII
涼	liãŋ	lô	Hs-VI
張	tãŋ	čó	Hs-IX, X
		čòú	Hs-IX
長	ɬ'ãŋ	čòú	Hs-V, VI, X K.Z.Agama
		čó	K.Z.Agama
場	ɬ'ãŋ	čãŋ	M-III BTT-XIII

將	tsiãŋ	sãŋ	ThS Z.Sklaven U-II ₃ Mü. Pf 「將軍」
蔣	tsiãŋ	tsó	Hs-IX
襄	siãŋ	só	Hs-VIII
相	siãŋ	sóu	Hs-VI
		sãŋ	BTT-XIII Iduq
章	tçiãŋ	čó	Hs-IX
璋	tçiãŋ	čó	Hs-IX
昌	tçiãŋ	čó	Hs-VII U-II ₃ Ge.Mani Iduq
			Sho.Ava 「高昌」
		čãŋ	Iduq
商	çiãŋ	šóu	BTT-I
上	ziãŋ	šö	TT-VII
常	ziãŋ	šóu	Hs-VII
尚	ziãŋ	šó	Hs-X
陽	yiãŋ	yo	TT-VI Z.Säkiz BTT-XIII
		yaŋ	TT-VI
楊	yiãŋ	you	Hs-VI
		yaŋ	Iduq
揚	yiãŋ	yo	Hs-III
		you	TT-V
樣	yiãŋ	yaŋ	Hs-V U-I Ts'P BTTI Iduq Suv
			<i>passim</i>
庚開 3			
京	kiaŋ	ke	Hs-V, VII, X
荆	kiaŋ	ke	Hs-VI BTT-XIII
敬	kiaŋ	ke(n)	Hs-IX
卿	k'iaŋ	ke	Hs-VIII

		kiŋ	BTT-XIII R.S.Chü
慶	k'ian	ke	Hs-X
		kiŋ	BTT-VIIB (註 101)
英	'ian	'e	Hs-VII, IX
清開 3			
銘	mien	me	Hs-IX
令	lien	le	Hs-VII
		liŋ	UTb BTT-VII Iduq
領	lien	liŋ	Iduq
貞	tien	če	Hs-V, VII, VIII
		čin	TT-VII ₁₄ cf. 現代北京語 tšen
鄭	d'ien	če	Hs-V
井	tsien	tsei	TT-VII
精	tsien	tse	Hs-VII BUY
淨	dz'ien	tse	U-I
省	sien	siŋ	Iduq
正	tchien	če	Hs-IV, VII, VIII
		čin	BTT-VII UTb
整	tchien	če	Hs-VIII
声	čien	še	Hs-IV Abhi
聖	čien	še	TT-VB
成	zien	če	TT-VII
瀛	yien	'e	Hs-VII
		ye(n)	Hs-VII
青開 4			
丁	tien	te	TT-VII, VIII (dhe)
		tiŋ	TT-VII ₁₈ BTT-XIII

定	d'ien	te	Hs-VII TT-VII, VIII (dhe) Feng
		tiŋ	TT-VII ₁₈
寧	nien	ne	Hs-VIII
星	sien	se	TT-VII
經	kien	ke	Hs-III, V, X Ts'P BTT-XIII Sho.Ava
唐合 1			
光	kuân	qou	Hs-IX, X
		qau	Hs-VIII
広	kuân	qo	Hs-IV
		koŋ	Iduq
皇	γuân	ho	Hs-VIII
		hau	Hs-VII
		hoŋ	TT-VII ₄₀ BTT-XIII Z.Samanta
陽合 3			
坊	fiuân	fo	Hs-X
房	v'iuân	fou	Hs-V
王	fiuân	waŋ	Hs-VII TT-VB U-II ₇ Z.Pacht
		ʔoŋ	Iduq
庚合 3			
丙	piuan	pe	TT-VII, VIII BTT-XIII
		pei	TT-VII
		piŋ	BTT-VII
平	b'iuân	pe	TT-VII TT-VIII
明	miuan	me	Hs-IV, IX, X
環	kiuan	kei	Hs-VII
永	fiuan	we	Hs-IV, VII
鐸開 1			

博	pák	paɣ	Hs-V Maitri BTT-I <i>passim</i>
洛	lák	laɣ	Hs-VII, X
錯	ts'ák	tsaɣ	Hs-V
惡	'ák	'aɣ	KP
鶴	ɣák	haɣ	Hs-VIII
陌開 2			
伯	pak	pīɣ	Hs-VIII, IX
百	pak	pīɣ	Hs-IV
白	b'ak	paɣ	Hs-VII
		pai	ETŞ
帛	b'ak	paɣ	BTT-III
宅	d'ak	čīɣ	Hs-VII
扱	d'ak	čaɣ	Hs-X
冊	tş'ak	čaɣ	BTT-III
蹟	dɣ'ak	šīɣ	Hs-VII
藥開 3			
鑰	yiák	yaɣ	Mü. Pf
昔開 3			
尺	tɕ'iek	čīɣ	Hs-III, IV, V, X U-II _{7,8} BTT-XIII
积	ɕiek	šig	Abhi
石	ɣiek	šig	Hs-X
		šīɣ	BTT-V Ge.Mani Ge.Tutum
益	'iek	yig	Hs-VI
錫開 4			
壁	piek	püg	Suv ThS
曆	liek	lig	TT-VI Maitri
		li	TT-VII ₁₈

<曾攝>

登開 1

等	təŋ	taŋ	TT-IIA, VA, VB, VI Ts'P <i>passim</i>
戥	təŋ	taŋ	TT-VB
增	tsəŋ	sīŋ	Ga.Drucke
層	dz'əŋ	tsīŋ	Hs-VIII
		sīŋ	BTT-I, III
僧	səŋ	saŋ	Maitri Ts'P TT-IVB, VI U-III BTT-III <i>passim</i> 「仏僧」
		soŋ	U-II TT-IVA
恒	ɣəŋ	hīŋ	Hs-VII

蒸 3

乘	dz'ieŋ	šīŋ	Hs-III, V TT-VB U-I Suv BTT-XIII Sho.Ava
升	ɕieŋ	šīŋ	U-II _{7,8} Hk-II BTT-XIII
丞	ziəŋ	čīŋ	BTT-XIII Iduq
仍	nziəŋ	žīŋ	Hs-X

登合 1

弘	ɣuəŋ	huŋ	Hs-VI, VII, IX
---	------	-----	----------------

德開 1

德	tək	tig	Hs-V, VIII, X
---	-----	-----	---------------

職開 3

識	ɕiək	šig	Hs-IV TTVB
極	g'ieək	kieg	Hs-VII

德合 1

国	kuək	quɣ	Hs-VI, VIII
---	------	-----	-------------

職合 3

域	fiuək	wi(g)	Hs-IV
---	-------	-------	-------

<臻攝>

痕 1

根 kən qīn Hs-IV

恩 ʔən ʔīn Hs-IV, V, VII, X BTT-XIII Feng

真 3

浜 piěn pīn Hs-V

民 miěn mīn Feng

麟 liěn līn Hs-X TT-I

陣 ɬ'iěn ɕīn Hs-VII

晋 tsiěn tsin Hs-VI, VII, IX

秦 dz'iěn tsin Hs-IX

信 siěn sin Ts'P

辛 siěn sin TT-VII, VIII (sim)

新 siěn sin TT-VII

真 tɕiěn ɕīn Hs-V, VII Z.Säkiz TT-VI Suv BUY
BTT-XIII

身 ɕiěn ʃin TT-VA Suv

仁 nɕiěn zin Hs-VII TT-VB

因 ʔiěn ʔin Hs-IV

印 ʔiěn ʔin Z. Datierung

魂 1

本 puən pīn Hs-IV Ts'P UTb Z.Steuer

門 muən mīn Hs-V KIP U-II₃ TT-VII

mun TT-VII₁₄ Iduq

敦 tuən tun Hs-VII

論 luən lun Hs-III, IV, VII TT-VB

luän TT-VB

尊	tsuən	tsun	Maitri UTb
		sun	UTb
寸	ts'uən	tsun	U-II _{5,7,8} KIP Ts'P BTT-XIII
		sun	Hk-I
存	dz'uən	sun	TT-VII
孫	suən	sun	Hs-VI, VIII
闈	k'uən	kùn	U-III _{1,3,7} U-IVC
		kúùn	BTT-XIII
文 3			
文	ɲiuən	vin	Hs-IV, VII
		vún	TT-VII ₁₄
問	ɲiuən	vin	TT-V
軍	kiuən	kùn	TT-VII
君	kiuən	kúin	Hs-VIII, IX
訓	χiuən	xúin	Hs-VII
諄 3			
倫	liuěn	lúin	Hs-X
春	tɕ'iuěn	čúän	TT-VB
濬	siuěn	süin	Hs-VIII
舜	ɕiuěn	šúin	Hs-VII
順	dz'iuěn	šúin	TT-VII
質 3			
畢	piět	pir	TT-VII
筆	piět	piir	Hs-VII
蜜	miět	mir	TT-VII, VIII Maitri Hk
密	miět	mui	Iduq
帙	ɖ'iět	čir	Ts'P

実	d _z 'iět	sir	Hs-IV BTT-VIII
日	n _z iět	ʒir	TT-VI
		ʃir	Maitri
壱	'iět	'ir	Ga.Drucke
乙	'iět	'ir	Hs-VII, IX ,X TT-VII, VIII
物 3			
仏	b'iuət ↓ v'iuət	bur(-xan)	Hs-IV Ts'P Maitri U-II _{7,8} BTT-III
			<i>passim</i>
		fir	BTT-XIII
尉	'iuət	uir	Hs-VII

<山攝>

寒 1

壇	d'ân	tan	U-II (P. 93)
攔	lân	lan	Maitri
爛	lân	lan	Hk-I
讚	tsân	tsan	Hs-X BTT-III
傘	sân	san	BTT-XIII
干	kân	qan	Hs-VII TT-VII Iduq
杆	kân	qan	Maitri
看	k'ân	qan	Hs-IX
安	'ân	'an	Hs-V, X KP Mo.Yüan Z.Sklaren
案	'ân	'an	Suv
按	'ân	'an	Yamada
漢	ɣân	han	Hs-IX
翰	ɣân	ha(n)	ETS ₅

山開 2

山	ʃân	ʃan	Hs-VII, X Ts'P BTT-XIII
---	-----	-----	-------------------------

盞	tʂǎn	čan	Hk-I
元開 3			
建	kien	ken	TT-VII, VIII (khem)
仙開 3			
汴	b'ien	pen	Iduq
麵	mien	men	Hk-I U-I ₇ USp ₇₆
禪	z'ien	šen	Hs-X, IX
善	z'ien	šen	Hs-V
乾	g'ien	ken	Hs-VII
彥	ŋien	gen	Hs-VII, X
延	fien	'en	Suv
先開 4			
天	t'ien	tien	TT-VII
殿	d'ien	ten	Hs-VII
田	d'ien	ten	Z. Steuer BTT-XIII
蓮	lien	len	TT-VIII (lem) BTT-VIII UTb ETS <i>passim</i> 「蓮華」
人	nz'ien	yin	<i>passim</i> 「道人」
堅	kien	ken	Hs-VII
顯	χien	xen	Hs-III, VIII, X TT-VB
桓 1			
般	puân	pan	TT-VB
		pa(n)	Hs-III, X BUY ₂ 「般若經」
滿	muân	man	TT-VII TT-VIII (mam)
官	kuân	quan	Ge.Mani Feng
		qan	BTT-V
館	kuân	quan	Hs-VI
觀	kuân	quan	Hs-V, VII Ts'P U-II ₃ KIP Sho.Ava

		quon	Hs-X
		qon	BTT-XIII Sho.Ava Ha.Gedicht T.K.R.Abi
删合 2			
版	puan	pan	U-II ₆
板	puan	pan	BTT-XIII Z.Datierung
元合 3			
万	ŋiuən	ban	TT-I
元	ŋiuən	gúen	Hs-IX
		gún	TT-VII
		·uən	Iduq
遠	fiuən	wen	Hs-IX
仙合 3			
軫	t̥iuən	čúen	Abhi
佗	d̥'iuən	čúen	Hs-IV, V, X
宣	siuən	tsúen	Hs-VII, X
		súen	BTT-XIII
專	t̥çiuən	čúen	Hs-IX
輓	t̥çiuən	čúen	Hs-IV, VII
卷	kiuən	kúen	TT-VI Ts'P
		kúòn	Hs-X BTT-XIII Ha.Gedicht
院	fiuən	wen	Hs-IX, X
		·uən	Iduq
兗	yiuen	wen	Hs-VI
先合 4			
玄	ɣiuən	xúen	Hs-V, VII
曷 1			

達	d'at	dar	Hs-IV
薩	sât	sar	KIP U-II _{3,8} Sho.Ava
褐	ɣât	har	Maitri Ts'P
黠開 2			
察	tʂ'at	ča	Yamada
薛開 3			
薛	siet	ser	Hs-VIII
屑開 4			
節	tsiet	tser	TT-VII
		ser	TT-VII
黠合 2			
八	puăt	par	Z.Säkiz
		var	BTT-XIII Abhi
月合 3			
爿	fiuet	f(e)r	Hs-IX
〈咸攝・深攝〉			
談 1			
南	nâm	nam	Hs-V, VII
三	sâm	sam	Hs-III, V, VII, X U-I TT-VB
			Ts'P BTT-VII, VIII Ga, Alt-tü Iduq
甘	kâm	qam	Hk-II Suv
覃 1			
貪	t'âm	tam	TT-VII
龔	k'âm	qam	Suv
含	ɣâm	ham	Ga.Drucke K.Z.Agama
		xöm	TT-VI UTb etc. 「含藏」

銜 2			
穢	tʂ'am	čam	Hs-VII BTT-XIII
讒	dz'am	čam	USp ₅₆ , 73
凡 3			
梵	v'iuəm	fam	Hs-X BTT-III
塩 3			
廉	liəm	lem	TT-VII
簾	liəm	lem	Maitri
侵 3			
品	p'iəm	pin	Iduq
林	liəm	lim	Hs-V, VII, VIII, IX ETS
檠	liəm	lim	Hs-VII, X TT-I
參	ʂiəm	š(i)m	TT-VII
壬	nziəm	zim	Hs-X TT-VII
		šim	TT-VII, VIII Z.Stab
		äzim	TT-VII
任	nziəm	zim	Hs-VII
金	kiəm	kim	Hs-VII TT-VB Ts'P BTT-I, III, XIII
錦	kiəm	kim	Hs-VIII
琴	g'iəm	kin	BTT-III
音	'iəm	'im	U-II ₃ KIP Ts'P BTT-XIII Ha.Gedicht Sho. Ava
合 1			
踏	t'ap	tab	BTT-III Suv Sho.Ava
雜	dz'ap	tsab	Hs-IV
合	kap	qab	Abhi
		qav	U-II _{7,8}

盍 1

爛 d'áp tav Maitri

狎 2

甲 kap qab TT-VI, VII, Ge.K.Mani
 qäb TT-VIII (qyap)
 qav TT-VI
 kä Iduq

業·乏 3

業 ñiep geb Hs-VIII
 法 fiuəp fab Hs-III, IV, V, VII U-II₇ TT-VB Maitri
 BUY₁

葉 3

撰 çiəp šeb Hs-IV

緝 3

立 liəp lib Hs-VII, X
 習 ziəp sib Ts'P UTb
 執 tçiəp čib TT-VII, VIII
 湿 çiəp ši BTT-XIII UTb
 十 z̄iəp šib Hs-VII TT-VII BTT-VII, XIII Iduq

<効撰>

豪 1

宝 pâu pau Hs-VIII Iduq
 報 pâu pau Suv
 道 d'âu tau Hs-VII, VIII, X Maitri M-III
 tav BTT-XIII
 to Hs-IV Ts'P Sho.Ava *passim* 「道人」

萄	d'áu	da	Hk-I, II
草	ts'áu	tsau	Hs-IX
皓	káu	qau	TT-VA
高	káu	qau	Hs-VII
		qo	U-II ₃ Ge.Mani Yamada Iduq
			Sho.Ava 「高昌」
		kau	Iduq
肴 2			
鈔	tɕ'au	čau	USp ₁₂ Iduq
		čo	Z.Pacht
教	kau	qau	Hs-IV TT-VB
孝	χau	hau	Hs-VIII
		ha	Hs-IX
宵 3			
朝	tɕieu	čeu	Hs-VIII
		čäu	TT-VII
超	t'ieu	čäu	Hs-VIII
趙	ɕ'ieu	čäu	Hs-VI, VII, VIII
晁	ɕ'ieu	čeu	Hs-V
小	sieu	seu	Hs-III, V, VII
		säv	Suv
招	tɕieu	čäu	TT-VB
照	tɕieu	ceu	Hs-X
紹	ɕieu	šäu	Hs-VII, IX
姚	yieu	yu	Hs-VIII
		yeu	Hs-VIII

蕭 4

遼	lieu	leu	Hs-V
蕭	sieu	seu	Hs-VII, VIII
堯	ɳieu	geu	Hs-IX

<流攝>

侯1

戊	məu	bu	Hs-VII TT-VII, VIII (pu)
		buu	Hs-VII, X TT-VII
		ʰuu	TT-VII ₁₈
母	məu	buu	BTT-XIII
		mu	BTT-XIII UTb
竇	d'əu	tʰu	Hs-X
豆	d'əu	du	TT-VII
樓	ləu	lau	Hs-VII
		liu	Ts'P
口	k'əu	qiu	Ts'P
后	ɣəu	hiu	TT-VII BTT-XIII Z.Samanta
篋	ɣəu	hau	KP U-IVA Mü.Pf Maitri
		hu	TT-IX hau, hu も「篋」

尤3

流	liəu	liu	Hs-V
留	liəu	liu	Iduq
柎	t'əu	ɕiu	Ts'P
秋	ts'əu	tsiu	TT-VB
秀	siəu	siv	Yamada
呪	tɕəu	ɕu	Suv
州	tɕəu	ɕiu	Hs-V, VII BTT-I Suv TT-VB

		ču	Hs-VII Mō.Yüan
周	tçïəu	čiu	Hs-VIII
収	çïəu	šiu	TT-VII
		šiv	TT-VII
守	çïəu	šiu	Hs-VIII Iduq
右	fiəu	yiu	BTT-XIII
祐	fiəu	yuu	Hs-VII
		yiu	TT-VII

〈蟹攝〉

咍 1

台	t'ai	tai	Hs-VII BTT-XIII
來	lai	lai	BTT-XIII
才	dz'ai	tsai	Hs-VIII
		sai	Yamada
開	k'ai	qai	TT-VII
咳	ɣ'ai	hai	TT-I
亥	ɣ'ai	hai	UTb

泰開 1

太	t'ai	tai	Hs-VII, VIII TT-VI BTT-XIII R.S.chü Iduq
泰	t'ai	tai	Hs-X TT-VII
大	d'ai	tai	Hs-III, V, VII, X TT-IIA, VB, VI U-I UTb Iduq
蓋	k'ai	qai	BTT-XIII

佳開 2

差	ts'ai	çai	U-II ₇
---	-------	-----	-------------------

街	kaĩ	qai	Hs-V, VII U-III ₃ , IVA BTT-III
皆開 2			
齋	tšai	čai	Hs-VII, X U-I(P. 46) Sho.Ava Sho.Agama
芥	kai	qai	UTb
骸	ɣai	hai	U-II ₃
祭開 3			
祭	tsiei	si	UTb
世	ɕiei	ši	U-II _{3,8} KIP Ts'P BTT-XII T.K.RAbi Sho.Ava
勢	ɕiei	ši	T.K.RAbi
齊開 4			
閉	piei	pi	TT-VIII
		pii	TT-VII
帝	tiei	di	Hs-X BTT-I Ts'P
弟	d'iei	ti	Hs-V, VII Ts'P BTT-III, VIII, XIII Sho.Ava <i>passim</i> 「弟子」
		te	TTVIII
提	d'iei	ti	Iduq
礼	liei	li	Z.Steuer
齊	dz'iei	tsi	Hs-VIII
西	siei	si	Hs-IV, X
灰 1			
貝	puai	pai	TT-VII Suv U-I BTT-VII, VIII UTb
昧	muai	bai	Ts'P TT-VB
内	nuai	noi	Mü. Pf
罪	dz'uai	tsoi	Hs-V KIP Maitri Ts'P U-II ₃

			BTT-III, XIII
		soi	Chuast KP TT-IIA
悔	ɣuəi	hoi	B.G.Studien
皆合 2			
槐	ɣuəi	hoi	Hs-X TT-VIII
懷	ɣuəi	hoi	Hs-VII
壞	ɣuəi	huai	U-II ₇
祭合 3			
歲	siuei	sui	TT-VI
銳	fiuei	wi	Hs-VII
齊合 4			
闕	kiuei	kui	Mü. Pf
慧	ɣiuei	xui	Hs-V, VII, X Z.Steuer
惠	ɣiuei	xui	Feng
<止攝>			
微開 3			
氣	k'iei	ki	TT-VII Ts'P UTb Mü. Pf
之 3			
理	liəi	li	Maitri
里	liəi	li	Hs-VII
李	liəi	li	Hs-VII
治	d'iəi	ci	TT-VII
子	tsiəi	tsi	Hs-V, VII, VIII, IX, X TT-I U-II ₃ Suv TT-VIII BTT-XIII Sho.Ava
		si	Hs-VII UTb BTT-III, XIII Iduq
		tse	TT-VIII
		zi	BTT-XIII Iduq BUY ₁

慈	dz'ɿəi	tsi	Hs-IV, V, VII, X
		si	BTT-XIII
司	siəi	si	Hs-VI
思	siəi	si	TT-VI
食	ziəi	si	Hs-VII Sho.Ava Sho.Agama
祀	ziəi	si	UTb
寺	ziəi	si	Hs-VII, VIII, X BTT-VIIB (註101)
		tsi	Hs-VII
士	dz'ɿəi	ši	Hs-V Ts'P ETŞ <i>passim</i> 「博士」
使	ʃiəi	ši	U-II ₇ Z.Sklaven BTT-XIII Yamada
志	tɕiəi	çi	Hs-X BTT-I
時	ziəi	ši	BTT-XIII
侍	ziəi	ši	Hs-VIII
己	kiəi	ki	Hs-VII TT-VII, VIII
基	kiəi	ki	Hs-X
記	kiəi	ki	Hs-IV
麒	g'ɿəi	ki	TT-I
忌	g'ɿəi	ki	Hs-VI, VIII
支開 3			
弥	miě	bi	U-I Ts'P BTT-III, XIII Suv TT-VII
			UTb
離	liě	li	Abhi
知	ɕiě	çi	TT-VIII (ci)
智	ɕiě	çi	Hs-V TT-VB Z.Singqu Iduq
施	ɕiě	ši	U-III, IV TT-VI M-I, III BTT-I III,
			VIII UTb BUY ₂ Maitri
匙	ziě	ši	Mü, Pf

義	ŋiě	gi	Hs-VII, X U-I
		gii	Hs-VIII
脂開 3			
毗	b'iěi	pi	Hs-VI TT-VII U-II ₃ KIP
地	d'iěi	ti	Z. Steuer
尼	niěi	ni	TT-VB
鄰	t'iěi	či	Ts'P
遲	d'iěi	či	Hs-VII
四	siěi	si	USp ₁₃
師	ŋiěi	ši	Hs-V, VII, X U-II ₇ BTT-XIII Feng
至	tçiěi	či	TT-VII UTb BTT-VII Suv K.T.R.Abi Suv
旨	tçiěi	či	BTT-VIII UTb Iduq
微合 3			
鬼	kiuəi	qui	TT-VII (P. 57)
魏	ŋiuəi	güi	Hs-IX, X
微	χiuəi	xüi	Hs-IV, VII
支合 3			
碑	piuě	pi	Hs-VII, VIII, IX Ge. Mon
嘴	tsiuě	tsüi	TT-VII
隋	ziuě	süi	Hs-VIII
窺	k'iuě	küi	Hs-X
危	ŋiuě	güü	TT-VII
		gü	TT-VIII (<i>gyu</i>)
脂合 3			
悲	piuěi	pi	Ts'P BTT-XIII
備	b'iuěi	pi	Hs-X

遂	ziuëi	súi	Hs-VI, VII
水	çiuëi	sù	Hs-VII 「水精」
癸	kiuëi	kúi	Hs-VII, IX BTT-VIIB (註101), VIII, XIII Ge.K.Mani
		kúú	TT-VII, VIII (<i>kvu</i>)
季	kiuëi	kúi	Hs-VII
唯	yiuei	vi	Hs-IV TT-VB
維	yiuei	vi	Hs-V, VIII

<果攝・仮撰>

歌 1

羅	lá	la	Hs-VII
陀	d'á	ta	U-I TT-VII UTb
那	ná	na	Ts'P
娑	ṣá	ša	KIP
阿	'á	'a	Hs-IV K.ZAgama U-I TT-VII UTb
河	ḡá	ha	Hs-VIII
		hĩ	Hs-VII

麻開 2

羣	b'a	pa	BTT-III, VIII
麻	ma	ma	Hk-I
馬	ma	ba	Hs-V, VII
沙	ṣa	ša	Hs-V, VII U-II ₃ TT-VB, VII KIP BTT-III, XIII Ts'P
家	ka	qa	Maitri
賈	ka	qa	Hs-VIII
衙	ṇa	ya	Iduq
夏	ḡa	ha	Hs-VII, VIII

麻 3

射	dʒ'ia	ʃia	Hs-VII
舍	ʧia	ʃä	TT-VB
社	ʒia	ʃi	ETʃ
若	nʒia	ʒä	Hs-X BUY ₂
		ʒi	Hs-III
伽	g'ia	kä	TT-VB

戈 1

婆	buá	pa	Hs-IX
破	p'uá	pa	Hs-VII U-II ₇ TT-VII, VIII
摩	muá	ba	Hs-IV, V
騾	luá	la	TT-I
螺	luá	la	U-I TT-VII BTT-VII, VIII Suv
鎖	suá	so	U-II ₇ KP

麻合 2

華(花)	ɣua	hua	Hs-III, VII, X TT-VB, VI Hk U-III Ts'P Sho.Ava BTT-XIII 「蓮華」
化	ɣua	hua	TT-VA
和	ɣua	hua	Ts'P

模 1

布	po	pu	Ge.Mani Z.Mani Maitri M-I, III KP BTT-I, III, XIII
補	po	pu	USp _{5,58}
普	p'o	puo	Ts'P
		pu	BTT-VIIB (註101)
蒲	b'o	pu	Hs-VII
菩	b'o	pu	U-II _{3,8} KIP Sho.Ava

步	b'ò	pu	TT-VI
葡	b'ò	pu	Hk-I, II
都	tò	tu	Hs-VII KP Ts'P Ge.Mani
			BTT-XIII Iduq
		tuò	Iduq
徒	d'ò	tu	Hs-VI
杜	d'ò	tu	Hs-VII
		tuò	Hs-VII, VIII
度	d'ò	tu	TT-VB, VII
屠	d'ò	tu	TT-IVA
爐	lò	lu	BUY ₂
租	tso	tsui	Z.Steuer
蘇	sò	su	Hs-VII Suv
		suo	Hs-III
五	ŋò	u	BTT-XIII
湖	γò	huò	Iduq
護	γò	hu	Ts'P
胡	γò	hu	Hk-I
魚 3			
褚	t'io	čúò	Hs-VI, VII
除	q'io	čúò	TT-VII
		čö	TT-VIII (cyo)
呂	lio	lò	Hs-VIII
臚	lio	lò	Hs-IX
序	zio	sò	Ts'P
		súò	Hs-VII, VIII, X BTT-I
疏	šio	šò	Yamada

所	ɕio	šo	Maitri
紓	ɕio	šo	BTT-III
書	ɕio	šo	Hs-IX
処	tɕio	čò	Maitri
如	nɕio	žò	Hs-III TT-VI BUY ₂ BTT-XIII Z.Säkiz
		žúó	BTT-XIII
巨	g'io	kó	TT-VII
魚	ɲio	gò	BTT-I
許	ɕio	xúó	Hs-IX, X
虞 3			
夫	fiu	fu	TT-I, VB BTT-XIII
		wu	BTT-XIII
府	fiu	fu	Hs-VII, VIII Iduq
傅	fiu	fuu	BTT-I
撫	f'iu	fu	Z. Sklaven
父	v'iu	fi	BTT-XIII
		buu	BTT-XIII
輔	v'iu	fu	Hs-VI
符	v'iu	fu	Hs-VIII TT-VII
		fuu	TT-VII KIP BTT-XIII
無	ɲiu	vu	Hs-VI VIII
武	ɲiu	vu	Hs-X BTT-I TT-VII Ts'P
主	tɕiu	čú	Hs-IV, X U-III Maitri
		čúi	Hs-V TT-IIA, VII KP Ts'P U-II, IV
			UTb 「公主」
珠	tɕiu	čú	Hk-II
枢	tɕ'iu	čü	Iduq

俱	kiu	kü	TT-VB
于	fiu	'üu	Hs-VIII
裕	yiü	yuü	Hs-VII
瑜	yiü	yu	TT-VB

《引用文献》

< >内は略号

- Arat, R.R. (Rachmati, G.R.), Zur Heilkunde der Uiguren, I (SPAW 1930 PP. 451~473), II (SPAW PP.401~448). <Hk-I, II>
- , Türkische Turfan-Texte VII, Berlin 1937 (SPAW 1936 Nr. 12). <TT-VII>
- , Eski Türk Şiiri, Ankara 1965. <ETŞ>
- Arlotto, A.T. The Uighur Text of Hsuan Tsang's Biography, Harvard Uni. Mass. (dissertation 未出版).
- Asmussen, J. P. X^aästväñift, Studies in Manichaeism, Kopenhagen 1965. <Chuast>
- Bang, W/A.v. Gabain, Türkische Turfan-Texte I (SPAW 1929 PP.1~30) II (SPAW 1929 PP.411~430) III (SPAW 1930 PP.183~211) IV (SPAW 1930 PP.432~450) V (SPAW 1931 PP. 323~356). <TT-I, II, III, IV, V>
- /—, Uigurische Studien, UJ10-3 1930 PP. 193~210. <B.G. Studien>
- /—/ G.R. Rachmati, Türkisch Turfan-Texte VI, SPAW 1934 PP.93~192. <TT-VI>
- Bazin, L. Les calendriers turcs anciens et médiévaux, Lille 1974.
- 沈兼士 (主編), 『廣韻聲系』上下, 中華書局 1945, 1985年再版.
- 陳宗振, 「西部裕固語中的早期漢語借詞」『語言研究』1985, 第1期.
- Csongor, B. Chinese in the Uighur Script of the T'ang-Period, AOH 2 1952 PP. 73~121.
- , Some More Chinese Glosses in Uighur Script, AOH 4 1954 PP. 251~257.
- 馮家昇, 「回鶻文寫本“菩薩大唐三藏法師傳”研究報告」『考古學專刊』丙種第一号, 1953 PP. 1~33.
- , 「元代畏兀兒文契約二種」『歷史研究』1954, 第1期 PP. 119~131. <Feng>
- /捷尼舍夫「回鶻文斌通(善斌)身契三種附控訴主人書」, 『考古學報』1958, 第2期 PP. 109~120. <Feng>
- Gabain, A.v. Die uigurische Übersetzung der Biographie Hüen-tsangs, I SPAW 1935 PP. 151~180. Briefe der uigurischen Hüen-tsang-Biographie, SPAW 1938 PP.371~414.
- , Türkische Turfan-Texte VIII Berlin 1954. <TT-VIII>
- /W.Winter, Türkische Turfantexte IX, Berlin 1958 (ADAW 1956 Nr. 2). <TT-IX>

- , Maitrisimit, Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāsika-Schule, I Wiesbaden 1957, II Berlin 1961. <Maitri>
- , Die Drucke der Turfan-Sammlung, Berlin 1967 (SDAW 1967 Nr.1). <Ga.Drucke>
- , Ein chinesisch-uirgurischer Blockdruck, Tractata Altaica, Sinor-Festschrift, 1976 PP. 203~210.
- , Alt-türkische Texte in sogdischer Schrift, Hungaro-Turcica, Studies in Honour of Julius Németh, 1976 PP.69~77. <Ga. Alt-tü>
- 耿世民, 「回鶻文摩尼教寺院文書初釈」『考古學報』1978第4期 PP. 498~516. <Ge. Mani>
- , 「回鶻文<玄奘伝>第7卷研究」『民族語文』1979 第4期 PP. 249~262.
- , Qādimqi Uygurcä iptiday drama piyesasi “Maitrisimit” (Hami nushasi) ning 2-pärdäsi häqqidiki tätqiqat TUBA Vol. 4 1980 PP. 101~156. <Maitri-H>
- / J. Hamilton, L’inscription ouïgoure de la stèle commémorative des Iduq Qut de Qočo, Turcica 13 1981 PP. 10~54. <Iduq>
- , 「回鶻文<土都木薩里修寺碑>考釈」『世界宗教研究』1, 1981 PP. 77~83. <Ge. Tutum>
- / H. J. Klimkeit, Zerstörung manichäischer klöster in Turfan, Zentral-asiatische Studien, 18 1985 PP.7~10. <Ge. K. Mani>
- , 張宝玺「元回鶻文<重修文殊寺碑>初釈」『考古學報』1986第2期 PP. 253~264. <Ge. Mon>
- Hamilton, J. R. Le conte bouddhique du Bon et du Mauvais Prince en version ouïgoure, Paris 1971. <KP>
- 羽田 亨「回鶻文の天地八陽神呪経」『羽田博士史学論文集』下 1975 PP. 64~142.
- Hazai, G./P. Zieme, Fragmente der uigurischen Version des, Jin’gangjing mit den Gāthās des Meister Fu’, Berlin 1971. <BTT-I>
- , Ein buddhistisches Gedicht aus der Berliner Turfan-Sammlung, AOH 23 1970 PP.1~21. <Ha. Gedicht>
- 胡振華/黃潤華, 『明代文獻高昌館課』新疆人民出版社 1981.
- Kara, G. Sino-uirgurische Worterklärungen, Sprachen des Buddhismus in Zentralasien, Vorträge des Hamburger Symposions vom 2. Juli bis 5. Juli 1981, 1983 PP.44~52.
- /P. Zieme, Fragmente tantrischer Werke in uigurischer Übersetzung, Berlin 1976. <BTT-VII>
- /, Die uigurischen Übersetzungen des Guruyogas, „Tiefer Weg“ von Sa-skya Paṇḍita und Mañjuśrīnāmasaṃgīti, Berlin 1977. <BTT-VIII>
- Karlgren, B. Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese, Paris 1923.
- , Grammata Serica Recensa, Stockholm 1957.
- 河野六郎『朝鮮漢字音の研究』天理時報社 1968年.
- Kudara, K./P. Zieme, Uigurische Āgama-Fragmente(1) AoF 10 1983 PP. 269~318.

<K.Z. Agama>

- /—, Fragmente zweier unbekannter Handschriften der uigurischen Xuanzang-Biographie AoF 11 1984 PP. 136~148.
- Le Coq, A.v. Türkische Manichaica aus Chotscho, I (APAW 1911) II (APAW 1919) III (APAW 1922). <M-I, II, III>
- 李新魁 (校証), 『韻鏡校證』新華書店北京發行所 1982.
- Ligeti, L. Un vocabulaire sino-ouïgour des Ming, Le Kao-tch'ang-kouan yi-chou du Bureau des traducteurs, AOH 19 1966 PP. 117~199, 257~316.
- , Documents sino-ouïgours du Bureau des Traducteurs, AOH 20, 21 1967~1968 PP. 253~306, 45~108.
- , Glossaire supplémentaire au vocabulaire sino-ouïgour du Bureau des Traducteurs, AOH 22 1966 PP. 1~49 191~243.
- 陸 志韋「記徐孝重訂司馬溫公等韻図経」『燕京学報』第32期 1947 PP.169~196.
- 羅常培, 『唐五代西北方音』国立中央研究歴史語言研究所 上海 1933. <T>
- Maspero, H. Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang, BEFEO XX 1920 PP.1~124.
- 水谷真成, 「Brāhmī 文字転写『羅什訳金剛経』の漢字音」『名古屋大学文学部十周年記念論集』1958 PP. 748~774.
- 護 雅夫「ウイグル葡萄園壳渡文書」『東洋学報』42—4 PP. 22—50.
- 森安孝夫, 「元代ウイグル仏教徒の一書簡」『内陸 アジア・西アジアの社会と文化』1983 PP. 209~231. <Mo. Yüan>
- , 「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答(P. t. 1292)の研究」『大阪大学文学部紀要』第25巻 1985 PP. 1~85.
- Müller, F.W.K. Uigurica, I (APAW 1908) II (APAW 1910) III (APAW 1922) IV (hrsg. von A.v. Gabain, SPAW 1931 PP.675~727). <U-I, II, III, IV>
- , Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden, APAW 1915. <Mü. Pf>
- 寧繼福, 『中原音韻表稿』吉林文史出版社 1985.
- 小田寿典「龍谷大学図書館蔵ウイグル文八陽経の断片拾遺」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』1983 PP. 161~184.
- Pelliot, P. Kao-tch'ang, Qoço, Houo-tcheou et Qarâ-Khodja, JAs XIX, PP.579~603.
- Radloff, W. Kuan-ši-im Puser, St.Petersburg 1911, Bibliotheca Buddhica XIV. <KIP>
- , Uigurische Sprachdenkmäler, Leningrad 1928. <USp>
- /S.E. Malov, Suvarṇaprabhāsa, St.Petersburg 1913~1917 Bibliotheca Buddhica XVII. <Suv>
- Pulleyblank, E.G. Middle Chinese: A Study in Historical Phonology, Vancouver 1984.
- Röhrborn, K. Ein uigurische Totenmesse, Berlin 1971. BTT-II. <Ts'P>
- /O.Sertkaya, Die alttürkische Inschrift am Tor-Stüpa von Chü-yung-kuan ZDMG 130 1980 PP. 304~339. <R.S. Chü>

- 庄垣内正弘, 「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212(109) について」『東洋学報』第56卷1号 1974 PP. 044—057. <UTb>に重複.
- , 「ウイグル語写本・大英博物館蔵 Or. 8212—108について」『東洋学報』第57卷1・2号 1976 PP. 017~035. <BUY₁>に重複.
- , 「中村不折氏旧蔵ウイグル語文書断片の研究」『東洋学報』第61卷1・2号 1979 PP. 01~029.
- , 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究—「観音経に相応しい三篇の Avadāna」及び「阿含経」について』神戸外大 I (1982) II (1985). <Sho. Ava> <Sho. Agama>
- , 「『畏兀兒館譯語』の研究—明代ウイグル口語の再構—」『内陸アジア言語の研究』I 神戸外大 1984 PP. 51~172.
- 高田時雄, 「ウイグル字音考」『東方学』第70輯 1985 PP. 134~150.
- Tekin, Ş. Abhidharma, kośa-bhāṣya-ṭikā tattvārtha-nāma, (Facsimile) New York 1970.
<Abhi>
- , Buddhistische Uigurica aus der Yüan Zeit Teil I: Hsin Tözin oqidači Nom, Teil II: Die Geschichte von Sadāpra-rudita und Dharmodgata Bodhisattva, Wiesbaden 1980.
<Teil I=BUY₁ Teil II=BUY₂>
- , Kuanši im Pusar, Erzurum 1960. <KIP>
- , Maitrisimit nom bitig I-II, Berlin 1980, BTT-IX. <Maitri>
- Temir, A./K. Kudara, /K. Röhrborn, Die alttürkischen Abitaki-Fragmente des Etnografya Müzesi, Ankara, Turcica XVI 1984 PP. 13~28. <T.K.R. Abi>
- Tezcan, S. Das uigurische Insadi-Sūtra, Berlin 1974. <BTT-III>
- , Eski Uygurca Hsüan-Trang Biyografisi X Bölüm, Ankara 1975.
- Thomsen, V. Dr. M.A. Stein's Manuscripts in Turkish „Runic“ Script from Miran and Tun-huang, JRAS 12 1912 PP.181~227. <ThS>
- Toalster, J.P.C. Die uigurische Xuan-Zang-Biographie, 4. Kapitel mit Übersetzung und Kommentar, Gießen 1977.
- Tuguševa, L. Ju. Fragmenty uigurskoj versii biografii Sjuan'-Czana, Moskau 1980.
- , Uigurskaja versija biografii Sjuan'-Czana (fragmenty iz gl. X), Pis'mennye pamjatniki Vostoka 1971, Moskau 1974 PP. 253~296.
- Warnke, I. Ein buddhistische Lehrschrift über das Bekennen der Sünden, Fragmente der uigurischen Version des Cibeï-daochang-chanfa, Berlin 1978 (Dissertation 未出版).
<Ts'P>
- , Fragmente des 25. und 26. Kapitels des Kšanti qilyuluq nom bitig, AFo 10 1983 PP. 243~268. <Ts'P>
- 山田信夫, 「ウイグル文貸借契約書の書式」『大阪大学文学部紀要』第Ⅻ卷1965 PP.89~216.
<Yamada>
- , 「ウイグル文奴婢文書及び養子文書」『大阪大学文学部紀要』第Ⅻ卷 1972 PP.156

~269. <Yamada>

楊耐思, 『中原音韻音系』 中国社会科学出版社 1981.

Zieme, P. Ein uigurischer Landverkaufsvertrag aus Murtuq, AoF I 1974 PP. 295~308.

<Z. Land>

—, Zur buddhistischen Stabreimdichtung der alten Uiguren, AOH29 1975 PP. 187~211.

<Z. Stab>

—, Manichäisch-türkische Texte, Berlin 1975. <BTT-V>

—, Ein uigurischer Erntesege, AoF III 1975 PP. 109~143. <Z. Ernte>

—, Singqu Säli Tutung-Übersetzer buddhistischer Schriften ins Uigurische, Tractata Altaica, Festschrift D. Sinor, Wiesbaden 1976, PP.767~775. <Z. Singqu>

—, Drei neue uigurische Sklavendokumente, AoF 1977 PP.145~170. <Z. Sklaven>

—, Uigurische Pacht Dokumente AoF VII 1980 PP. 179~245. <Z. Pacht>

—, Bemerkungen zur Datierung uigurischer Blockdrucke, JAs 269 1981 PP. 385~399.

<Z. Datierung>

—, Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster, AoF VIII 1981 PP. 237~263. <Z. Steuer>

—, Zum uigurischen Samantabhadracaryāpranīdhāna, Studia Turcologica Memoriae Alexi Bombaci Dicata, Neapel 1982 PP. 599~609. <Z. Samanta>

—, Colophons to the Säkiz yükmäk yaruq, AoF 10 1983 PP. 143~149. <Z. Säkiz>

—/ G.Kara, Ein uigurisches Totenbuch, Nāropas Lehre in uigurischer Übersetzung von vier tibetischen Traktaten nach der Sammelhandschrift aus Dunhuang British Museum Or. 8212 (109), Budapest 1978. <UTb>

—, Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren, Berlin 1985. <BTT-XIII>

「慈恩伝」 = <Hs>

(1986年9月 天津)